

「何だ」

龍之助は懶けな返事をしました。

「貴方は昨晚何處へお出でになりました、もしあの向ふの水車小屋の方へお出でになりはしませんか」

「水車小屋の方へ行つた」

「さうして其處で何をなさいました」

「其處で何もしない」

「何か御覧になりはしませんでしたか」

「別に何も……見ようと思つても見えはせぬわい」

「あの十八になる村の娘さんご道で行き合ふやうな事はありませんでーんらうね」

「は、は、は」

龍之助は笑ひました。何の意味ある笑ひ方であつたかお銀様には少しもわかりませんでした。

「あ、怖ろしい」

お銀様は總身へ水をかけられたやうになりました。

龍之助はクルリと背を向けて返事をしませんでした。

お銀様は怖ろしい形相をして寝返りを打つた龍之助の後姿を、それから、自分が昨夜怪しみなが

らも龍之助に言ひつけられた通りを書いた帳面を見比べてゐましたが、やがて、荒々しく立つて龍之助を揺すり起して、その帳面を見えない眼先へ突きつけて、

「左の乳の下……可哀相に罪もない村の娘さんの左の乳の下を抉つて殺してお濠さやらへ投げ込んだのは貴方でございませう、なぜ貴方は其のやうな事をなさいました、其のやうな事をしなければならぬといふのは如何したわけでございます、さうして置いて歸つて来て、わたしに此の帳面を書かせやうとは、そりやまあ何といふ仕業でございませう」

「其れは今に始まつた事ではない」

さ龍之助は云ひました。さう云ひながら起き上りました。

「甲府にゐた時噂にも聞いたらうが、夜な／＼辻斬をして市中を騒がせたのは、皆んな拙者の仕業じゃ」

「エ、貴方があの辻斬の本人」

「それを今知つて驚いたからさて遅い、昨夜はまたむら／＼と其の病が起つて、居ても立つても居られぬから、つい彼んな事をし出来した」

「あ、何といふ怖ろしい事、人を殺したいが病さは」

「病ではない、それが拙者の仕事じゃ、今までの仕事もそれ、これからの仕事もそれ、人を斬つて見るより外に、おれの仕事はない、人を殺すより外に楽しみもない、生甲斐もない」

「わたしは何と云つて宜いかわかりませぬ、貴方は人間ではありませんせぬ」  
 「もさより人間の心ではない、人間といふ奴が斯うしてウヨ／＼生きてはゐるけれど、何一つ仕  
 出かす奴等ではない」

「貴方は其れほど人間が憎いのですか」

「馬鹿な事、憎いといふのは、幾らか見處があるからじや、憎むにも足らぬ奴、何人斬つたから  
 さて、殺したからさて、咎にも罪にもなる代物ではない」

「本氣で左様いふ事を仰有るのでございますか」

「勿論本氣、世間には位を欲しがつて生きてゐる奴がある、金を貯めたいから生きてゐる奴があ  
 る、おれは人が斬りたいから生きてゐるのだ」

「あ、神も佛もない世の中、それで生きて行かれるならば」

「神や佛、そんなものが有るか無いか、拙者は知らん、ちよつと水が出たからさて百人千人はプ  
 ン流されるほどの人の命じや、疫病神が出て采配を一つ振れば五萬十萬の要らない命が直に其處  
 へ集まるではないか、これからの拙者が一日一人づゝ斬つて見たからさて知れたものじや」

「あ、怖ろしい」

「眞實、それが怖ろしければ、今のうちに此處を去るがよい」

「それでも斯うなつた上は」

「斯うなつた上は是非がないと知つたならばお前は、拙者のする事を黙つて見てゐるがよい」

「あ、わたしは一層、貴方に此處で殺されてしまひたい」

「何時かさういふ時もあるらう、その帳面の一番終ひへ、お前の名を書いて歳を入れずに置くが宜  
 い」

「あ、わたしは地獄へ引き落されて行くのでございます」

「地獄の道づれが忌か」

「忌やと云つても應と云つても、斯うなつたからは仕方がございませぬ、わたしは如何したら宜  
 うございませう」

「何と云つても甲州の天地は狭いから、兎も角もこれから江戸へ行くのじや、恐らくお前は生涯、  
 拙者の面倒を見なければなるまい」

「わたしは怖ろしくて堪まりません、けれども如何して宜いかわかりません、それでもわたしは  
 貴方と離れようとは思ひません」

「黙つて拙者のする事を見てゐて呉れ」

「黙つて見ては居られませぬ、わたしも貴方と一緒に生きてゐる間は、貴方のやうな悪人になら  
 なければ生きては居られませぬ」

三

惠林寺の師家に慢心和尚といふのがあります。

惠林寺が夢窓師の開山であつて信立の歸依の寺であり、柳澤申斐守の菩提寺であるといふこと、信長が此の寺を焼いた時、例の竹川風師が、

安禪必不須山水

滅却心頭火自涼

の偈を唱へて火中に入定したといふやうな話は、有名な話であります。

宇津木兵馬は駒井能登守から添書を買つて此處の寺の慢心和尚の許へ身を寄せる事になりました。

慢心和尚といふけれども、和尚自身が慢心してゐるわけではありません、和尚は人から話を聞いてゐて、それが終ると非常に丁寧なお辭儀をする人でありました。非常に丁寧なお辭儀をしてしまつてから後に、

「お前さんより、また大きなものがあるから慢心しては可けません」

王城の地へ上つて行列を拜した時にも和尚は恭しく尊敬の限を盡しましたけれども、そのあとで、

「お前さんより、また大きなものがあるから慢心しては可けません」

と云つて歸りました。

領主や大名へ招かれた時でも、さうでありました。釣馳走になつたあとでは、非常に丁寧なお辭儀をして、歸る時に、

「お前さんより、また大きなものがあるから慢心しては可けません」

諸佛菩薩を拜んだあとでも、また同じやうな事を云ひました。

「お前さんよりまた大きなものがあるから慢心しては可けません」

慢心和尚の名は恐らく其の邊から出て呼びならしになつたものと思はれます。慢心しては可けませんといふのは、人に向つて云うのではなく、自分に向つて云ふのらしいから、それで誰も慢心和尚の不敬を咎めるものはありませんでした。

慢心和尚の面はまん圓いさ云ふても、また此の位まん圓いのは無いものでありません。面の全體がブン廻して描いたさ同じやうな圓さを持つてゐました。さうして其のまん圓い面のまん中に鼻があるにはあるけれども、眼と眉は有るさへは有る、無いさへはないで通る位であります。

ほんのり霞がかつたやうに、細い眉が漂うてゐる、その代りでもあるまいけれど、口は特に大きいのです。和尚の拳は小さい方ではないけれど、その小さい方でない拳を固めて、それを包容し得るほかに和尚の口は大きいのであります。それがお師家さんで通るのだから、大した學問とか隠れたる德行さかいふものを持つてゐるのかと思へば、それが大間違であります。學問は

門前の小僧よりも出来ない人でありました。書き入れをしたり假名をつけたりして、やつと讀むことの出来る語録を二三冊持つてゐることが、和尚の虎の巻で、それを取り上げてしまへば、水を上げた河童同様で謬義も提唱も出来ないものであります。

隠れたる徳行にも、隠れざる徳行にも、和尚の人を驚かす仕事は、たゞ自分の拳を自分の口の中へ入れて見せる位のものであります。これだけは尋常の人には出来ない事でありました。けれども和尚は決して、其んな事を自慢にしてはみません。自分の拳が自分の口の中へ入るさういふやうな事を嘸にも人に示したことはありませんから始めて和尚を見た人は、さても圓い面の人があるものだと驚き、次に大きな口もあればあるものだと驚き、あとで人から、あの口へあの拳が入るのだと聞いて三たび驚くのであります。

宇津木兵馬も此の和尚に相見の時から三箇の驚きを経過しました。慢心和尚は宇津木兵馬からその身の上と目的を聞いて後、例の慢心は持ち出さないで斯う云ひました。

「わしは其の敵討さいふのが大嫌ひじや」

兵馬は和尚の其の言葉に平らかなる事を得ませんでした。

「然らば悪人を何時までも其のまゝに置いて宜しいか」

「宜しい」

「それが爲に善人が苦しめられ罪なき者が難澁し、人の道は廢り、武士道が亡びても苦しうござ

らぬか」

「苦しうござらぬ」

「これは意外な仰を承はる」

「この世に敵討さいふ事ほさ馬鹿々々しいことではない、それを忠臣の孝子のさ賞める奴が氣に食はぬ」

「和尚、御冗談を仰有るな」

さ兵馬は慢心和尚の云ふことを本氣には受取ることが出来ません。今まで自分を勵まして力を附けて呉れる人はあつたけれども、此んな事を云つて聞かせた人は一人もありません。

「冗談さころではない、わしは敵討さいふ話を聞くさ蟲唾が走るほさ忌だ。誰が流行らせたか、あんな事を流行らせたお蔭に、いゝ加減馬鹿な人間が、また馬鹿になつてしまつた」

「和尚は、世間の事にあづからず、斯うして懸け離れて暮して居らるゝ故、その様な出任せを申されるけれど、現在、恥辱を受け恨を呑む人の身になつて見給へ」

兵馬として和尚の出任せを忍容する事が出来ないのは當然の事でありました。それにも關はらず和尚は兵馬の苦心や覺悟に少しの同情の色をも表はすことをしませんでした寧ろ冷笑のやうな語氣であります。

「誰の身になつても同じ事よ、わしは敵討をする隙があれば晝寢をする」

「然らば和尚には、親を討たれ、兄弟を討たれても無念さも殘念さも思召されぬか」  
 「そんな事は討たれて見なけりやわからぬわい、その時の場合によつて無念さも思ひ殘念さも思ひ、さうもこれ仕方が無いさと思ふたらう」

「言語道斷」

兵馬は此の坊主を相手にしても仕方が無いさ思ひました。仕方が無いさ思つたけれども、多年の鬱憤さ苦心さを、こんなに露骨に冷笑されてしまったのは初めての事でありました。それだから其の心中は決して平かではありません。

和尚の言葉は、敵討其の者を嘲るのではなくて、寧ろいつまでも斯うして本望を達することの出来ない自分の臍甲斐なきを嘲る爲に、かう云つたものたらうさと思はれるのです。

さう思つて見るに嘲らるゝのも詮ない事か我自ら情なくなるのであります。それと共に過ぎとし、恨みや辛いことが胸に迫つて来るのであります。兵馬は全く、自分の臍甲斐ない事に泣きたくなりしました。

兎も角も和尚の前を辭して定められたる書院の一室に落着いた後までも、兵馬は此の泣きたい心持から離れる事は出来ません。

遂には、斯うして永久に自分は兄の敵を討つ事が出来ないで了るのかと思ひました。さうして討つ事の出来ない兄の敵を東奔西走して尋ね廻つた自分は、それで結局一生が如何なるのだといふ

事をも考へさせられてしまひました。

それだけの意味ならば敵討は馬鹿々々しいと、晝寝をするにも劣るやうに罵つた和尚の言葉が當らないでもない。さうして畢竟悪い事をした奴は、悪い事をした、けが仕得で、人間の應報の怖るべきことを思ひ知る制裁を興へらるゝことなしに済んでしまふさしたら、此の世の中は不公平なものだ。馬鹿々々しいものだ。兵馬は其んな事を考へると頭が重くなつて、經机の上に兩手で其の重い頭を押へて俯伏した時、ハラ／＼と涙が濡れました。

宇津木兵馬は其の晩泣いてしまひました。それは自分の臍甲斐ないことはかりではなく、過ぎにし色々の事が思ひ出されるに、涙をハラ／＼と落しはじめて、やがて留度もなく泣けて仕方がありませんでした。

兵馬自身にも、その悲しい事がわかりませんでした。慢心和尚に云はれた事の腹立は忘れて、たたく無限に悲しくなるのであります。それだから經机の上へ突伏して、いつまでも眠ることもしないで泣き暮してゐました。

寧ろその事、刀も投げ出し、お松を連れて何處へか行つてしまはうかしら、さうして小店でも開いて町人になつてしまはうかとも思はせられました。さうでなければ髪を剃りこぼつて、こんなお寺のお小僧になつてしまつた方が氣楽たらうとも考へさせられました。

兵馬の心は今日まで張りつめた敵討の心に疲が出て來たのかしら。人を惡む心よりは人戀しく思

ふやうになつて泣きました。

張りつめてゐたから、今までお松と、ほんざ同じ處に起臥してゐても、その間にあやまちはありませんでしたが今斯うして見れば、お松の今まで盡して呉れた親切と異性の懐しみが身しに應へるのであります。これは思ひがけない事で、この寺で坊さんに嘲あざわらけられてから、兵馬自身に女を戀しく思ふ心が起りました。

すでに敵を討つといふ事を無いものにすれば、自分はこれから一生を、成るだけ無事に、成るだけ楽しく、さうして成るだけ長く生きて行きさへすればよい事になる。それをするにはお松といふ女は、實によい相手であるさへ思はせられました。

若し、この和尙が云つたやうに敵を討つことが馬鹿々々しいことであるとするならば、この方法を取つて成るべく長く生きるのが賢い方法であつて、其の方法は幾らでもある事を兵馬は無意味に考へさせられました。

お松の心はずでに、さうなつてゐるさへ、兵馬には想像されるのであります。

「寧なそ、命を的の敵討などは止めにして……お前と一緒に未長く暮さうか」

「其れは、本當でございませうか」

さう云つてお松の赧からむ面が眼に見えるやうです。お松の内心では疾うから其處へ兵馬を引いて行きたいやうに見えないではありません。

すこしも早く本望を遂げた上は、兵馬に然るべき主取りをさせて、自分も其の言ことばを聞きみた  
い心が歴々れきと見える事もある。

若し、また本望を遂げないで刀を捨てる時は、たごへ八百屋、小間物屋をはじめたからとて、お松は其れを忌やさいふ女でない事も思はせられて来る。

この時、兵馬は、龍之助を追ひ求むる心よりも、お松を思ひ遣る心が痛切になりました。明日の晩は甲府へ入つてお松を訪ねてやらうといふ心がむら／＼と起りました。

慢心和尚といふ坊主が、餘計な事を云つたお蔭で折角の兵馬の若い心持を、こんな方へ向けてしまつたごすれは、不届な坊主であります。けれども其の不届な坊主の無禮な言葉をも忘れてしまつたほど兵馬はお松の事が思はれてなりませんでした。

#### 四

果して兵馬は其の翌日、またも甲府へ向つて忍んで行きました。

それは雲水の姿をして行きました。朝代笠を深く被つて袈裟文庫をかけて、草鞋穿で錫杖しやくじやうといふ打う扮はです。

机籠之助を探るのは二の次で、お松のある處までといふのが、この時の兵馬の第一の心持であります。

甲府の市中へ入つたのは夜で、甲府へ入ると兵馬は、駒井能登守を訪ねようとはしないで、神尾主膳の邸の方へ心覚えの經文を誦しながら、歩いて行きました。

神尾の門前を二度三度通つて見ました。また其の邸の周圍を、さりけなく廻つて見ました。併し乍ら、それだけではお松の姿を見ることが出来ず、それに合圖をする便りもありませんでした。前にも一度兵馬は此の家を覗いて其れが爲に御金藏破りの嫌疑を蒙つて獄中に繋かれた苦い經驗を思ひ出さないわけには行きません。一度は神尾の屋敷の廻りを廻つて見たけれども、この姿で二度と廻ることは危ない、と云つて、聲を出して呼んで見ることは無論出来ない。わざと經文を聲高く誦して見た處で、それは、また有らぬ人の性を買はかりで、お松の耳に届かうわけもないのであります。是非なく兵馬は、神尾の屋敷から引き返して甲府の市中を當もなく歩きました。忍ぶ身になつて見るに、無性に懐かしくなつて、お松に會ひたくて堪らなくなりました。

それをするのにも最も便宜な方法は駒井能登守の屋敷を訪ねる事でありませぬ。能登守の邸を訪ねて見れば萬事を心得てゐるお君が云はずともよく計らつて呉れない筈がない、兵馬は其れを知りつつも、さうも能登守の屋敷へは行けないのであります。行つて行けない事はないけれども、今は行くべき必要が無い筈なのであります。

それで兵馬は空しく經文を誦しつゝ、徒らに甲府の町を歩きました。歩き歩いてゐるうちに、何時しか駒井能登守の屋敷の後へ來てしまつた事に気がつきました。

やゝ歩いて行つて振り返つた時に駒井の屋敷の長屋塀のある門前から左の方に高く二階家の燈の光の射すのを遠目にながめました。そこは自分が獄中から出て病を養うた處である。

それから右の方へ廻つて後になつて能登守の居間があり、お君の方のお部屋がある。お君ごいふ女はもと賤しい歌唄ひの女。それと知つてか知らずにか、能登守ほどの人が寵愛してゐる事を兵馬は其時分も異様に思ひました。

能登守は無論お君の素性を知らないのたらう。知らないとすれば其れが現れた時は如何なるたらう。これは能登守の生涯の浮沈に關する大問題に相違ないのであります。

兵馬は其の時分に能登守の爲に諫言をしようかと思ひました。

けれども其の機會を得ずに邸を去りました。思ひ切つて其の諫言をしないで邸を去つた附甲斐なさを此處でも悔む心になりました。

あれほどの人でも女に溺れると目がなくなるものかと思ふもありません。溺れる心は無いが、今の自分もやはりお松と云ふ女に荷目ながら引かれて來た事を思ふと其處にも情ないものがあるやうです。恰もよし、この時、兵馬の空想を破るものが足許から起つて來ました。

恰もよし、とは云うけれども、實際それは善かつたか悪かつたかは疑問であります。兵馬の足許に現れた黒い物はムク犬であります。

ムク

兵馬は低い聲で其の名を呼んで頭を撫でました。ムクは尾を振つて喜びました。

兵馬はムク犬との間柄の、よく熟してゐることは久しい前からの事でありました。お君を理解し、お松を理解し、また米友を理解するムク犬が、いつまでも兵馬に對して敵意を持つてゐやう筈がありません。兵馬は此の犬を見て、此の際最もよき使者の役目をつとめるのは此の犬の外にない喜びました。

「ムク、此方へ来い」

兵馬は素早く歩き出しました。その旨を心得てかムク犬は兵馬のあとを跟いて行きました。憐れむべきムク犬は今不遇の地位にゐるのであります。間の山以來の主人は既に他に愛せらるべき人を得て、以前ほかに此の犬の面倒を見てやるこゝが出来ません。

代つて此の犬を養ふべき女達は、元の主人ほかに親身を以て世話をすることは出来ないであります。時としては吐り罵ることさへあり、時としては自分達のした粗忽を犬にかづけて責をのがれようとする事さへあるのであります。

さしにも黒い毛を、以前はお君が絶えず精出して洗つてやつたから漆のやうに光澤がありました。この頃は、手を下して滅多に洗つてやる者が無いから、汚れた時は汚れたまゝでゐる事があります。食事でさへも、その時々／＼に忘れられて與へられない事があるのであり、ムクは巨大の犬であるだけに、食物の分量も亦、多量を要する。食を細くされてからは餓ゑを感じる事が屢あつ

て、催促がましく臺所へ現れる時は、心なき女共は其れを侮り五月蠅がる事もあるのであります。それでもお君の眼に觸れた時は、女中に云ひつけてよく世話をさせるにはさせます。その外の時は、神尾の屋敷でお松に愛される事によつて、ムク犬はお君に失ひ、米友に行かれた空虚を補ふ事が出来るらしくありました。

お米倉の構外まで来た時に、兵馬はムク犬を顧みて斯う云ひました。

「ムク、お前は賢い犬だ、神尾の屋敷からお松の便りをして呉れたのはお前ださうだ、今日は、わしからお松の許まで、お前に使を頼む」

兵馬は紙と矢立を取り出してサラサラと一筆認め、それを紐でムク犬の首に結ひつけました。

ムクは確かに神尾の屋敷の中へ入つて行つたけれども、容易に其の返事を齎しませんでした。兵馬は長く其處に立つてゐるこゝが掛念に堪へられない。人目に觸れないやうに行きつ戻りつしてゐたけれど、ムクは容易に戻つて来ませんのです。兵馬は此處に人を待つ身となりました。

待つ身になつて見るさ來る人が一層戀しくなるものか知ら、兵馬は早くお松に會いたい／＼と云ふ心が、今までに無かつたほど胸に響きます。

お松から愛せらるゝ事の多かつた兵馬、今はお松を慕ふ心が我ながら怪しいほどに切になつて行くやうです。

お松の身になつて見るさ、この頃は立場に迷ふ姿であります。立ち場たちばに迷うさいふたけならば迷



つたなりで、兎も角、その目を過ぎして行けるけれども、居ても立つてもゐられないやうな事ばかり、その周圍に降つて湧きました。

第一は兵馬に去られた事でありませぬ。駒井家を立退くといふ事は早晩さうあらねばならぬ事だけれども、餘りに急な事でありませぬ。殊に其の行先の知れないといふ事がお松に取つては、この位残念であり心細くあるか知れませぬ。それと同時に降つて湧いたやうな氣の毒な風聞が今一番親しい友達であるお君の身の上にかゝつて来たことでもあります。

その風聞といふのは、此の頃士人一般の間に取沙汰せられてゐる、お松の親愛なお君の方が穢多の娘だといふ噂であります。あれは人交りの出来ぬ素性の者であるに拘はらず、能登守を欺いて其の寵愛を恣まにしてゐる汚らはしい女、横着な女といふ評判が立つてゐることでもあります。

それと共に、能登守もあらうものが、穢多の娘を寵愛して鼻毛を讀まれてゐることは、さて／＼思ひがけない馬鹿殿様といふ噂も、折助共や何かの間に立つてゐることです。

これは單に噂だけとしても容易な噂ではありません。お君と併せて能登守の生涯を葬るに足る噂です。

此の場合に自分としては如何いふ處置を取つていゝのたか、ほゞ／＼思案に餘りました。それと忠告しなければ此の後の御災難が思ひやられるし、さうかゞ云つて明らさまに忠告すれば其の愛情に水を差すやうなものだし、また外の事と違つてお前の素性はこれ／＼たらうと露出には女の

口から云へないし、寧ろお君様が自分から御辭退申せは宜いのにさ、お君の心持をさへ情けなくも思つたりしました。

けれども、その噂はいよ／＼密々に擴がるはかりで、殊に神尾家の折助などは此の事を、一番恰好な笑ひ草にして、大ビラで嘲弄してゐました。お松は其れを聞くに如何しても本人に忠告をしなければならぬ事だと思ひました。たゞ自分には悪まれ者になつても此のまゝで聞き捨てにはならないから、今晚は、お君様を尋ねて其の事を云つてしまはふとする時に、例のムク犬が庭先へ尋ねて來ました。

早くも眼にさまつたのは、ムク犬の首に結びつけられた紙片であります。

お松は心得て其の紙片を取つて見るに、それに「靜馬」と記してありました。

それだからお松はハツさしました。兵馬さんが訪ねて來てゐると思ふに、氣がソツ／＼として落着かなくなりました。これから駒井家を訪れようといふ事なども忘れてしまひました。

急いで此のムク犬の導いて行く處へ行かなければならぬ。お松はソツ／＼に身仕度をしました。履物を突掛けようとする時に、

「お松」

と云つて奥の方から出て來たのはお絹でありました。

「はい」

「お前は何處へ行きます」

「ちよつと、あのお長屋まで……」

お松は、悪い處へお師匠様が出て来て呉れたと思はないわけには行きません。

「少しお待ち、お前に頼みたい事があるから」

「はい……」

お松に取つては、いよく悪い機會でありましたから、その返事もいつものやうに齒切れよく行きませんでした。其れでも云つて出かけて行く口實にも窮してしまひました。

「まあ、此方へお出で、わたしの處へお出でなさい」

お絹はわざとお松に猶豫さ口實を與へないかのやうに見えました。さうして退引させずにお松を自分の居間へ連れて来てしまひました。お松は如何する事も出来ませんから、そこへ畏つて早くお師匠様が用事を云ひつけて下さるやうにご、腹の中で其れを焦き立てゝゐましたけれど、何故か、お師匠様なる人は、いつもより悠長に構へ込んであるものゝやうであります。

「あの御用向は何でムいませう」

お松は堪り兼ねて催促して見ました。その時にお師匠様なる人は漸く、

「お前、あの長屋へ行くさいふのは嘘だらう」

と微笑しながら、お松の面に疑ひの眼を向けました。

「いゝえ」

お松は見られて煙たいやうな心持ちです。

「お長屋へあの乳呑子を見に行くさ云つて置いて、お前は時々、駒井様のお邸へ遊びに行くさうな」

「左様な事はござりませぬ」

この時も、お松は、しごろもごろな打消を試みましたが其の打消は自分ながら、まづいものたと思はないわけには行きませんでした。

「有つてはなりませぬ、あのお邸へ遊びに行くことは、お前の爲になりませぬ故、これから差止めます」

お絹の口からキツパリと差留の言葉が出ました。温順なお松も、こんなにキツパリと云はれて見ると、はい、と云ひきる事は出来ませんでした。

「あのお邸には、わたしのお友達が居りますものでございますから……」

「そのお友達が可かせぬ、そのお友達さお前が附合つてゐると、お前の身の上ばかりではない、わたしの身の上も、此方の殿様のお身の上までも汚れるやうな事が出来まます、それ故、今までの事は是非もないが、これからはブツリと縁を切つて途中であつても、口を利かないやうにしなければなりません、わたしが斯ういつてお前を差留るわけは、もう少し経ては、キツとわかつて

察ります、成程危ない事であつたさ、お前はあそこから気がついて來るであらう、わたしは意地悪くお前に此んな事を云ふのではありませぬ」

その言ひつけに對しても申分は有るけれども、お松は其れを彼れ此れと氣に留めてゐられないほど外の事が氣になるのであります。

それにも拘はらず、お師匠様なる人は、相變らず悠長に構へて、別に差當つての用事を頼むのでなく意見を加へがてら、話し相手のお伽にするやうな鹽梅でありました。

「お前は、また知るまいが、あの駒井様と云ふ殿様のお家は近いうちに潰れます、今甲府では飛ぶ鳥を落とすほどの御支配様だけさ遣からず、お家を取つぶされて、お預けになるか、または御切腹……これはまた内密の事だから誰にも話してはなりません……さうなるさ此方の殿様が、そのあごをついで御支配に御出世なさるやうに定まつてゐる、たからお前も、其のつもりで、内の殿様のお面にかゝるやうな事をしてはなりません、まあ、靜止として、もう暫らく見てお出で」と云つてゐるお絹は、何か企むことがあつて、やがて其れが成就した時を楽しみにしてゐるやうに見えます。その企みといふのは、駒井家に何か重大な變事が出來るたらうといふ暗示で推察する事が出來ます。今いふ通り、遠からずお家を取りつぶされて、その上に殿様がお預けになるか、または御切腹になるかといふほどの大事、お松は、いよく胸がつぶれる思ひで、この風聞の裏には、權力を争ふ嫉みや毘が幾つも幾つもある、駒井の殿様は旨々々其の毘にかゝつて知らず

におゐでなさるさといふ事をお氣の毒に思はないわけには行きませんでした。それもあるけれど、さし當つて、もつと痛切にお松は、外へ出て見なければならぬ必要が迫つて居ります。處がお師匠様なる人は相變らず、お松を話相手のつもりにしてべんべんと話を繰り出し座を立たせないであります。

「男も女も身分の低い者を相手にしてはなりません、駒井の殿様などは、あの通り男振はお立派であるし、學問はお有りなさるし、人品はお高いし、これから若年寄、御老中と何處まで御出世なさるやも知れないお方でゐらつしやるのに、有らう事が身分違ひの女を御寵愛になつた爲に、あたり一生を靡り物にしてお仕舞なされた、ほんさにお氣の毒も何とも申し上げやうがありません、せぬさは云へ、これも身から出た錆で、誰をお怨み申さうやうもない、お家には堂上方からお出でになつた立派な奥方様を持ちながら、あんな女藝人上りの身分違ひの女へお手をかけた爲に、御身の上ばかりか、死んだ後までも御先祖へまでも、恥を與へるやうな事になつてしまひました、それにつけてもお前なども、仕合せに堅くて結構だけれども間違ひのないうちに何さかして上げたいさわたしは常々其れを思つてゐます、それ故、今の殿様のお側へは成るだけお前を上げないやうにしてあるけれども、いつまでも左様して居られるものではない、わたしも色々さお前の身の上を考へてゐるうちに、あの御支配の上席の太田筑前守様の奥方が、お前をお側に欲しいと斯う仰有るから、わたしは如何しようか、今お前を呼んだのは、その事を相談して見たいから……」

漸くこゝへ来て、お松を呼び寄せた相談の緒が聞かれたのでありません。お松は其れどころでは無いのであります。お松はソリ／＼とするのを、これは駒井の邸へ密に行きたいからであらうと見て取つたお絹は、わざと話を長くして、意見のやうな、教誨のやうな、お爲ごかしのやうな事を云つて、お松に席を立たせまいとするのであります。

お松は針の筵に坐つてゐる様にして、其れを聞かされてゐるけれども、てんで耳へは入りません。やうやくお絹の相談といふのが済んでお松は解放されました。お辭儀をソコ／＼にして歸つて見ると、ムク犬はまた待つてゐました。そのムクを先に立て、お松は裏門から走り出で、見ました。けれども其の時分には、もう宇津木兵馬の姿を何れの處でも見ることが出来ないで、町の門々や辻々に集つた多くの人が、

「また出た、また出た」

と噪いでお城の方をながめてゐるのを見ました。

お松は其の人出の中を、あれかこれか尋ね廻りましたけれど、遂々兵馬の姿を發見することが出来ないで、失望し、ムクを先に立て、今も行つてならぬと差止められた駒井能登守の邸の方へ知らず／＼足が向いて行きました。その間も、例の人出は、

「それ出た、また出た」

とお城の方をながめながら罵り噪いでゐます。此れは今宵に限つたことではない。町の人は此の

二三日の晩のある一定の時刻になると斯うして門並に立つて、

「それ出た／＼」

といふのであります。何が出たのかと云へば、眞紅な提灯がたつた一つお城の天守の屋根の天邊でクル／＼廻つてゐるのであります。大方提灯だらうと思はれるけれども、それとも天狗様の玉子かも知れない。若し提灯たすれば、それを持つて、あの高い處まで上る人が無ければならぬ。そんな事は誰たつて出来る筈ではないのであります。警固の役人が其の提灯を見さめるさ直に取調べに行くのであります。天守の上まで登る時分には、もう提灯は消えてしまつて人の氣配なさは更に無いのであります。それですから、大方天狗様の卵だらうといふことにほと多くの人の意見は一致して、それが毎晩一定の時を定めて出て来るさ、斯うして町中總出の姿で門並に立つて見物するのであります。

成程、御本丸の天守臺の上で紅い提灯がクル／＼と廻つてゐます。お松も、やはり其の提灯が何者であるかといふことを不思議に思はないわけに行きません。

人中を歩いて行くうちに人の噂を聞けば、天狗様の卵たといふものもあるし、近いうち大火事があるのを稻荷様が知らせたさ云ふ者もあり、また勤番のお侍のうちに、いたづら者があつて長い竿へ提灯をブラ下けて、町民を驚かして面白がるのたらうと云ふものもありました。けれども此の提灯を斯うして噪いで見てゐる中に、市中の到る處を盜賊が荒してゐた事を知つた

のは其の後の事でありました。

そのうちにお松はムク犬を先にして駒井家の邸前まで来て、考へてゐるうちに、ムク犬に引かされて裏門から邸の中へ入つてしまひました。

こゝでも亦、お城の屋根の上の提灯を問題にして家中の侍や足輕などが立つて見てゐました。

「家の殿様は、天狗だとか稻荷様だとかいふ事をお信じにならぬ、では何でございませうとお尋ねするに、たゞ笑つておゐでなさる」

「殿様は鐵砲の名人でいらつしやるから、殿様の狙ひで、あれを撃ち落して御覽になれば、直にエタイが知れるでござりませう」

こんな事を話し合つてゐました。

その中へ入つて行つたけれども、ムク犬の附いてゐることゝ、常に奥へ出入りするここに慣れてゐるお松の事でしたから、誰も咎めるものはありません。

僧體をした宇津木兵馬は、神尾の邸の裏に待つてゐたけれども、お松に會へない先に、四邊の人が噪き出したので驚きました。其れは自分を發見した人があつて噪いたのではないけれども、

「それ提灯が出た」

と云ふ聲と共に人が集まる容子だから、浮うと其處に居られません。心を残して町の方へ向つて行

くと、其處でも此處でも人が出て、

「それ提灯が出た」

だから兵馬も其の人々の見てゐる方向を見ると、お城の天守臺あたりの屋根の上に赤く一點の火があつて其れがクル／＼と廻るのであります。

隨に提灯であらうとは認められるけれども、その提灯ならは何者が如何して、あんな處へ上つたかといふ事が疑問であります。答の人々の噂は信する事が出来ません。

一旦、町へ出た兵馬は、如何したものか再び駒井能登守の邸の後へ来てしまつて気がつきました。見上げるに、三階になつた處の戸が開かれ其處から火の洩れてることが見えます。

あれは能登守が物見の爲に建てた處で、あの三階へは能登守自身の外は登れない事にしてあるのだから、其處で火の光のすることは正しく能登守が其處にゐて何事かを調べてゐるのだといふことがわかります。

それ故、兵馬は懐しく思つて三階の上を暫らく見上げてゐると、その開かれた戸から人の半身が見えました。それは一見して能登守の姿であることがわかりました。

今、能登守は、其處から面を出してお城の方をながめてゐる。お城の方さへは無論、その天守臺の櫓の屋根の上の疑問の提灯の火であります。その提灯の火は、さきほどはクル／＼と廻つてゐましたけれど、今は高い處でブラ／＼と横に揺れてゐます。

兵馬は三階の上なる能登守と、天守臺の上なる疑問の提灯とを興味を以て見比べてみました。一體、能登守といふ人も、妖怪變化を信する事のない人であるから、あの提灯に就ては如何なる解釋を下してゐるのたうと、其の心持を兵馬は付度して見ないでもありません。

窓から半身を出した能登守は、やゝしばらくの間、その疑問の提灯を見定めてゐる容子でありましたが、やがて取り直したと見えるのが當しく一挺の鐵砲であります。

「さてこそ」

あれだ、能登守の疑問の提灯に對する解釋はあれだ、兵馬は少なからぬ好奇心を加へました。能登守は聞ゆる射撃の名人、あの銃口に提灯の疑問が破られて、同時に市民の迷信が解かれるのた、兵馬は頼もしく思つて片唾を飲みました。

鐵砲を取り直して構へた能登守の姿勢は無難作に見えました。暫らくして轟然と一發！

兵馬は天守臺の櫓の屋根の上から疑問の提灯が切つて落したやうに眞一文字に直下するのを見ました。

然も直下する途中で提灯の體へ火がついたから、一團の火の玉が九仞の底に落るやうな光景を兵馬は目ざましく見物しました。恐らく他の市中の人もそれを目ざましく見物したでせう。

## 五

その翌日城中の御番所で勤番の總寄合がありました。

月に少くも一度はある詰合でありましたけれど、その日の寄合は特に念入の寄合といふ事であります。

御老中が見えるといふ事もあるし、また御老中の名代に駿府の御城代が立ち寄るといふ噂もあるし、それ等の接待の準備や、また先日の流鏑馬の催しに就ての後始末や何かの相談もあるのであります。駒井能登守も無論、その總寄合に立ち合はねばならない。それでお供の者はお供の用意を整へて主人のお出ましを待つてゐました。

こゝに訝かしいことは、またお君の方が今朝から枕を上げない事であります。殿様の御出仕には、いつも人手を借らずにお世話を申上げる寵愛のお君が、如何したものか今朝は気分が悪いといふて、能登守の前へ姿を現すことをしませんでした。それだから能登守は他の女中の手によつて世話をされながら、

「何處が悪いのじや」

と訊ねました。

「何處がお悪いのでございますか急に」

と云つて訊ねられた女中もお君の方の病氣の程度を知らないものゝやうであります。

能登守は其れを物足らず思ひ、また事實お君の病氣が甚だ軽いものでなからうといふ事を心配し

ながら、出仕の時間に遅られて邸を出ました。

この日の詰合には當番も非番も皆集まるのでしたから追手の門は賑はひました。一の丸の下にある御番所の大廣間は、これ等の詰合で一杯になりました。能登守の一行も御番所へ着いた時分には、大方其の席が満ちてゐました。上席の太田筑前守も亦別席に休憩して會議の開かれる時刻を待つてゐました。御番所といふのは大手の門を入るさ少しばかり行つた處の左手にあります。その右は二の丸で、後は樂屋曲輪、表門の左右にはお長屋があり、お長屋の前には腰掛があつて足輕が固めてゐました。

能登守は此の御番所の表門から入つてお長屋へお供を待たせて、刀を提げて玄關へかかりました。出迎への者は、いつもするやうに上役に對する禮儀を盡して能登守を迎へました。これは今日に初まつた事ではないけれど、何故か、能登守は此時に胸騒ぎがしました。一種の不安な氣持がヒヤリと能登守の胸を刺して、玄關の大障子に何か暗い色が漂うてゐるやうに見えたから、それで能登守は何となく胸騒ぎがしたのであります。

思ひ返して見るに其の不安は、今朝に限つてお君の姿を見せなかつた事から起る心配の變形であるさ辯解が出来ないではありません。あゝ、出がけに一度、お君の病狀を見舞つてやればよかつた。今日は此處へ醫者も詰めてゐる筈だから、其れを急に見舞に遣はさうといふやうな事を思ひながら、能登守は刀を提げて大廣間へ進み入ると、五百人足らず集まつた勤番の何れもが能登守

に對して上役の出席さいふ敬意を表しにけれども、その席の上の何れかに、やはり冷たい色が深ふ様に見えて、また能登守の胸騒ぎが止まりませんでした。

これより先、この席の一隅で閑話になつてゐたものがあります。それは一つの壊れた赤い提灯であります。

その提灯は壊れた上に大半は焼けてしまつてゐました。それを手から手に渡して頻りに話し合つてゐました處へ能登守が見えたので、其の話も己みました。その時分に如何いふつもりか、右の焼けて壊れた提灯は、この席でも上の方にある神尾主膳の手に渡つて保管されるもの、やうに膝の上に載せられます。

やがて太田筑前守も出席するし、それと並んで駒井能登守、その他組頭や奉行の面々以下、勤番の人までが、それ々々順序によつてその大廣間に居流れて、やがて會議が始まりました。

筑前守が席の長者で一通りの挨拶があり、駒井能登守も亦、それに次いで兩支配の訓示様の事から會議が開かれ、各組頭や奉行の報告様の事で無事に進行し、その間はいつもする會議の通り極めて月並なもので、末席の連中はしびれを切らせ、あくびを噛み殺してゐました。

訓示と報告とが一通り済んだ時分、もうこれで散會になるたらうと、しびれを切らしたり、あくびを噛み殺してゐた連中がホツと息を吐いた時分、

「御支配、並びに列座の各方」

さ甲走つた聲が聞えました。誰の發言かと思はれ、それは焼けて壞れた提灯を膝の上に載せてゐた神尾主膳の口から出たものであります。神尾の面付の緊張してゐるのこゝ、その發言の甲走つてゐることによつて察すれば、何か此男が緊急動議を提出するものらしい。

「神尾殿」

と云つて議長ぶりの太田筑前守が主膳の名を呼び、その言はんこする處を言はせやうと催促しました。

「ちとお聞きづらい事のやうではござるが、言はんこして言はでやむは武士の本意でない、その上に、この事は甲府城を預かる我々一統の面目にもかゝる事と存する故、この席で兩支配並びに列座の各々方の御所存を承はりたい」

神尾の意氣込は烈しいのに、太田筑前守は其れをさのみ氣には留めないやうであります。駒井能登守は神尾の氣色の只ならぬのこゝ、それから武士の面目呼はりをする事が穩かでないのを、上席の筑前守が應答しないから自分が引受けて、

「我々一同の面目にかゝるこゝふのは一大事、何事かは存せねど、神尾殿の御腹藏なき御意見が承はりたい」

と云ひました。

能登守から斯う云はれて主膳は、さもこそこゝふ面付で膝の上に最前から後生大事に保管してゐ

た焼け残りの提灯を取り上げました。

「近頃、この甲府城の外は甚だ物騒な事とござる、城下の町々で辻斬が恣に行はれるかと思へは、破牢の大罪人があつて人心を騒がす、その辻斬の曲者も未だ行方が判然せず、破牢の重なる罪人は影も形もなし、これは我々を在つて無きが如く致す者共の振舞、その以前、御金藏の金子が紛失致したとやら、その盜賊の詮議も今以て埒が明かず、あれと云ひ、これと云ひ不祥千萬、その上に、この頃は毎夜の通り、この天守臺の上に提灯が現れる、心なき町民共は天狗廢物の爲す業と申し居れど、これ以て人間の爲せし悪戯、我々を愚弄するにも程のあつたもの、餘の事は扱置き、先づ天守臺の提灯から御詮議あつて然るべく存じ申す」

神尾主膳は焼けた提灯を捻くり廻しながら斯う云ひました。神尾主膳の此の發言は無遠慮に聞えました。列席の誰をも不愉快に感じさせましたけれど、其の言ふことには筋道がありました。神尾が今並べたやうな事は、その一つがあつても役人の重き起度と云はなければなりません。神尾とても其の責を分つべき勤番のうちの上席の方の身分でありながら、それを此の席へ持ち出すこゝふ事は、餘りに無遠慮であると思ひました。

太田筑前守が其れを抑へないのも氣の知れない事だと眼を睨るものもありました。駒井能登守は主膳の無遠慮な發言を聞いて、やはり沈黙してゐました。

さうすると神尾主膳は、先程はや、甲走つてゐた聲が漸く落着いて提灯を楯に使ひながら、一人



舞臺のやうに主張をはじめてしまひました。

「當しく何者か、あつて、この提灯を夜な／＼天守の上へ掲げて我々を愚弄したものと相見える、奇怪千萬の事と申さねばならぬ、この用捨し難き悪戯は何者の手によつて爲されたか、蛇度諷さねばならぬ、併し、これと云うも末の事、斯様に我々を愚弄致すものがあるのは、つまり上が悪い、上の風儀が亂れてゐるが故に、下之を侮る、先づ以て上の士風から正さねば相成るまい、上に立つ者の風儀が亂れてゐては、いくら其々の係の者が骨を折つたからとて所詮無益、一向に人のしめしにはならぬ、却ていよく輕侮を加へるのみじや、先づ以て上流の風儀が肝腎」

と云つて神尾主膳は駒井能登守を尻目にかけるやうにしました。これは、いよく無遠慮な言ひ分に相違ない事でありませう。

上流の士風といふやうな事を、別人ならぬ神尾主膳の口から聞くことは、淫婦の口から貞操が説かれ、折助の口から仁義が論ぜらるゝやうなものであるけれど、それにしても、此の席で神尾の上流としては、太田筑前守と駒井能登守がある位のものであります。これ等の上席を其處へ置いて、こんな事を云ふのは、此の上もなき禮を失した言語擧動であります。神尾とて、その位の禮儀を辨へない男ではなからうけれど、それを滿座の中で斯く主張するからには、やはり例の通り、何かの魂膽がある事と見なければならぬのであります。

神尾の言分も怪しからぬものであるけれど、其れをまた抑へようとも咎めようともしない太田筑

前守の座長ぶりも亦氣の知れないものであります。筑前守の態度は神尾に云ふだけの事を言はせてしまはうといふ態度のやうに見える事でありませう。その無禮と無作法とを默認してゐる事のやうに見える事でありませう。

筑前守の此の煮え切らない座長ぶりは自然に神尾の無作法を嗜める責任が駒井能登守の手に落ちて来るやうになりました。上席の責任上、斯ういふ事を神尾一人に言はして置くのは、その威厳にもかゝるし、列席の不愉快を招くことが大きいのであります。已むことなく駒井能登守が神尾主膳の矢表に立つことになりました。

「神尾殿、貴殿の御意見は一應御尤もなれど、それでは如何やら此の甲府城内の上流の者に、風儀を亂すものがあるやうに聞えて甚だ聞苦しい、角の立たぬやうに御意見のある處だけを述べて欲しいものじや」

駒井能登守から斯う云はれたのを機會に、神尾主膳は能登守の方へ向いて正面を切りました。

「これは御支配の駒井殿、お言葉ながら拙者は元來禮に觸はぬ男、ついでにお氣に觸るやうな事を申さぬとも限らぬ、これといふも城内の武士の風儀を重んずる心から致す事、別意あつての事ではござらぬ、お咎めを蒙つた上流の者の良くない風儀といふ事にも、ちよこ心當りあればこそ申すこと、これを大目に見逃しては旗本の名譽が地に落つる……」

「それは聞き捨てになり難い」

神尾主膳から斯う挑戦的に出られて見ると、駒井能登守も意気込まないわけには行きません。斯うして引き出されて神尾の手に載せられる事は能登守に取つては極めて不利益なのは判つてゐるが、私の場合に於ては避けて避けられる事も、斯うなつては、避けられないのであります。

「如何にも聞き捨てになり難い事でございます。」

神尾主膳は膝を進ませました。

列席の人々は意外の光景になつて行くのを見ました。駒井能登守對神尾主膳の取組のやうな形になつて行くのを見ました。神尾が、能登守の上席に對して不平であつて、事毎に其れに楯を突かうとするの形勢は大抵の勤番は知つてゐました。能登守がまた其れに相手にならず勤めて避けてゐる態度を奥床しいとも尙痒いとも見てゐる人もありました。併し、公の席で、こんな風に正面に打着かりさうになる形勢は初めて見ることであります。殊に今日は神尾主膳から仕掛けて行つて、敵を引張り出さうとする形勢が歴々見えるから、能登守の爲に密に心配する者もありました。それを太田筑前守が何とも云はないのは、いよく以て怪しからん事です。兩々共に騎虎の場合になつて退引のりひならないのでありますから、この時に太田筑前守が何ごか云つて調停しきへすれば、兎に角鶴の一聲で此の場は納まるべき筈であります。それを無言つてゐる筑前守の氣が知れないのであります。

筑前守が調停しないものを、それ以下の者が口を出す譯には行きません。それを神尾はいよく

得意になつて、

「列席の各々方にも定めてお聞きづらい事でございますらうけれど、最前も申す通り、これを聞捨てに致し見捨て致す時は、我々旗本の名譽が地に落つる、それ故、云ひ難きを忍んで申上げる、各々にもお聞きづらきを忍んでお聞き下されたい、さて、御支配、駒井殿、こゝで其れを申しても苦しいござりますまいか。」

「勿論の事、旗本の名譽が地に落つるといふほどの重大事ならば、誰に遠慮も要らぬ、明白に承りたい。」

「然らば申上げる、近頃、この城中の重き役人にて身分違ひの女を愛する者があるやに専らの噂。」

「何ぞ申さる。」

「身分違ひの女子を寵愛して妾めかけの位に置くものがあるさやら。」

「は、何事かと思へば家庭の小事、其の様な事は此の席に持ち出すべきものでござりますまい。」と云つて駒井能登守は笑つて其の言ひが、りを打ち消さうとしましたが、神尾主膳は冷笑を以て其れに酬こたひました。

「其の人に取つては家庭の小事か知らねど、武士の體面よりすれば中々小事ではござらぬ、いかに各々方に承はりたい、たゞは旗本の身分の者が、假に穢多非人の娘を取つて妻妾とし、其れにうつゝを抜かして世の人に後ろ指さるゝやうな事があらば、それが家庭の小事で済ま

されやうや、また左様な人物が上に立つ時に、いかで下々の侮りが無くて済まうや、これが一大事でないければ、最早武士と穢多非人との區別は無い、土風の根本が崩れ申す」

神尾主膳は、駒井能登守の面を見つめました。「これでもか」といふ表情と冷笑と、それから勝ち誇つたやうな下劣な得意さを満面に漲らせてゐました。

列席の者は、神尾の言分の道理あるや無きやの問題ではなく、其の言ふ事に不快を感じて座に堪へられないやうなものもありました。駒井能登守は神尾に斯う云はれて一時沈黙して眼をつぶりました。企んだな！と斯う思つて駒井能登守の爲に同情し、神尾の舉動を悪む者も少くはありません。

情に是れは駒井能登守が窮地に陥つたなご、豫ての噂を聞いてゐる者は、人事ながら見てはゐられない氣の毒の感じを起したのも少くはありません。

この場合、能登守を救うのは、誰よりも先に太田筑前守の義務で無ければならぬ。今まで神尾に斯ういふ事を云はせて置いた事でさへが緩漫の至りであるのに、こゝで尙黙つてゐて能登守の急を救はなければ、それは武士の情を知らないのみならず、寧ろ神尾と腹を合せて、神尾をして充分に能登守を弾劾させようとする策略があること云はれても申譯がありません。それでも、やはり筑前守は知らぬまねして、神尾の一言一句にも干渉する事をしませんでした。

一座は白け渡つてしまひました。其の中には眼の色を變へて能登守の爲に神尾に飛びかゝらうと

いふ權幕のものも見えました。また神尾の言ふ事を小氣味よしとして、能登守が窮したのを内心快くながめてゐる者もあるやうです。

一時沈黙して眼を閉ぢてゐた駒井能登守は、やがて眼を開きました。

「神尾殿、近頃、苦々しき噂をお聞き申す、併し兎も角もそれは一大事、して左様な噂を立てられた人物といふのは何者にや、してまた其の人物が寵愛するといふ身分違ひの女子の素性といふのは如何なる者にや、その邊を委しくお聞き申したい、それ等の者の姓名をもお包みなく、これにてお明かし下されたい」

能登守の聲は少しばかり顫えを帯びてゐたやうであります。けれども終ひはキツパリとして神尾主膳の面を篤と見つめながら言葉も色も動きませんでした。

「それは申上げぬが花と存じ申す、併しながら、言出した拙者の面目、輕々しく世上の根無し言を、此の公の席へ持ち出したとあつては迷惑、それ故、噂は噂として、その噂の中より拙者の見届けた眞實だけを申上げる、拙者がまた當地へ参らぬ以前の事、伊勢の國の大神宮へ参拜致した、その途中、彼の間の山と申す處に、名物のお杉お玉と申すものが居つて、三味を弾いて、歌をうたひ、客の投げ與ふる錢を乞うてゐた、そのお杉お玉兩女のうち、お玉と申すのが事の外姿容がよい、それによく間の山節といふ歌をうたひ申す、拙者も旅の徒然に右のお玉を旅宿に招んで歌を聞き申した、成程姿は鄙に珍らしい、その歌も哀れに悲しい歌で涙を催した。然るに近頃思ひ

がけなくも此の甲州の土地へ来て、全く思ひがけぬ處で其のお玉といふ女子を見申した、それは只今現在に、此の甲府でさる重役人の寵愛を受けてゐるといふ事を聞いて、いよ／＼思ひがけない思ひを致した、各々方、そのお玉といふ者を如何なる素性の女子と思召す、姿こそ美しけれ、歌こそ上手なれ、それは彼地にてはいさ、いふて人交りのならぬ身分の者、一夜泊りの旅人さへも容易に相手に致さぬ者を、知らぬ土地さは云へ、この甲府へ来て、あの出世、氏なうして玉の興さによく言うたもの、たゞし女は出世で濟まさうとも、濟まぬは我々旗本の身分、穢多非人を寵愛して閨の御をさせるは即ち穢多非人に落ちたも同然、若し我々の同族のうちに、左様な人物がありとすれば、同席さへも汚れてはござるまいか、左様な事は無い事を望む、左様な人物はあつてはならぬけれど、左様な人物あるが爲に士風を汚し、庶民の侮を買ふやうな仕儀に到らば打捨て、は置かれまい、よし一人の私情は忍び難くとも、流れ清き徳川の旗本の爲に……」

主膳は今日を晴と此んな事を絶叫しました。能登守は靜肅として聞いてゐたけれども座中には、もう聞くに堪へない者が多くなつて、雲行が穩かでないのを、太田筑前守が、この時になつて漸く調停がましき口を利き出しました。

今ごろになつて調停がましい口を利き出すなどは可なり馬鹿々々しい事でありませぬ。

氣の毒な事に駒井能登守は、すっかり彼等が企みの尾にかゝつてしまひました。こゝに至るまでには一から十まで企みに企んであつた仕掛を能登守は一つも覺ることなくして、此場に身を置くやうになつたのは、返す／＼も氣の毒な事でありませぬ。

太田筑前守は程よく此の會話を切上げる挨拶を述べ、神尾主膳は勝ち誇つた態度で揚々座を立ち、その他集まる人々が大方席を退いたけれども、駒井能登守は柱に凭れ腕組をして俯向いてゐました。すべての人が席を退いたあとで能登守は其處を立ち上がりました。その時に面色は蒼ざめてゐました。足許がよろ／＼するのを辛うじて刀を杖にして立つたやうに見えました。さすがに此の人とても非常なる心の動搖を鎮めるのに多少の苦しみを外へ現はさないではゐられないのでせう。それでも玄關へ出た時分には何氣ない面色で家來達を安心させました。お供の家來達は、不幸にして主人の受けた恥辱と其の心の中の苦痛を知らないであります。

こんなわけで、能登守の乗物は無事に邸へ歸るのは歸つたけれど、その時になつて大きな騒ぎが起りました。主人が御番所に於て受けた容易ならぬ恥辱を、お供の者が知らない先に邸へ知らせたものがありました。そこで家老とお供頭との間に、烈しい口論がありました。口論ではなく家老がお供の者達を罵つて、

「腰抜け！ たわけ者、ナゼ其の場で神尾主膳を討つて取らぬ、その場で討つ事が叶はずは途中に於てナゼ神尾主膳の同列へ斬り込んで討死をせぬ、よくも阿容々々とお供をして歸つて來られたものぢや」

家老のお叱りに會つてお供の者は一言もないのであります。家老のお叱り其の者が何を意味する

のたかを合點する事が出来ませんでした。

これは無理のない事で、たごへは毒を飲まされた時に、飲まされた當人が黙つて堪へてゐる以上は、外から見て其の苦痛や惨酷の程度がわからないのは當り前の事でありませぬ。

駒井家の邸内は沸騰しました。これから神尾主膳の邸へ斬込まんとする殺氣が立ちました。それを徹しく押へた能登守は、追つて自分の沙汰する處を待てと云つて、例の研究室へ入つてしまひました。其の邸内が此んなに混雜したのみならず、この噂は城下一般に燃え立ちました。駒井能登守の家來が今にも神尾主膳の屋敷へ斬り込んで来るといふ噂が立ちました。神尾の屋敷では、それこそ面白い、さうなれば能登守が恥の上塗り、見事、斬込んで来るなら來て見るといふ意氣込で人を集めて待ちかけました。

其の附近の家々では家財道具を押片附けて今にも戦争が始まるかのやうに慌てるものもありました。併し、その形跡が無いうちに、又も噂が立ちました。

「駒井能登守が自殺した」

といふ噂が立つと、神尾家の者共は、それ見た事かと思ひ満面でありました。間もなく自殺は嘘で、心中だ！といふ噂も立ちました。さうたらう、心中たらう、相手が宜いから其んな事たらうと云つてまた笑つたり囃したりしました。

處が、それ等の噂は皆んな嘘で、能登守は相變らず研究室へ籠つて大砲の研究をしてゐると云ふ

ものもあつて何が何たかわからなくなりました。

邸の中はひつそりしてゐましたけれど邸の外は囂々として上も下も此の噂で持ち切りでありました。この事からして能登守の信望は地を拂つてしまひました。

能登守に幾分か同情を持つてゐる者は、お君といふ女が、人交りのならぬ分際のも者でありながら、素性を包んで能登守を騙かし、それを窮地に陥れたことを、悪むべき女、横着の女であるとし、それを浮と信用して疑はなかつたのは、つまり能登守の宏量なる所以であつて、罪は一にお君にあるやうに云つてゐました。

つまり其の宏量といふのは世間を知らないといふ事で、ドノ道素性を隠してお妾にならうといふ程の女だから、旨い物を食つて佳い着物を着せて貰ひさへすれば殿様であらうと折助であらうと誰でも相手にする女郎と同じ事の女を寵愛してお部屋様に引上げ、それが爲に家門を潰すやうな事にまでなるのは、お氣の毒さは云ひながら餘ほさお目出たく出来てゐる殿様たご口癖なく罵る者もありました。殊に例の折助社會に至つては、こんな事は待つてゐましたといふ程に喜ばしい出来事で、有らゆる醜陋と下劣の言葉で皮肉や嘲弄の材料にしてゐました。

こんな鹽梅で、土分の間にも、町民の間にも能登守に同情を寄せる者は一人も無くなつてしまひました。内心は同情を寄せる者があつても、それを口にするご自分も亦穢多であり非人であるかの如く下けすまれるのが辛いから、御多分に洩れず口々に能登守の行ひを汚らはしいものとして

罵つてゐました。見かけ倒しの徳い殿様たさいつて、世間の口の端に調子を合せては笑ひ物にするのが多いのであります。

能登守の邸は其の當座閉門同様です。何でもあの席から歸つたあさへ、若年寄からの傳達があつて、不目、能登守は江戸へ呼びつけられるのださうな事です。

それで今頻りに邸内の整理をし、暇を遣はすべき家來達には暇を遣はし、引次ぐべき事務は引次ぎ、邸外へ送り出すべき荷物は毎日送り出して頻りに始末を急いでゐるのださうな事でありませう。それで、いよ／＼ひつそりしてゐる邸内の模様を引きかへて、外の評判は刻一刻に高まつて行くのであります。その評判を煽るのは神尾主膳であるらしく、汚ららしい者を妾にかゝへたのみならず、破牢の罪人を隠匿して逃がしてやつたり、甚だしいのは盗賊を出没させて城中城下から金を盗ませ、それをひそかに蓄へて、他日此の甲府を根城に事を起す時の軍用金として準備してゐるさうな事まで言ひ觸らす者があります。

神尾主膳は、あれだけでは飽き足りないで、有らゆる流言を放つて此の機會に駒井能登守さういふものを士民の間の憎悪と怨府さにしてしまはうさういふ策略のやうに見えました。

この策略が圖に當つて、駒井能登守は逆賊の片われであり、穢多非人の保護者であるやうに思はれて來ました。

能登守の邸の中へ外から石が降りはじめたのは幾らも経たないうちの事でありました。その石の

雨が一晚毎に殖えて行きました。それでも能登守の屋敷中は何故か、ひつそりしたものでありましたが、氣になつて石の雨が晝も邸の中へ降つて來る有様さまでなつてしまひました。

夜は漸く人が出て面白半分に石や瓦を投げ込むのであります。さうして聞くに堪へない罵詈雑言を加へては哄々閑の聲を揚げる有様は丸で一揆の様な有様でありました。

併し、遠巻にして此んな亂暴を加へるだけで、誰も近づいては來ませんでした。それは此の邸には大砲さういふものがあるし、また主人の能登守は無雙の鐵砲上手であるさういふことが怖れの重なる理由でありました。

さうしてゐるうちに或日、駒井家の門が八文字に開きました。其處から威勢よく馬を乗出したのは例の通り筒袖の羽織に陣笠を戴いた駒井能登守でありました。

それに従うた家來が十人許り、何れも徒歩でありました。この一行は勢よく表門を乗り出して、八日市通りを東に向つて練り出しました。

それさ氣のついた者は早くも立ち出で、  
「御支配が江戸へお引上げになる」

さいつて騒ぎました。騒いだだけさも、一行の威風に吞まれて夜陰屋敷へ來てするやうに歸つたり石を投げたりする者はなく、たゞ一種異様の眼を以て見送つてゐるうちに、馬蹄の音は消えて一行は早くも甲府の城下を去つてしまひました。

一行の姿が見えなくなつてから、また噂は噓すしくなりました。あ、して、此の甲府から引上げた能登守は、問題のあの身分ちがひのお部屋様といふのを如何處分なされたのたらうといふ事が評判の種ならすにはあませんでした。そのうちに怖ろしい噂が立ちました。

それはお部屋様のお君が自害してしまつたといふ噂と、殿様のお手討に遭つてしまつたといふ二説であります。自害説よりはお手討の方が有力でありました。

駒井能登守は其の立退きに當つて、寵愛のお君の方を斬つて二つにし、井戸へ投げ込んで立ち去られたと、見て来たやうに云ふ者もありました。さうではない、家臣の者がお君の方を刺殺して井戸へ投げ込んで引上げたのだといふ者もありました。

兎も角、すべての者にお暇が出て、その中の一部の者は殿様がつれてお引上げになるうちに、遂にお君といふ女が如何なつたかは、誰も其の行方を知るものがありません。殊に其の行方を知りたがつて細作をこしらへて置く神尾派の者までが、遂に其の消息を知る、こゝが出来ませんでした。總て知りたがつてゐる事が、わからないのだから、それで様々の揣摩と臆測さが、まことのやうに傳へられて来るのは尤もの事でありました。

其處で駒井能登守の屋敷は實際上の明家となつてしまひ、筑前守の手に暫らく預かる事になりました。二三の番人が置かれる事になつたけれども、その番人が夜になると淋しがつて堪まりませ

ん。

「お化が出る」

「といふ噂が、またバツと立ちはじめました。そのお化を見たものがあるのださうです。一人や二人でなく幾人も其のお化を見たといふ人が出て來ました。」

その説明によると、お化は若い美しい美しいお化で手に三味線を持つてゐるといふ事でありました。それが肩先を斬られて血みさりになつて井戸の中から出て來て、座敷をさがし歩いては泣くといふ事でありました。

人の口の端といふものは、それからそれと枝葉が出るもので、能登守が馬に乗つて門を出た時に、若い女の姿が眞白な着物を着て、烟のやうになつて、能登守の馬のあとから追つて行つたのを見たとはいふ者まで出ました。

その當座は、またく其の噂で持ち切りで能登守の屋敷あさは、金箱付の化物屋敷にされてしまひ、そのお君の方を斬込んだと傳へられる井戸は固く封ぜられ、遂には其の屋敷の前を通る者さへ少くなりました。

宇治山田の米友が此の噂を聞いたら如何たらう——さう云へば袖切坂で下駄を持ちあつたああの男は今如何してゐる。

わが親愛なる宇市山田の米友は、袖切坂で拾ったお角の下駄を持ちあつかつて一里の間も二里の間も持ち歩いてゐました。

いつまでも其の下駄を持つて歩いた處で仕方が無いから、遂に笛吹川の上流にあたつて、こある淵の中へ思ひ切つて其の下駄を投げ込んでしまひました。

それから米友は大菩薩峠を登りにかかりました。

例の躰足を俊敏な體さ、手慣れた杖さに乗せて、苦もなく峠を登つて、やがて大菩薩峠の頂に着きました。

頂上には妙見の社があつて、其の左の方に二間に三間位の作事小屋があります。

「やれ〜」

作事小屋には誰か仕事をしかけて置いてあるらしく、切石が幾つも軽がつて石壁いしかべなども放り出されてあります。

石工の坐つたと思はれる處の藪の上へ米友は坐り込んで、脊中の風呂敷から、お角の家でこしらへて貰つた竹の皮包の胡麻の着いた握飯を取り出して眼を圓くしてゐましたが、やがてバクリと一口に頬張りました。

握飯は大きなのが五つ拵へてありました。それですから米友が今一つ頬張つてムシャ〜喰つてゐるさ竹の皮包の中には四つ残るのであります。

その大きなのを一つ食べてしまつてから、米友は峠の下から汲んで来た竹筒の水を取つて飲みました。それからまた握飯を一つ取つて頬張りました。それを食べてしまつて、また竹筒の水を取つて飲みました。三つ目の握飯を米友が食べてしまつた時に、惜しい事には竹筒の中の水を飲みつくしてしまひました。これは握飯の味が利き過ぎてゐたせいか、或は米友の咽喉が乾き過ぎてゐたせいか知らないが、兎も、米友としては少し飲み過ぎた傾きがないではありません。

胡麻のついた握飯は、またあさに二筒残つてゐるのであります。それなのに水は早や盡きてしまひました。それは米友でなくても山路を旅して腹の減つた時分に、握飯を嚼じるほど美味しいものは恐らく此の世に無からう筈のものであります。まして小兵ながら健啖な米友が、この場合に五筒の握飯を三筒だけ食べて、あさを残すさいふやうな事が有らうと思はれませんのです。けれども水は盡きてしまひました。

「ちよつ、水が無くなつてしまやつた」

しばらく思案してゐた米友は、最前登つて来る路のつひ近い處で、水の流れる音を聞いた事を思ひ出しました。それを思ひ出すさ竹筒を取り上げて、杖なしでさつささ峠道を少しばかり下りて行きました。それは竹筒へ水を汲まんが爲めであることは察するまでもありません。



この小説の、一番最初の時に、巡禮の姿であつたお松といふ少女がこれと同じやうな事を、これと同じ處で繰返してゐたのであります。その時の少女は老人の巡禮に伴れられてゐましたけれど、今の米友はたつた一人であること、その時のお松は瓢箪へ水を汲みに行つたけれど、今の米友は竹筒を持つて行つた事が違へば違ふやうなものです。

曾てお松がこの下の清水を瓢箪に満たして、欣々として歸つて來た其の間に、連の老巡禮は見るも無惨な最後を遂げてゐました。

それ等の出來事は一向米友の知つた事ではありません。米友も亦、期せずして前にお松が汲んだらうと思はれるあたりの渾の清水を竹筒に満たして欣々として、もこの處へ歸つて來たけれど、其處には何等の意外な變事も起つてゐた模様も見えません。

「おや」

何等の變事もないと思つたのは、米友が此の峠を初めての旅人であつたからであります。竹筒を持つて作事小屋の中へ入つた時までには氣が着かなかつたけれど、其處へ來て見ると、今の米友に取つては可なり重大な變事が起つてゐる事を知りました。

「握飯が無えや」

五箇の握飯のうち三箇を食べてしまつて、あと二箇を残して置いたことは紛れもなき事實であります。其の二箇さても何も嫌で残したわけではない。食べたくて堪まらないのだけれど、それを

成るべく早く食べようと思つて、わざ／＼途中で休んで水を汲みに行つたものであります。その取つて置ききの二箇の握飯、しかも胡麻のついた大きなのが、わづかの間に消えて無くなつてゐたのだから、さすがの米友も力を落さないわけには行きません。

併し、米友の氣象として、一時は力を落しても其のまゝ引込んでゐる事は出來ないのであります。

「太え奴だ、誰が盗りやがつた、人の大切の胡麻のついた握飯を盗んだ奴は何處にゐる、此方は嫌で残して置いたんじや無えや、これから水を一杯飲みながら早く食べようと思つて取つて置いたんだ、それを持主に黙つて盗つた奴は何處にゐる、遠くへ逃げる際がある譯で無えから、何處か其處らにゐやがるんたらう、この堂の中か、堂の後あたりに隠れてゐやがるたらう、やい、人の大切の胡麻のついた握飯を盗つた奴は何處にゐる、こゝへ出て來い」

米友は眼をクル／＼して堂の中や堂の後を見廻したけれども、人の氣配は無いのであります。それで米友も、怒つては見たけれど、拍子投のやうでもあり、自分ながら解せないのであります。人通りの多かるべき處でもない此の山路で、こんなに素はしつこく握飯を掠められようとは米友も思ひ設けぬ事でもあり、殊に其の傍には外に荷物を入れた風呂敷包もあれば、笠や杖もあるのに、それ等には眼も觸れないで、握飯だけを取つて行つてしまつたのは、餘程食辛棒の泥棒か、さうでなければ、飢に迫つての旅人の仕業さしか思はれないのであります。そのいづれにしても此の僅の間に、それをせしめるさいふのは、敏捷を以て誇りとする米友には頼な藪當である

と思ひましたから米友は、一旦は怒つて、それから後は空しく竹の皮の亡骸を見つめて思案に暮れてゐました。

米友は凝と腕組をして思案に暮れてゐる時に、頭の上の栗の大樹の梢で、

「キヤツ／＼」

さいふ聲。米友が頭を上げる。其の大樹の幹に一群の動物がゐる事を知りました。

「畜生、此奴等、手前達の仕業だな」

米友は其れを見るより勃然として怒りました。見上げる栗の大樹の梢にたかつてゐる一群の動物は猿であります。その猿共が、大切の胡麻のついた握飯を持つて、それを一口食つては米友に見せ、二口食つては米友に見せてゐるのであります。それから餘の猿はまた尻を米友の方へ向けてバタ／＼叩いたり、木の枝を揺つたりして、頻りに米友に向つて挑戦をすらしめてあります。

「畜生！」

米友は齒齧をしました。僅かの間に畜生共に馬鹿にされたかと思ふと、米友の氣象では堪らないのであります。直に手慣れた杖を取り上げましたけれど、不幸にして彼等は餘り高い處に居るのであります。さすが手練の米友の槍も、距離に於て如何する事も出来ません。

「よし、こん畜生！」

米友は杖を捨て、石を拾ひました。拾つた時石は既に空を飛んでゐました。

その視ひは過つ事なく、米友が石を拾つたかと思ふと、ほさんと一緒に、

「キヤツ」

と叫ぶ聲が樹の上でして、撞さいふ音が米友の足許でしました。

「こん畜生」

その時、米友は一匹の大猿の首筋を後からギウと抑へて膝の下へ組み敷きました。抑へられた猿は苦しさに絶叫したけれど、淺ましい事に胡麻のついた握飯を其の手から放す事ではありません。

「手前達は憎らしい畜生だ」

と云つて米友は、猿の頭を二つ三つぶん撲りました。猿は殺される事かと思つて苦叫絶叫して悶擾いたけれど、米友は懲らしめるだけで事實殺す氣は無かつたものらしくあります。少しばかり懲らしめて開放してやるつもりで二ツ三ツぶん撲つたのを、當の猿は殺されるのたらくと思つて有らん限りの絶叫をしました。

さうする。樹の上に見てゐた猿共が、バラ／＼と樹から飛んで下り一様にキヤツ／＼と物凄い叫びを立てました。

その物凄い叫びを聞くに、何處にゐたか知れない無数の猿が、谷から谷、樹から樹を滑つて續々さして走せ集つて來ました。その面の色は、いづれも物凄い色をして眼を刺し出し、白い齒を刺き出して丸くなつて米友を目がけて襲ひかゝつて來ました。

米友は猿を怖れるものではありませんでしたけれど、その数の多いのを見ては驚かないわけには行きません。さうして彼等の面が、いづれも残忍な色を現はしてゐる事を見て取らないわけには行きませんでした。

「この奴等、俺らに手向えをするつもりだな。こん畜生」

正直な米友はまた此の猿共の不遜な舉動を憎まないわけには行かないのであります。人の物を盗んで置きながら、其の懲らしめを怖れずに却つて反抗し來るとは、身の程知らぬ猿共だと思つてムキになりました。

それで米友は、抑へつけてゐた大猿の頭を、一つガンと食はせました。大猿はギューと云つて息が絶えた容子であります。その時に猛り立つた群猿は八方から一時に米友を目がけて飛びかかりました。

「猪口才な、こん畜生奴」

米友は其の大猿を片手で掴んで群猿の中へ投げ込んで、例の手慣れた杖槍を押し取りました。

「此奴等！」

その杖槍を縦横に打ち振ると、猿共はバタ／＼と引くり返つたり飛び散つたりするが、直ぐにまた其の後から後から後詰が出て來るのであります。或者は木の上へ登つて其處から木の枝を投げおろしました。或者は妙見の社や作事小屋へ登つて石ころの雨を降らせました。米友は其の杖槍

を流々ど揮つて其の傍へ猿共を寄せつけないのであつたけれど、この騒ぎと猿共の絶叫を聞いて附近の山々、谷々から續々集まつて來る猿の数の夥しいこと、その面色の穢かならぬ事にはいよく驚かないわけには行かないのであります。

「斯うなりや、一匹残らず突殺してやるから覚えてみやがれ」

米友は遂々其の杖槍に、しかと穂先を穿めました。其れを下段に構へて、當る處のものを幸ひ、一匹残らず槍玉に揚げて、峠の谷を埋めてやらうと決心しました。

多勢を恃む猿共はいよく驕慢でありました。けれど恰愾な彼等は、いつも相手の實力を見るのに鋭敏でありました。ですから米友はギラ／＼光る穂先を杖の先にすけて一匹残らずといふ手強い決心をしたのを見て取つて、急いで木の上や堂の上や作事小屋の上へ飛び上り、其處から眼を丸くし、齒を剥き出して米友を睨めてキャツ／＼と叫んでゐます。

満山の猿は、米友一人を遠巻きに押取圍んでしまひました。

米友が少しでも隙を見せれば、彼等は一度にドツと押包んで取つて食はうといふやうな形勢であります。

單身を以てすれば猿に劣らぬ俊敏な米友も、斯う多數を相手にしては、ドレを目當に懲らしてい

いか、わからないのであります。それで米友は齒齧をしました。

この時、何處からともなく、

「ホーイホーイ」

さいふ聲、猿共がキャツ／＼と云つてゐる中で、その聲は、はじめは米友の耳へ入りませんでした。つゞいて、

「ホーイホーイ」

さいふ聲、それが耳に入ったのは米友より先に、米友を取り圍んだ猿共であります。

「ホーイホーイ」

その時に米友も風の聲かと思ひました。

「ホーイホーイ」

人間の聲であることは紛れもないのであります。人ならば二三千人の聲でありませう。其れが何人であつて何の爲にする聲たかわかりません。此方へ来る人の聲であるか、または何處かへ一團りになつてゐる人々の聲であるかもよくわかりませんでした。

「ホーイホーイ」

さいふ聲が漸く聞え出して來た時に猿共が、遽に動搖めき出した事がよくわかります。

米友の氣象としては、敢て此の猿共を相手に取ることに於て、人の加勢を願はうと思はないのであります。それだから人の聲がしたからとて、其れに助けを得たとは思はれたくないのでありま

す。人が來ようが來まいが、斯うなつた上は一匹残らず此の傲慢不遜な猿共を退治てやらなければ、蟲が治まらないと思つてゐるのであります。たゞ何處から形をつけていゝか餘りに其の數が多いことによつて、戸惑ひをしてゐるのに過ぎないのであります。

「ホーイホーイ」

その聲は相變らず遠くもなく近くもなく纏まつて響いて來るのであります。猿共は米友を睨めると共に類に其の聲のする方を氣にしてゐるやうです。

其のうち如何したものか、猿共の陣形が忽ち崩れ出しました。一たび陣形が崩れ出すと共に畜生の淺ましきであらう、今までの擬勢が一時に潰れて、我勝に逃げ出しはじめました。その崩れたのと逃げ足との、あまりに慌しいのは米友をして呆氣に取らせるほどでありました。

「ホーイホーイ」

その聲が敢て近寄つたさいふわけでもありませんのに。だから米友も亦少しく拍子拔の體であつた時分に、やゝ離れた處へ大きなものが一つ現はれました。

「今日は、随分いゝ天氣でございますねえ」

その大きなものは米友と可なり隔たつた處にゐながら斯う云つて米友に挨拶しました。

「いゝ天氣だよ」

米友も亦佛頂面で返事はしましたけれども、其の大きな物體を何となく同抜けた男だと思はない

わけには行きません。ナゼならば其の大きな男は牛見たやうな體格をしてゐる上に、面つきが如何にも暢氣らしく、その上に、自分でいゝ天氣ださ云ひながら、此のいゝ天氣に松明の大きな火をつけて拂へてゐるので、可成り間拔野郎ださ米友は見て取つてしまひました。

尙ほ其の上の間拔なことは、脊中に大きな石地蔵を一つ脊負つてゐることで、それを脊負つてウーン／＼唸りながら此處迄登つて來たさ思はれる御苦勞さであります。

「今日は」

その大きな物體は、今、脊中の石地蔵を作事小屋の中へ運び入れて臺の上へ寝かして置いてから、額の汗を拭き／＼また米友の前へ來て、二度目に今日はさ云ひました。

「今日は」

米友も亦妙な面をして此の男に挨拶を返しました。

「お前さんは、この峠をお通りなさるのは初めてござんすべえ」

さ間抜けた男がニコ／＼しながら米友に斯う云ひました。

「あ、初めてたよ」

「だからお前さん、猿にオドかされなすつたのだ」

「ほんに憎い畜生よ」

米友の餘憤は容易に去らないのであります。

「何か猿が悪戯をしましたかね」

「俺等が此處に置いた胡麻のついた握飯を盗んで行きやがつた」

「それをお前さんが悪戯ひなすつたんでございませう、だから猿があゝして仲間をつれて來てかすんでございますよ」

「人を馬鹿にしてゐやがる」

「ナニ、猿たつて其んなに悪い者じゃありませんよ」

此の男は何氣なき體でニコ／＼してゐる事が、米友には幾分か癪にさはらないではありません。この米友をさへ怖れなかつた猿共が、この間抜けた男が來た爲めに逃げ出したさすれば、米友の估券にかゝはらないさいふ限りはない。米友は自分の實力で此の猿共を懲らす事が出來ないで、外來の人から追つ拂つてもらつて、それで漸く危急を逃れたさいふやうに見られる事は心外でせう。それですから米友は、餘計なお世話さ云はぬばかりの面をして大きな男を睨めました。

「猿を追つ拂うには力づくでは可けねえのでございませう、初めての方は、この松明が一番宜いのでございませう、松脂でもいゝのでございませう、猿は人間よりか火の方を怖がりますから斯うして火を持つて歩くと、傍へ寄れねえのでございませう、だから此處を通る旅の人は皆んな松明を用心してゐるのでございませう、お前さんは其の事をお知りなさらねえから、それで猿があゝして集つて來たのでございませうよ」

この説明を聞いて米友は成程と合點しました。これによつて見れば猿が逃げたのは、自分の實力よりも此の大男の實力を怖れたからではなく、全く火を持つてゐるのさぬないのとの相違で、人物の如何にはかゝはらないのだといふ保證がついたやうなものだから、それで米友は幾らか安心しました。さうして見るに此のよい天氣に松明をつけて来たといふ事が必ずしも間拔ではなく、それを間拔と見た自分の無智であるといふ事を悟らないわけには行きませんでした。さう悟つて見ると、この男が今春中へ春負つて来た大きな石の地藏尊に大した重味がある事に気がついて、何處から春負つて来たか知らないが、兎も角、この石の地藏尊を春中につけて此の難澁な峠を登りつめたものとすれば、此の大男の力量の測り知るべからざる事に、今となつて舌を捲かないわけには行かないのであります。

「こりや何かエ、お前が、この地藏様を何かエ、下から春負上げたのかエ」

「エ、左様でございますよ」

「一人で春負上げたのかエ」

「エへ、」

「うーん」

米友は唸つて其の地藏様と大男とを見比べました。米友は四尺足らずの精悍な小男であるのに、

其の男は牛のやうな大男で、それで年は自分と同じ位に見れば見られない事もないので、また前髪があるといへばあるのであります。

米友も自分の力に於ては自負してゐる處があるつもりだけれど、この地藏様を春負つて此の六里の險道を越えるといふ事は、残念ながら覺束ない事でありませぬ。第一自分の身の丈が許さないのであります。それですから、

「うーん」

さ唸つて大男の面を見つめてゐました。

「お前は中々力がある、それで何かい、槍も使へるのかい」

「槍」

大男は妙な事を云うと思つて米友の面を見ました。

「さうさ、力はあつても槍を自由に使ひこなす事は出来ないたらう」

「そんな事は出来ねえでございます、槍の劍術のといふものは俺には出来ねえでございます」

「さうたらう、こりや中々生れつきなんだからな、力はかりあつたつて上手に使へるさ云ふわけのもので無えんた」

力の分量に於て此の大男に及ばない事を自覺しかけた米友は、技に於て優れてゐる事を自負しようとしてゐるものゝやうであります。

「お前さんは此れから何方へお出でなさるんだね」

大男は力や槍や劍術の事には取り合はないで米友の、これから行くべき方向をたづねるのであります。

「俺等か、俺等はこれから江戸へ行かうと云うんだ」

「江戸へ、さうして何方からお出でなすつたのたね」

「甲州から来たんだ」

「さうでございますか、それでは俺も、これから武州路を歸るのでございますから、一緒にお伴をして歸りませう」

「其りや有難てえ」

「ホーイホーイ」

「何たい、先からあの聲は」

「猪が畑を荒らすから、其れを村方で追拂つてゐるのでござんすべえ」

この大男が深井の水車番の與八であることは申すまでもありません。

與八が背負つて来たお地藏様は、いつぞや東妙和尚が手づから刻んだお地藏様であることも推察するに難くない事であります。

肥大なる與八と、短小なる米友が打連れて歩く處は、當人達は至極無事のもりたけれど、他目

で見れば可なりの奇觀を呈してゐるのであります。與八の歩くのは牛のやうでありましたけれど、然も大股でありました。米友の走るのは甘鼠のやうであつて而も跛足なのであります。與八を煙草入とすれば米友は其の根付のやうなものであります。與八を三味線とすれば、米友は其の撥見たやうなものです。若しまた與八をお供餅とすれば米友は團子見たやうなものであります。與八を猪八戒として米友を孫悟空に見立てることは、やゝ巧者な見立て方であるけれど、與八は八戒よりも大きく、米友は悟空よりも小さい位の比較でなければなりません。

「お前。江戸に親類があるつて」悟空がたづねました。

「俺の親類は下谷にあるんでございます」八戒が答へる。

「下谷、俺等も其の下谷へ訪ねて行かうと思ふんだが、下谷は何處たい」悟空が再びたづねました。

「下谷は長者町といふ處なんでございますよ」八戒は念入りに再び答へる。

「おや、下谷の長者町、俺等のこれから尋ねて行かうといふ處もやつぱり其の下谷の長者町なんだが」

「左様でございますか、お前さんも其の長者町に親類がお有りなさるんでございますか」

「親類といふわけしや無えんたけれど、些さばかり世話になつた人があるんだ」

「左様でございますか、さうして、お前さんの訪ねてお出でなさるお家の商賣は何でムいますね」

「商賈は醫者だ」

「おや／＼、俺の親類もお醫者さんでございますよ」

「何だつて、お前も同じ町内の同じお醫者さん、それで名は何さいふお醫者さんだい」

「道庵先生」

「道庵先生だつて」

「左様でございますよ」

「俺等の尋ねて行くのも其の道庵先生の許なんだ」

與八と米友とは偶然、その訪ねようとする目的の家を一つにしました。與八と米友とは此處で初對面のやうでありましたけれど、實は初對面ではないのであります。

前に一度對面は済んでゐるのであります。併し其の對面は與八も其れを知らず米友も亦其れを知らないであります。與八は其の時に米友を日本人として見ては居ませんでした。米友も亦其の時の見物に此の人があつた事は覚えてはゐる筈がありません。それを知るものは道庵先生ばかりであります。この兩人は途中の話頭によつて、お互に行く先の暗合を奇なりとして驚きました。それから山路を歩く間二人の會話を聞いてゐると、可なり人間離れのした受け渡しがあつたのであります。

## 七

惠林寺の僧堂では若い雲水達が集まつて雑談に耽つて居りました。彼等とても眞面目な經文や禪學の話ばかりはしてゐないのであります。夜になつて斯うして面を合せた時には、思ひ切つて人間味のありさうな話に興を湧かすのであります。人間味さういふのは、何も色戀の沙汰許りではないけれども、此處では特にさうなるのであります。

嚴肅な僧堂生活の反動さういふわけではない、彼等とても強健な身體に青年の血を満へてゐるので、すから、其んな話に興味を起すことは無理もないのであります。それも話に興味を起すわけでは満足が出来ないで、事實に於て此等の連中には垣根を越えて寺の外へ迷ひ出すものが少くないのであります。

さうして附近の遊廓や茶屋小屋へ、こつそりと遊びに行つたり、土地の女達に通つたりする者が無いではありません。それをする時に體よく組を別けて、一組は留守を守り、一組は垣根を越えて行くのであります。斯うして外へ迷ひ出して歩くものを彼等の仲間で亡者と呼んでゐました。これ等を取締るのは例の慢心和尚の役目であります。けれどもあの和尚は弟子共が此んな人間味を味ひはじめたのを、また知らない容子であります。或は知つてゐても此の和尚は其れを大目に見てゐるのかさと思はれないではありません。或はあの通り圖々しい和尚の事だから、遣れ／＼



若いうちはウンと遺つて見るがいゝ、なんかと云つて蔭で獎勵してゐるのかも知れせまん。併し、苟くも宗門の師家として其んな事が有らう筈はありません。たゞへ若氣の至りとは云ひながら、雲水達の一部に斯んな人間味が行はれ初めたといふ事を知つた以上は、和尚として嚴乎たる處置を取るべきであります。

この晩、右の若い雲水達は、またも垣根を越えはじめました。垣根を越える時には、留守の當番に當つた者が垣根の下に立つのであります。外へ迷ひ出す者は其の留守の當番に當つた者の肩を踏臺にして、垣根を乗り越える事になつてゐるのであります。若し其の踏臺の脊が低い時には肩でなく頭へ足を載せて乗り越えるのであります。今宵また其の通りにして五人の若い雲水が垣根を乗り越えました。踏臺になつた雲水は、明晩は自分の當番だといふ事を樂みにして歸り、その五人の者の寢床を、さも木物であるやうに拵へて置きました。さうして自分は蒲團の中に潜り込んで休みながら、こんな事を考へてみました。

「この頃、向嶽寺の尼寺へ素敵な別嬪が来たとか来ないとか云つて仲間の者共が騒いでゐるが、ほんごに來たものたか來ないものたか其の邊は頓と疑問じや、よし／＼明晩は行つて、おれが見届けてやる、見届けた處で、如何しようといふわけではない、役人共のように張つて見やうとが振られて歸らうとかいふやうな、ソシなケチな了簡で見届けて行くのではない、これも修業の爲めである、僧堂の中で慢心和尚の出鱈目を聞いてゐるはかりが修業ではない、和尚來れば和尚、

美人來れば美人……」

こんな事を一人で考へ込んでゐるご其の時、オホンといふ咳が聞えました。この咳は慥に慢心和尚の咳でありました。それを聞いた若い雲水はハツとして、ひゞり言の氣焔せきまと北叟ほくそう笑わらごが消えてしまひました。和尚來れば和尚……と云つて力んではゐたけれど、其の咳の聲だけで縮み上つた處を見るに、美人が來ればやつはり魂を抜かれてしまふのであります。そこで此の雲水は氣焔と獨り笑ひさをやめて、蒲團を頭から被つてゐるうちに、晝の疲れでグツスリと寢込んでしまひました。

寢込んでしまつては可けないのです。實は迷ひ出した五人の亡者が戻るまで眠らないであつて、戻つた合圖を聞いた時には、また踏臺として出て行かねばならぬ義務があるのであります。それを忘れて寢込んでしまひました。

斯くも知らず迷ひ出でた五人の亡者は立ち戻つて來て垣根の外へ立ちました。

合圖にトン／＼と垣根を叩くさまの定、中からもトン／＼と垣根を叩いて答へました。

外にあた亡者は仲間の者の肩を踏臺にして中へ入るに、中にまた踏臺が待ち構へてゐました。

第一に乗り越えたものが、足を卸ろして、中にゐる踏臺の肩を踏まうとして勝手を間違へて頭を踏臺にしてしまひました。これは間違つたと思つたけれども横着な心が出て、そのまゝ、兩足を頭へ載せてしまひました。下になつた踏臺は其れでも別に不平は云はないのであります。なぜなら

は明晩は自分が同じやうにして人の頭を踏臺にする事が出来るのだから、鎌倉権五郎のやうな野暮を云ふものはありません。

併し、この頭は踏臺としては餘りに圓くありません。坊主の頭に圓くないのは無いやうなものだけれども、それにしても餘りに丸過ぎたから、危なくツル／＼と迂りさうなのを體を轉じて辛くも飛び下りました。

第二の亡者は其れでも幸に肩を踏んで無事に入りました。第三のはまたツル／＼した頭を踏臺にして、第一と同じやうに危なく飛び下りました。その他第四、第五も、肩を踏臺にしたり頭を踏臺にしたりして、兎も角迷ひ出でた五人の亡者は、また無事に寺へ舞ひ戻つたのであります。

勿論、これは深更の事であり、また秘密の行ひでありますから、極めて物靜かに行はれたのであります。外から来た亡者は元より口を利かず、中にゐた踏臺も亦一言半句を云はないで、彼方を向いて従容として踏臺の役目を果してしまつたのであります。

さうして彼等は無言のうちに寢室へ急ぎ、踏臺も亦、いつか知らない間に何處へか片づいてしまひました。廣い寺の境内は森閑として靜かなものになつて了ひました。

こゝに寢室へ歸つて来た五人の亡者が、ハツと度膽を抜かれた出来事が一つありました。今、此處で雷のやうな軒を聞いて口を開いて寢てゐる雲水は、たしかに今踏臺になつた筈の雲水なのであります。明晩は亡者となつて迷ひ歩くべき権利者であつて、今晩は踏臺となるべき義務者なの

でありました。たつた今踏臺となつた男が、自分達より先廻りをして、もう此處に軒を聞いて口を開いて寢てゐるごいふことは、悪戯にしても餘りに敏捷な悪戯でありました。まして其れは悪戯ではなく、事實其處に今まで將込んでゐたものと見るより外はないのでありますから、五人の亡者は面を見合せて何さなく氣味の悪い思入であります。

この踏臺が此處に寢込んでゐたのなら、今の踏臺は何者であつたらうと、彼等は云はず語らず其の踏臺を訝かりました。

「おい愚賊、起きろ」

と云つて揺り起すこ、

「うーん」

と云つて眼を醒ますと共に、

「あつ、失敗つた！」

と云つて剣起きました。自分が踏臺となるべき義務を忘れて寢込んでしまつた怠慢を、さすがに慚愧に堪へないものと見えて、その周章方は尋常ではありませんでした。併し五人の亡者が踏臺無しに歸つて見れば、やはり解せないのは同じ事で、誰人か自分に代つて踏臺になつた者があると思ふなら、それなら、踏臺となる事は歓迎されてゐないのであります。成るべく

ならば踏臺なる義務だけを免れて亡者なる權利だけを持つてゐたいといふのが人情であります。人の亡者株を奪つてさへやりたいといふ世の中に、自分から進んで踏臺を引受ける者があらうとは、それは餘りに殊勝な振舞ひ云はなければなりません。

六人は、こゝで面を見合せたが、その時思ひ出したのは、道理で其の頭の江り方が少し變であつたわいといふ位の處で、別に其の殊勝なる踏臺の何者であるかを考へて見るまでに至らずに寢込んでしまひました。

その翌日の定刻に慢心和尚は講義をするといつて、例の二三冊の振假名の書物を持ち出しましたけれど、其の本を開かないで、圓い頭をツルリと一撫でして、細い目でチロリと席を見渡しました。

「愚藏、連十、英翁、甲論、乙伯、この頭をよく見て呉れ」

と云ひ出したから、集まつた雲水達は今更のやうに慢心和尚の面を見ました。和尚の面も頭も、いつも見慣れてゐる頭や面であるけれど、さう云はれて見れば見るほど圓いものであります。和尚は其の圓い頭を撫でながら、細い眼で一座の連中を見廻してニヤリと笑つてゐるのであります。さうすると、

「あつ！」

席の一隅に、思はず、あつ！と叫んで面色を變へたものが六人ありました。この六人は、あつ！

と云つて面の色を變へて、我を忘れて和尚と同じやうに自分達の頭を撫でました。

「オホ、」

と慢心和尚は面白さうに笑ひました。この和尚の、オホ、といふ笑ひ方は、握拳を口の中へ入れるのと同じやうに、餘人に眞似の出来ない愛嬌がある。

「あつ！」

と云つて自分達の頭を撫で廻してゐる六人といふのは、その中の五人は昨夜の亡者であつて、他の一人は其の亡者の踏臺なるべき義務を怠つた雲水でありました。

「オホ、」

和尚は再び笑ひました。六人の面色はいよゝ土のやうでありました。自分達の圓い頭を自暴になつて撫で廻してゐるけれど、其の圓さに於て到底慢心和尚に匹敵するものではありません。

さうすると和尚は、妙な手附をはじめてしまひました。それは兩手を幽霊でも出たやうに上の方からブラ下けて、自分の圓い頭の上へ持つて来て、そこでツルリと江らして見るのであります。それも一度でよせはよいのに、ゆつくり／＼やつて、二度も三度も同じ事を繰返して、

「オホ、」

と笑ふのであります。やり切れないのは五人の亡者と一人の踏臺でありました。もう澤山だと思つてゐるのに、意地の良くない慢心和尚は五度も六度も繰返すのだから眞に堪らないのであります。

す。

斯うして六人の人間は、やり切れない土壇場どたんばに迫つて九死一生の思ひをしてゐるのに、他の連中は一向其の事を解する事が出来ませんでした。これはお師家さんが何か深甚の意味を寓する爲に、手眞似を持つて公案を示してゐるのたゞ解する者もありました。

俱胝ぐだ和尙わじやうは指を豎て、趙州てうしゆ和尙わじやうは柏の樹を指したといふ事だから、慢心和尙まんしやうがあゝして幽靈ゆうりやうのやうな手つきをして自分の圓い頭をにらしてゐる處に、三世十方を座斷する活作略くわつさくりやくがあるのでは無からうか。これは一番骨を折らすはなるまいと、汗水を流して本氣になつて慢心和尙の妙な手つきをながめながら唸つてゐる眞面目な修業者もありました。

「オホ、」

漸くの事で、慢心和尙は其の妙な手つきをやめてしまひました。五人の亡者と一人の踏臺はホツと息を吐きました。

「さあ、お前達、これが出来るやうになつたら、裏口から忍んで出るには及ばない、大手を振つて山門を突き抜けて通るが宜いぞ」

と云ひながら、和尙は其拳を固めて、あなやと見てゐる間に其の拳をホカリと口の中へ入れて見せました。これには一同、

「あつ！」

と云つて驚きました。

## 八

昨晚踏臺の身代りになつたのは、此の慢心和尙であつたことを今思ひ出しても遅いのであります。師家の頭を踏臺にして迷ひ歸つた亡者こそ、いゝ面の皮でありました。けれども、この事からして、亡者がお寺から迷ひ出す事が無くなつてしまつたのは、これ慢心和尙の道力だうりきと申すべきものでありませう。

迷ひ出す事だけは、ヒツタリと留まつたけれども、若い雲水達うんすいの間に、その都度噂うわさに上るのは向嶽寺むかえきの尼寺にじの事であります。向嶽寺むかえきの尼寺にじへ、非常に美しい新尼しんにが来たといふことを、誰が何時の間に見たのか聞いたのか、その事が善き意味にも悪しき意味にも話の種かたまりに上つて來るのであります。

その向嶽寺むかえきの新尼しんには何者！それよりも先に向嶽寺むかえきの尼寺にじといふものゝ存在を説く必要がありますませう。

向嶽寺むかえきの開山かいざんは、拔隊はつたい禪師ぜんじ、臨濟宗りんじしゆのうちにも拔隊流はつたいりゆうの本山ほんざんであります。その尼寺にじを開いたのは赤松入道せきまつかうだう圓心えんしんの息女めいむすめであるといふ事であります。

播磨はりまの國主赤松入道せきまつかうだう圓心えんしんの息女めいむすめ、その姫ひめの名は何といふたかわからぬ。また一説には入道にちだう圓心えんしんの

娘ではなく其の孫であること、兎も角も其の當時に於て屈指の大名であつた赤松家の息女が尼ごなることを志したのは、よく／＼の事情があつたことであらうが、その事情もよくわかりません。此の寺へ訪ねて来て、披隊禪師に出家の願ひを申出でた處が、その願を聞いた禪師は、

「出家は大丈夫の事、女なんぞは思ひも寄らぬ」  
と云ひました。

けれども此の姫の決心は強いものでありました。其處で花のやうに美しい面へ無慘にも我ご焼綴を當て、焼いてしまひました。その強い決心にめで、禪師も遂に姫の尼ごなる望みを許したといふ事があります。その赤松の息女の歌として傳へられるのに、

面を恨みてご焼くしほの山

あまの煙ご人はいふらん

その赤松の姫君が此の尼寺の開基といふ事があります。それは南北朝時代の事であるから、可なり時が経つてゐます。

今の庵主は五十許の品のよい老女で、この老女が此頃になつて何か胸に思ひ餘る事がありけに、しきりに心を苦しめてゐるのが、さう思つて見れば他目にも見えます。

老尼の住んでゐる庵は昔から傳へられた名を其のまゝに燈外庵とうがいあんと呼ばれてゐました。珠数を爪繰りながら老尼が燈外庵の庵を出やうとすると、若い尼が、

「御庵主様、いづれへ御出で遊はしまするか尋ねました。」

「はい、わしはこれから、ちよつと惠林寺まで行つて参りまする。」

「左様でございますか、お供を致しませうか。」

「それには及びませぬ……併し、曾光尼、あの、わしが留守の間をよく氣を注げて給もれ。」

老尼は若い尼の耳に口をつけて何をか囁やくと、

「畏まりました、お大切に行つてお出で遊はしませ。」

その後此の若い尼は池の傍に立つて鯉を見てゐるけれども、心は鯉にあるのではなく、老庵主から頼まれた何者かの見守りに當るらしくありました。

暫らくした時に、池に向いた方の書院の障子がスラ／＼と開きました。その開いた間から見えるのは、やはり若い尼で然も此方にゐる若い尼さんよりも一層美しいものでありました。頭のかざりを下ろした尼さんさは見えませんが、頭巾を被つてゐた頬のあたりへ鬢の毛のほつれが見えます。永い尼寺生活をした寂しい人ではなく、また色香のこぼれるやうな美しい人でありました。

その姿を見るに池のほとりの尼は手を振つて何か合圖をするに、折角開きかけた障子を閉めて再び姿を現はすことをしませんでした。この美しい尼ならぬ尼は駒井能登守の寵者のお君の方であります。お君は、惠林寺へ寄進の長持を見せて其の中へ入れられて此處まで送り届けられたもの

であります。然も其の送り届けられた後まで、お君は其の事を知りませんでした。お君は、あの晩に、お松の口から思ひ切つた忠告を聞いて、お松が歸つたあとで咽喉を突いて自殺しようとした。

それは老女の手によつて止められましたけれど、その後のお君は、氣が狂うたと思はれるばかりであります。

その物狂はしさが靜まつた時分に、お君は死んでゐました。自殺したのではなく、誰かの手で死なされてゐました。誰かの手、それは恐らく駒井能登守の手でありませう。能登守は、老女に言ひつけて物狂はしいお君の息の根を止めさせたものと思はれます。何かの薬を與へて、それによつてお君は殺されてゐました。

お君が再び我に歸つたのは此の尼寺へ着いた後の事で、自分は寄進物の長持の中へ入れられて、此處に送られたといふ事も其の後に庵主から聞かされました。

慢心和尚が宇津木兵馬を呼んで、

「お前さんに一つ頼みがある」

兵馬は一旦此の坊主から腹を立てさせられましたが、今になつて見るに腹も立てないのが此の坊主です。何の頼みかと思つて聞いてゐると、

「向嶽寺の尼寺から、八幡村の江曾原まで人を送つて貰ひたい」

といふ事です。なほ其の人といふのは何者であるかを兵馬に尋ねられない先に和尚が語つて聞かせる處によると、

「向嶽寺の燈外庵へ此の頃泊つた若い婦人がある、燈外庵の庵主は其の若い婦人を預かるには預かつたけれども始末に困つてゐる——尼寺といふ處は、罪を犯した女でも、一旦其處へ身を投じた以上は誰も指をさす事は出来ないのだが、その尼寺で持て餘してゐる女といふのは……實は、お前さんから話すが身重になつてゐる——」

といふ事でありませう。和尚は眞面目でありました。

「それじやによつて、尼寺でも始末に困る、あの寺でお産をさせるわけには行かない、よつて何處ぞへ預ける處はないかと、わしが處へ相談に來た、そこで、わしが思ひ當つた事は、此の八幡村の江曾原に小泉といふ家がある、そこへ其の女を連れて行つて預けるのだが……」

と云はれて兵馬は奇異なる思ひをしました。八幡村の小泉は、もこの自分の縁家である。こゝへ來る時と思出のか、つた家である。今その家の名を此の和尚の口から聞き、而も身重の女を守護して其の家を訪ねよと請はるゝ事は、兵馬に取つて奇異なる思ひをせずには居られないのであります。

「小泉の主人が、いつぞや、わしの處へ來て和尚様、悪い女の爲に戒名を一つ附けてやつて下さ

いざいふから、わしは、よし／＼、悪い女ならば悪女大姉とつけてやらうと云ふたら、有難うござ  
います、そんなら悪女大姉とつけていたゞきますと云つて歸つた、その悪女大姉の家へ、また悪  
女を一人送り込むさいふのも因縁じや、此の役は他の者ではつごまらぬ、お前さんと無くしてはつ  
ごまらぬ。

兵馬は、いよく奇異なる思ひをして兎角の返事に迷ひましたけれど、思ひ切つて承知をしまし  
た。

「宜しうございます、たしかにお引受け致します」

「有難い、では、夜分になつて、八幡までは其んなに遠くもない處だから、宵の口に行つて戻る  
が宜い、併し、聞く處によるご其の女は中々曰くつきき女で、おまけに別嬪さんたさうだから、  
甲府あたりから狼が二三匹ついてゐるさいふことだから、その邊はお前さんもよく氣をつけてな」  
ご念を押しました。

兵馬が委細を承つて、やはり例の僧形で惠林寺から向嶽寺へ向つて行つたのは、其の日の宵の口  
でありました。

間もなく一挺の駕籠が向嶽寺から出て、僧形の宇津木兵馬は其の駕籠に附添うて寺の門を出て行  
くのを見ました。

宇津木兵馬は其の駕籠を守つて差出の磯にさしか、りました。

こゝへ来た時分には月が皎々さ上つてゐました。

差出の磯の龜甲橋かめがしほといふのは可なりに長い橋であります。下を流れるのは笛吹川であります。行  
手には龜甲岩が高く聳えて、その下は松原續きであります。

成程、耳を澄ますと何處かで千鳥が鳴くやうな心持がします。龜甲橋へ渡りかゝつた時に、

「右や左のお旦那様」

兵馬は其の聲を聞き流しにしました。駕籠屋も無論そんな者には取り合はないで行くぞ、

「右や左のお旦那様」

また一人、菰をかぶつて橋の欄干の下から物哀れな聲を出しました。兵馬も駕籠昇も其んな者に  
は、いよく取り合はないであるうちに、又しても、

「右や左のお旦那様」

橋の兩側に菰をかぶつたのが幾人もゐて、通りかゝる兵馬の一行を見て頻に物哀れな聲を出す。

「申し、たよりの無い者でござりまする、申し、申し」

菰を刎ね退けて一人が駕籠の前へ立ちふさがつた體は尋常さは見られません。

兵馬は、手に突いてゐた金剛杖を、ズツと立ち塞がる怪しいお菰の前へ突き出しました。  
それが合圖となつたのか、今まで前後に菰を被つてゐたのが一時に刎ね起きました。

「何をする」

兵馬は其の金剛杖を振り上げました。

「其の駕籠を此方へ渡せ」

菰を刎ねのけたのを見れば、それは乞食體の者ではありません。それ／＼用心して来たらしい仲間體のものでありました。

委細を知らない兵馬は、和尚が自分を選んで附けたのは此んな場合の事であるなと思つたから、

「エイ」

と云つて金剛杖で先に進んだ一人を苦もなく打ち倒しました。

「この坊主」

兵馬の手並を知つてか知らないでか、怪しの悪者はバラ／＼と組みついて来ました。

「エイ、無禮な奴」

兵馬は身を換はして組みついて来るのを、發矢々々左右へ打ち倒しました。それは兵馬の働きとして敢て苦しいことではなく、彼等を打つことは大地を打つと同じことに、それを換はずのは繩飛の遊びをするのさ大して變つた事はありません。

驚いて逃げ足をした駕籠舁も兵馬の手並に心強く息杖を振つて加勢する位になつたから、悪者共は命辛々逃げ出し、或は橋の下の河原へ落ちて這々の體で逃げ散つてしまひました。

それから兵馬は駕籠の先に立つて行手の方をうかがうと、その時分に向ふから、また橋を渡つて

来る人影のあることを認めました。

駕籠屋を勵して長蛇のやうな軍甲橋を渡り切らうとすると、左は高い岩で右は松原から差出の磯の河原につゞくのであります。月は中空に圓く澄んでゐました。向うから歩いて来るのは僅に一箇だけの人影であります。

「少々……物をお尋ね申したいが」

笠を深く被つて兩刀を差して、袴を着けて足を固めたまた若い侍體の人、恐らく兵馬より若からうと思はれるほどの形でもあり、姿でもあり、また其の聲は女かと思はれるほどに優しい響きを持つて居りました。

「はい」

兵馬は立ち留まりました。駕籠は心持足を緩めたゞけで進んで行きました。

「あの、七里村の惠林寺と申すのは何れでござりませうな」

「惠林寺は、これを真直に進んで行き、鹽山驛へ出で、再び尋ねて見られるが宜い、大きな寺故、直に知れ申す」

「それは忝なうござる」

若い侍は一禮して通り過ぎました。兵馬は其の聲が何となく覚えのあるやうな聲だと思ひに留まつたけれど、自分は近頃あの年はえの友達を持つた覚えがありません。



「雲水様」

駕籠屋が兵馬を呼びかけました。

「何だ」

「今のあの旅の若いお侍は、ありや何だとお思ひなさる」

「何でもない、やはり旅の若い侍」

「處が違ひますね」

「何が違う」

「何が違うと云つたつて雲水様、こちら等は商賣柄でござんすから其の足ごりを一目見れば見當が着くんでございます」

「うむ、何と見當をつけた」

「左様でござんすねえ、ありや女でござんすぜ、雲水様」

「女だ」

「左様でございますよ、男の姿をしてゐるけれども、あの足つきはありや男じやあございませぬ、たしかに女が男の姿をして逃げ出したものでございますねえ」

「成程」

「當人はすっかり化けたつもりでも、見る奴が見れば一眼で其れを見破られちまうんでござんす、

これから大方、江戸表へでも落ちよう云ふんでございませうが、道中筋で飛んでも無え目に會はされるのは鏡にかけて見るやうだ」

「成程」

兵馬は、さすがに駕籠屋が商賣柄で、物を見ることの早いのに感心をし、さう云はれて見る言葉の端々にも、男とは思はれないやうなものがあることを思ひ出して、長蛇のやうな亀甲橋を振返つて其の後姿を見送りました。

兵馬は其の後ろ姿を見送つて異様な心を起しました。

橋を渡り終つて松原へかゝると、駕籠屋はまた不意に悸つさしました。

松林の中で焚火をしてゐる者があります。焚火の炎が見えない程に幾人かの人が焚火の周圍に群がつてゐて、其れが今まで一言も物を云はなかつたさいふのは、正しく人を待ち構へてゐるものと見なさなければなりません。それですから駕籠屋はギョツとして立ち竦みました。

併し、宇津木兵馬は其の事あるのを前から感づいてゐました。

「構はず、ズン／＼遣つて呉れ」

と駕籠屋を促しました。

「おい、その駕籠待つて呉れ」

果して焚火の周圍から聲がかゝります。

「構はずやれ」

兵馬は小さな聲で又も駕籠屋を促しました。

「おい、待たねえか」

「何用じや」

「其の駕籠の主は何の誰たか名乗つて通つて貰ひてえ」

「無禮千萬、其方達に名乗るべき筋はない」

「其方で名乗るが忌なら此方から名乗つて聞かせようか、その駕籠の中身は女であらう」

「女で有らうと男であらうと其方共の知つた事ではない、駕籠屋、早くやれ」

「おつこ、おつこ、只は通さねえ、外でも無えが、其の女を此方へ温和しく歸して貰はなければ、お前達に些と痛い目を見せるんだ、向獄寺の尼寺から送り出して行く先は何處たか知らねえが、此處へかゝるご網を張つて、附いて来た坊主の手並がドノ位のものやら、最前向ふの橋の袂で一、寸小手調べをやらせたが、あれが此方の本藝だと思ふと大間違、さあ〜痛い目をしないうちに、早く渡したり〜」

「憎い奴等」

兵馬は金剛杖を握り締めるご、彼等はバラ〜と焚火の傍から走り出して兵馬を取り囲みました。兵馬は金剛杖を揮つて駕籠を目がけて来る曲者を發矢ご打ち、つゞいてかゝる悪者の眉間を突い

て突き倒し、返す金剛杖で縦横に打ち拂ひました。

この悪者共は慥かこのあたりに住む博徒の群か、或は渡り仲間の質のよくない者共と思はれます。兵馬は、やはりそれ等を相手にする事に、さして苦しみはありませんでした。片手に打ち振る金剛杖で思ふまゝに彼等を打ち倒し、突き倒すごは寧ろ面白いほどでありました。

けれども、本文通り……敵は大勢であつて、これをいつまでも相手に争うてゐるごは兵馬の本意ではありません。兵馬は彼等を相手にしてゐるうちに駕籠だけは前へ進ませようごしました。

悪者共は兵馬よりは駕籠を目ざしてゐる者ご見えました。駕籠を守る兵馬は一人、それをやらじごする悪者は松林の中から續々ご湧いて来るやうであります。

併し、多勢も亦兵馬の敵ではなく、その神變不思議な一本の金剛杖で支へられて、近寄る事が出来なごで離れて頻りに噪いでゐました。

兵馬ごも彼等を近寄らせない事は何の雜作もないけれど、さりごて、遠巻のやうになつてゐる處を、何處へ如何斬り抜けて宜いのか、その見當はついてゐないのであります。駕籠屋は駕籠を擔いだまごで、ウロ〜するはかり、逃げ出す勇氣もありません。

「やい、確かりやれ、敵は、たつた一人の瘦坊主だ」

親方らしいのが、棒を揮つて飛び出すご其れに勵まされて丸くなつた五六人が兵馬を目蒐けて突貫して來ました。

兵馬はよく見澄まして例の金剛杖で、バタ／＼と左右へ打ち倒す時に、不意に松葉の中から風を切つて一筋の矢が兵馬へ向いて飛んで来ました。危ない事。併し、兵馬の金剛杖は其の思ひがけない一筋の矢を、一髪いばつの間に打ち落すことが出来ました。

「この坊主は拙者が引き受けるから、早く駕籠を片づける」

同じく松林の中から覆面した袴の二人の姿が現はれました。これは今までのと違つて兩刀、それに袴、當まさしく武士の端くれであります。それと同時に、

「それ擔かげ、わつしよ／＼」

無頼者の一隊は、早くも駕籠を奪つて其のまゝに神輿を擔ぐやうに大勢して昇き上げたやうです。

兵馬がハツとする時に左の覆面が切り込みました。

兵馬は金剛杖で其れを横に拂ひました。その瞬間に右の覆面が斬り込んで来ました。兵馬は後に飛び退いて小手を拂ひました。

兵馬に小手を打たれて其の覆面は太刀を取り落した其の際に、兵馬は飛び越えて駕籠を奪ひ返すべく走せ出すと、續いて二人の覆面はやらじと追ひかけます。

兵馬は金剛杖を打ち振り／＼後の敵に備へながら、只走りひたひたに駕籠を追ひかけると、彼方の松原でワーツといふ人聲であります。駕籠も人も見えないで、其の人聲が一際高く揚がりました。兵馬

は氣が氣ではありません。

飛んで来て見るに、橋の袂の處で、今、一場の大格闘が開かれてゐる處であります。月が明るいから此方から、繪のやうに其の光景を見て取る事が出来ます。それは今奪つて行つた駕籠を真中にしてそれを奪つて行つた悪者共が、入り亂れて組合つてゐるのであります。

然もこの悪者共が相手にしてゐるのは、たつた一人の人間に過ぎないやうであります。一人の人間を相手にして寄つて集つて組んづほぐれつしてゐるらしいが、其の一人の人間が非常に豪傑であるらしい。

その一人の豪傑は、遠目で見た處では何等の武器を持つてゐないらしい、徒手空拳で、つまり拳を振り廻して、片つはしから悪者共を撲り散らしてゐるものらしいのです。兵馬は天の助けと喜びました。偶然、通りか、つた旅の豪傑が、悪者共の狼藉を見咎めて、其れを遮つて呉れたものたらうと喜び勇んで来て見るに、その豪傑の強い事、遠くで見た通り、拳を固めて悪者共の頭をボカリ／＼と撲つてゐるのであります。

一つ撲られた其の痛さが餘程徹へるに見えて、飛びついて來たり組みついて來たりする奴等が、一つ撲られると二三間も向ふへケシ飛はされて起き上れない有様であります。

兵馬は其の勇力にも驚きましたけれども、同時に、それが自分と同じことに僧形をしてゐる人物であるを見て、尙ほ不思議に思ひながら、近づいて見るに意外、それは頭と顔の圓いので見紛う

べくもあらぬ師家の慢心和尙であらうとは。

「老和尙」

と云つて兵馬は近づいて呼びました。

「宇津木さん」

慢心和尙は其の時、悪者共を片つはしから撲りつけてしまつて、駕籠の前に立つて抜からぬ面下兵馬を待つてゐました。

「如何して此處へ」

「お前さんに頼みは頼んだが、あぶないと思ふから、あごを跟けて来たのさ、跟いて来て見るぞ此の始末さ、オホ、」

「すんでの事に、此の駕籠を奪はれる處でした」

「危ない處、オホ、」

和尙は例の愛嬌のある笑ひ方をしました。此の和尙の面の圓い事と口の大きい事と、その口の中へ拳が出入するといふ事は可なり驚かされてゐたけれど、その拳の力が此れほど強からうとは今まで知らなかつた事であり、聞きもしなかつた事でもあります。何とも見當のつかない使者の役目を吩咐いひつけて置いて、あごからノコノコと跟いて来るといふ舉動も、何たか人を見疑つたやうでもあります。

「それまた危ない」

この時疾風のやうに、白刃が兵馬の頭上に飛んで来ました。それは前の覆面の二人のさむらひ。兵馬が身を翻はすと、慢心和尙は、うざん切りをするやうに、ボン／＼と二人を續けさまに龜甲かめこう柄の上から笛吹川へ落つことしてしまひました。

「オホ、」

實に要領を得ない坊主であります。兵馬は舌を捲くばかりでありました。慢心和尙は、

「さあ、兵馬さん、これからだ、八幡村へ持つて行けと云つたのは大方こんな事が起るだらうと思つたから、奴等を出し抜いたのだね、斯うして毒を抜いて置けば、あごの心配が無い、これから外の方へ持つて行くのだ、さあ可いかエ、兵馬さん、わしの後へ跟いてお出で」

何をするかと思つて見てゐる間に、慢心和尙は、駕籠の棒へ手をかけて、それをグーツと一方を詰めて一方を長くしました。

「これ女人衆や、少しの間、窮窟でもあらうがの、斯ういふ場合だから是非もない事じやて、しつかりブラ下がつておゐてよ」

と云つて慢心和尙は、その棒の長くした方へ肩を入れてウンス擔いでしまひました。いくら女一人の身ではあるといへ、それで片棒で一人で擔いでしまふには可なりの力が無ければ出来ない事であります。兵馬は、やはり呆氣に取られてゐると、和尙は、兩掛の荷物でもブラ下

けた氣取で、先に立つてサッサと歩き出しました。

然も其の歩き出す方向が、今まで来た八幡村へ行く方向とは丸つきり違つて、東の方——又しても龜甲橋を渡り直して、元来た方へ歸つて行くのであります。初めは常の足さりで歩いてゐたのが漸く早足になりはじめました。

兵馬は後れじと和尚について走りました。あまりの事に、兵馬は和尚が何處へ行かうとするのか尋ねる氣にもありませんでした。

併し乍ら和尚は惠林寺へ歸るのでもなし、また尼寺へ立ち戻らうとするのでもないらしく、甲州街道を如何やら勝沼の方まで出かけようとするらしいから、兵馬は保へきれないで、

「老和尚、一體、何處へお出でなさるつもり  
と尋ねました。

「甲斐國石和川まで」

「石和川といふのは」

「この川が石和川ぢや」

「其の石和川へ何しに」

兵馬は、いよく解せない事に思ひました。

「此の昏中にある女を其處へつれて行つて沈めにかけるのぢや」

「沈めにかけるさけ」

「水の中へブク／＼と沈めて殺してしまうのだ、オホ、」

「エッ」

何と下らない事を云ふ坊主ではありませんか。兵馬が驚くのも無理はありません。それを坊主は平氣でオホ、と笑ひ、

「何も驚くことは無い、昔から例のある事ぢや、この石和川で禁斷の殺生した爲に、生きながら沈めにかげられた鶴飼の話が諸の中にもあるわい、殺生も悪いけれど邪淫も善くない、女といふ奴、十惡五障の身を持ちながら、あたら男を迷はして無限の魔道へ引張込む、その罪は禁斷の場所使つて雑魚を捕つたごころの罪ではない、一人の女を生かして置く此の後、好い男が幾人創物になるか知れたものではない、それ故に、女を見たら取捉まへて沈めにかけて置くのが宜しい、お前さんに手傳つてもらつて此の女を沈めにかけてようといふのは其れた、なまじひの慈悲心を出して命乞なごをしなさんなよ、オホ、」

「老和尚、又しても冗戯を」

「冗戯ではないよ」

冗戯にしても兵馬は、いゝ氣持がしませんでした。況てや駕籠に乗つてゐる女の人が、それを聞いて、いゝ氣持はしますまい。

けれども此の和尚が、此の駕籠に乗つてゐる女を沈めにかかる目的でないといふ事は、川の方向は疾うに通り返してしまつて、それとは違つた勝沼の町の方へサツサと歩いて行くことでわかります。

兵馬は、いよく呆れ返つてしまひました。其の大力と洒落々々とした處は、さう見ても人間界の代物とは思はれないのであります。呆れ返りながら兵馬は金剛杖を突き鳴らして和尚のあとをついて行くうちに、ふと思ひ當つたことがありました。

あゝ、この和尚こそ當に其の人ではないかと思ひました。その人に違ひないと思ひました。

その頃、知られた大力の坊主に物外和尚といふのがありました。この和尚は拳骨の名人であります。拳を固めて物を打てば、其の物が皆凹むから一名を拳骨和尚とつけられました。

此の拳骨和尚がまた若い時分に越前の永平寺に安居してゐました。その時に或夜和尚はいたづらをしてしました。そのいたづらは鐘樓から釣鐘を下して、其れを山門の外へ持つて行つて打捨つたのであります。翌る朝になつて寺の坊さん達が驚きました。誰が斯んな、いたづらをしたか知らなけれども、兎に角、元の通りに鐘樓へ持つて行つてかけねばならぬと、大勢して騒いでゐると、何食はぬ面をして其處へ現れた拳骨和尚は、

「僅か一つの鐘を、そんなに大勢して騒いでも仕方が無いではないか」

と云つてカラ／＼と笑ひました。

「僅か一つと云うけれど、その一つが釣鐘だ、笑つてゐないで何か智慧があつたら智慧を貸せ、それはお安い御用よ、おれに茶飯を振舞ひさへすれば、一人で片付けてやる」

此の和尚の力のある事は坊さん達が皆んな聞いてゐたから、兎も角、茶飯を食はせて見せようではないかといふ事になつて、充分に茶飯を振舞うと、和尚は軽々々其の鐘を差上げて、元の通り鐘樓の上へ持つて来てかけてしまつた。

その後、度々、この釣鐘が山門の外まで動き出すので、

「さては、あの物外奴が茶飯を食ひたいはかりに悪戯をする」

一山の者が大笑ひをしました。

この拳骨和尚が京都へ出た時分に、壬生の新撰組を訪ねて近藤勇を驚かした話は其の頃有名な話であります。

或時、壬生の新撰組の屯の前へ、見すばらしい坊主が、一蓋の檜木笠を被つて、手に鐵如意を携へてやつて来て、新撰組の浪士達が武術を練つてゐる道場を武者窓から覗いてゐました。

出家とは云ひながら餘り無遠慮な覗き方であつたから、忽ち浪士達に咎められてしまひました。

「我々の劍術を覗いて見る位では、定めて其の心得があるのであらう、兎に角、道場の中へ入つ

て一太刀合せて見ろ」

四七六

強ひて和尚を道場の中へ引張り込んでしまひました。元より名代の壬生浪人の事ですから、面白半分に此の坊主をいましめて呉れようと、我勝に得物を取つて立ち向ふのを、拳骨和尚は喋ける色もなく、携へた鐵如意を振つて瞬く間に數十人を叩き伏せてしまつた。

この時上座にゐたのが隊長の近藤勇でありました。この體を見て、

「これは、驚き入つた和尚の腕前、拙者は近藤勇、いざお相手を仕る」

二間柄の槍を執つて近藤勇が道場の真中に立ち出でるさうな事になりました。

それを聞くに拳骨和尚は平伏して、

「これは、先生が名に負ふ近藤勇殿でござつたか、鬼神と鳴りひびく近藤先生のお名前、世捨人の山僧までも承り奉る、いかで先生のお相手がつまらざるべき、許させ給へ」

と殊勝な御辭退ぶりです。

併し、近藤勇もあるべきものが、それで承知すべき筈がなく、今は辭するに由なくて、和尚は、また前の鐵如意を取つて立ち上がるさうな段取になりました。その時に近藤が、

「凡そ武術の勝負には、それだけの器がある、貴僧もその如意を捨て、竹刀にあれ木刀にあれ、好む處を持つて立たる、が宜しからう」

と云はれて、和尚は首を振り、

「我は僧侶の身であるから、あなたがちに武器を取りたいとも思ひ申さぬ、やはり此れでお相手を仕りたい」

鐵如意を離さなかつたけれど、近藤勇は頑として聞かなかつた。是非、他の獲物を取れと勧めたから和尚は、

「然らば」

と云つて鐵如意を下へ置いて、改めて頭陀袋へ手を入れて何を取り出すかと思へば、木のお碗を二つ取り出しました。その二つの碗を左右の手に持つて立ち上り、

「如意でお悪ければ、この品でお相手を致すでござらう」

餘りと云へば人を馬鹿にした仕業である。相手もあらうに、今は京都で泣く子も黙る近藤勇を相手に取るに、木の碗を以てするさは何事であらう。勇は烈火の如く怒つて一突に突倒して呉れようさ槍を構へましたが、和尚は二つの碗を左右の手に持つて、

「いざ、いづれよりなりとも突きたまへ」

さいつて碗をかざしてゐる體は傍若無人を極めたものであります。然し乍ら、近藤勇ほどのものが遂に此の傍若無人な坊主を突き倒す隙を見出す事が出来ませんでした。半時ばかりの間、瞬きもせずに睨んでゐたが、やがて如何なる隙を見出しけん、敵も通れと突き出す槍先、和尚の胸板

四七七

を微塵に砕いたと思ひきや、和尚が軽く身を開いて兩の手に持った腕を合せて槍の鉋巻をグツと挟んでしまひました。仕損じたりと近藤が其の槍を外さうとしたけれど遅かつた。突いても引いても押しも捻つても動かはこそ、汗は瀧のやうに流れ出した。槍を挟まれた近藤は、空しく金剛力を絞り盡すことまた半時あまり、その時に拳骨和尚が大喝一聲と諸共に腕を放すさ、さしもの近藤が後に尻餅つき、槍は疊三四枚ほどの距離を彼方へ飛んだ。勇は、餘りの事に呆れ果てたけれども、彼も亦豪傑であつた。恭しく禮を正して和尚に尋ねた。

「まことに萬人に優れた御腕前、感服の至りでございます、抑々貴僧はいづれの御方に候や名乗らせ給へ」

「お尋ねを蒙るほどの者には候はず、愚僧は備後尾道の物外と申す雲水の身にて候」

と聞いて、近藤はじめ、さては聞き及ぶ拳骨和尚とは此の人かと、懇に、もてなしたといふ事ではありません。

嘘か、まごごか、此の話は今に至るまで可なりに有名な話でありました。

宇津木兵馬は、その和尚の事を思ひ出したから、若しや右の拳骨和尚が慢心和尚と變名して此の地に逗留してゐるのではないかと思ひました。さうでなければ、こんな勇力ある坊主が二人とあるべき筈のものでは無からうと思ひました。それで兵馬は慢心和尚に向つて、

「老和尚は若しや、備後尾道の物外和尚ではござりませぬか」  
と尋ねました。

「其んな者では無い、其んな者は知らん」

と云ひながら慢心和尚は駕籠を擔いでサツサと行くのであります。それですから、一度はそれと尋ねて見たけれど、二の句は續けません。斯うして金剛杖を突いて、やつぱり後を追つかけて行くうちに勝沼の町へ入りました。

その時分、もう夜は更けきつてゐたのであります。勝沼へ来て柏尾坂の上で和尚が、はじめて駕籠を肩から卸ろして土の上に置き、其の駕籠の上に頬杖をつきながら、

「宇津木さん、これから先は此の中の人をお前さんに引き渡しますよ、如何かして江戸へ件れて行つて上げるのが一番宜からうと思ひますよ、此の中の人には向嶽寺の方から手形が出てゐるし、お前さんは、わしの寺からといふ事にしてあるから道中も無事に江戸へ行けるたらうが、出家姿で、女を連れて歩くといふのも異なるものだから、あたり前の武士の風をして行くが宜からう、この町で富永屋庄右衛門といふのを、わしは知つてゐるから其れを起して今晚は泊めてもらひ、そこで兩人共支度をさうのへて、明朝にも江戸へ出かける事にしてもらひたいね、その行先は兩人で相談して見るがよい、さうして兵馬さんの方は御用は済んたら、また此方へ歸つて来て、敵討といふ奴をおやんなすつたら宜からう」



斯う云ひましたから、兵馬は、やつぱり呆氣に取られてゐるさ、

「さあ、さういふ事にして、これから富永屋を叩き起さう、宿屋が商賣だから、いつ何時でも叩き起して、いやな面をする筈はない、殊に惠林寺の慢心が来たさういへば、庄右衛門は喜んで出迎へる」

兎に角、斯うして駕籠は勝沼の町の富永屋庄右衛門といふ宿屋の前へ来て再び土の上へ置かれました。

慢心和尚は其の宿屋の前へ立つて、拳を上げてトン／＼と戸を叩きましたけれど起きませんでした。大抵の場合には、時刻を過ぎては狸寝入をして、知つてゐても起きない事があるのでしたから、慢心和尚は、や、荒く戸を叩いて、

「富永屋、富永屋……庄右衛門、庄右衛門、惠林寺の慢心だよ、慢心が出て来たのだよ、起きさつしやい」

斯ういふと慢心の利目が卽座に現はれて、家中が急に混雜をはじめました。

慢心和尚は此處の家へ二人を送り込んでから、スーツと歸つてしまひました。

駕籠の中の主が、お君であつたさういふことを兵馬は此の宿屋の一室へ来て、はじめて知りました。お君は其の前から感づいてゐたけれど、口に出して云ふことは出来ませんでした。兵馬に取つては意外千萬の事です。殊に神尾主膳の爲に駒井能登守が陥れた一條を聞いて、兵馬は氣の毒さ

腹立さに堪ゆる事が出来ません。

また其の後のお松の身の上を聞いて見ると、やはり危険が刻々迫つてゐて、今日は逃げ出さうか、明日は忍び出さうかと、其の事のみ考へてゐるさういふことを聞いて、それも心配に堪へられませんでした。

けれども、さし當つての問題は預けられた此の女を如何するかさういふことであります。執念深い神尾主膳の一味は此の女を生捕つて、また何か恥辱を興へんとするものらしい。さすがに尼寺は荒せなかつたけれど、一步踏み出すさうの始末です。

甚だ迷惑千萬ながら、兵馬としては、やはり此の駕籠を江戸まで送り届けて兎も角もしなければならぬ成行になつてしまひました。お君は、もう弱り切つてゐました。兵馬はお君を先に休ませて、明日の駕籠や乗物の事を心配しました。明朝と云つても、もう間もない事だから、今から如何しようさういふ手筈もつかないのであります。且又、弱り切つたお君の姿を見ると、この上駕籠に揺られて険しい山越をさせる事は考へものであります。

そこで兵馬は、明日一日は此處に逗留して隠れてゐようと思ひました。その間に準備をさうのへ、お君にも休息の暇を興へて、明後日の早朝に出立しようと思つたのであります。

駕籠の中には兵馬の衣服大小の類も、路用の金も入れてありましたから、兵馬は其れを取り出して調べました。

江戸へ送り届けて後の此の女の處分も考へれば、丸で雲を掴むやうなものです。まさか能登守の本邸へ送り届けるわけには行くまいし、さりとて、江戸は此の女の故郷ではない。江戸へ連れ出して見ての問題だが、兎も角、江戸へ連れ出しさへすれば如何にかなるたらうと思ひました。さうして、此の女を江戸へ届けて、兎も角も落着けて見てからの兵馬自身の行動は、直ちにまた此の甲州へ舞ひ戻つて来る事でありませぬ。最も怪むべきは神尾主膳である。駒井能登守を陥れた手段の如きは聞いてさへ其の陰險卑劣な事に腹が立つ、わが狙う仇も、慥にあの神尾が行方を知つてゐるものゝやうに思はれてならぬ。斯うなつて見ると、今は神尾を中心として當つて見るこそが最上である。場合によつては、あの邸へ斬り込んで……さまで兵馬は決心しました。疲れ切つたお君は傍らにスヤ／＼と寝てゐるけれど、兵馬は寢もやらずに考へてゐます。

## 十

其の翌日は、あまり大降ではないけれども、兎に角雨が降りました。宇津木兵馬に取つては此の雨が却て仕合せな位でありました。兵馬はお君を此處で出来るだけ休養させようと思ひました。お君は病人のやうで、兵馬は其の看護をしてゐるものゝやうにして旅の用意を調へつゝ、其の一日を暮らしました。

丁度此の時に、此の富永屋といふ宿屋に一人の年増の女が逗留してゐました。

この間、絹商人たさいふ亭主らしい人と一緒に来て、その亭主らしい人は何處へか出て行つて、また歸つて来ない間を其の年増の女がたつた一人で幾日も待つてゐるのであります。

けれども、其の亭主らしいのが幾日も歸つては来ないうちに、帳場へ悪意になり、主人の庄右衛門さまも心安くなりました。

さうしてゐるうちに番頭が病氣になると、この女が帳場へ坐り込みました。帳場へ坐り込んだと云つた處で、主人を籠絡したり、番頭を押しつけて坐り込んだわけではなく、自分の暇つぶしに悪意づくで手助けをしてやるやうな調子で働いてやつてゐました。

處が此の女は、人を遣うことが上手、客を扱うことに慣れきつてゐました。その技術から云へば前の番頭などは比較になるものではありません。この位の宿屋を三ツ四ツ預けたとて、物の數さも思はない位の冴えた腕を持つてゐるやうに見えましたから、主人は舌を捲いてゐました。雇人も思はない位の冴えた腕を持つてゐるやうになりました。それに、番頭の病氣が捗々しくなくて湯治に出かけるといふほどであつたから、そのおさを主人も頼むやうにし、當人も退屈まぎれの氣になつて、この女が、今では、ほんざ此の店を預かつてゐるのであります。この女といふのは、別人ではなく——兩國で女輕業師の親方をしてゐたお角であります。

その雨の降る日に、お角は帳場に坐つてゐました。

「お千代さん、それでは三番のお客様も、今日は御逗留なのだね。」

と云つて、お千代といふ女中に尋ねました。

「はい、今朝は早くお仰有つておめでございましたが、お足が痛いからと仰有つて、もう一日お泊りなさるさうでございます」

「そりや左様でせう、あのお御足では……あまり旅にお慣れなさらないお方のやうですね」

「ほんごに女のやうなお若いお美しいお侍であらうしやるのに、お足を、あんなにお痛めなすつては、お可哀相でございます」

「お見舞に上つて見ませう」

お角は斯う云つて、其の足を痛めた美しい侍の三番の室といふのを見舞に行かうとしました。

こゝで話頭の上つた三番の室といふのは、其れは兵馬とお君との部屋をいふのではありません。二人のゐるのは一番の室であります。今の話の三番の室には刀架があつて大小の刀が置いてあります。その前の床柱に凭れてキチンと坐つてゐるのは、兵馬よりは二ツか三ツも若からうと思はれるほどの美少年であります。

「御免下さりませ」

と云つてお角が其處へ訪ねて來ました。

「これは誰方」

といふ聲は少年にしては餘りに優しい聲であります。

「生憎の雨で、定めて御退屈であらせられませう」

「これは御内儀でござつたか、生憎の雨の事故、もう一日出立を見合せます」

「如何ぞ御怒りとお留まり下さりませ、何しろ、音に聞えたこの笄子峠でござりまする、お天氣の時でさへ御難遊の道でござりまする」

「明朝は駕籠を頼み申します」

「はい畏まりました、あの明朝はこのやうに雨が降りましても、やはり御出立でござりまするか」

「左様……雨が降つては」

「雨が續きましたら、もう一日御逗留なさいませ、御覽の通りの山家、お構ひ申上けることは出來ませんけれど」

「併し……ちと急ぐこともある故、若し明朝は雨が降つても峠を越したいと思ひます」

「左様でござりまするか、左様ならば其のやうに駕籠を申つけて置ませう」

「宜しく頼みます」

「それでは其のおつもりで……如何ぞ御怒りぞ」

お角はお辭儀をして出て行かうとすると、

「あの御内儀……」

美少年は何か頼みたいことがあるものゝやうに、立ちかけたお角を呼び留めました。

「はい」

「ちよ、お尋ね致したいが、あの峠へかゝるまでにお關所がありましたな」

「はい、駒飼と申す處にお關所がござりまする」

「あの、その關所は手形が無くては通して呉れまいか」

「それは貴方様、お關所には何方にもお關所の御規則がありました」

「それを如何ぞして、抜けて通る路はあるまいか」

「あの、お關所の前をお通りなされずに」

「粗忽千萬の事ながら、その手形さいふものを途中で失うて困難の身の上、何ぞ御内儀、よい智慧はござるまいか」

美少年は一生懸命で此れ丈けの事を云ひました。餘程の勇氣を持つて此の宿の主婦と見たお角に此の事を打ち明けて相談をして見る氣になつたものであります。

併し、これだけの相談として見ればそれだけの相談だけれど、表向きに云へば、お關所破りの相談であります。如何したらお關所破りが出来るか教へて呉れさうなものであります。お角は此の少年の面を篤と見ないわけには行きませんでした。

「それは、お困りの事でござりませう。外の事と違ひまして」

お角も、さすがに即答がなり兼ねるらしくありました。少年は定まりが悪いのか、窮したせいか

下を向いてゐる。

「お關所の抜路をお通りなさる事や……また殿方が女の風をなさつたり、女のお方が殿方にこしらへたりしてお關所をお通りになる事が現はれまする、それは大罪になる事とござりまする」

お角に斯う云はれて少年の面の色が火のやうに紅くなりました。

其の痛々しい若い侍の室を出たお角は、しきりに小首を傾けてゐました。さうして何か思案する事ありけに廊下を渡つて一番の室へ見舞に行かうとしました。そこには同じく雨で逗留してゐる宇津木兵馬とお角の二人があるのであります。

お角が其處へ行かうと思つて廊下を渡るさ表の方で大聲が聞えました。それも圖抜けて大きな聲で、

「さあ、大變々々、峠へ狼が出て二人半食ひ殺されてしまつた、いやもう道中は大騒ぎ、さ云ふのであります。餘りに無遠慮に大きな聲でありましたから、お角の耳にも入つたし、其の他の人にも皆んな聞えたであります。一番の室へ行かうとしたお角は此の聲で直に引返して、兵馬やお君を見舞はずに帳場へ歸つて來ました。

その今の大きな聲の持主は、此の街道を往來する馬方であります。それが地聲の大きいのを一層大きくして、この店へ怒鳴り込んだのであります。スヤ／＼と眠つてゐたお宇津木兵馬の耳にも其の大きな聲が聞えたから愕然として驚きました。

君の眼を醒まさせる位に大きな聲でありました。

「宇津木様、何でございます、あの騒ぎは」

「峠へ狼が出たさうな」

「怖い事、狼が」

「さうして人を二人半食ひ殺したと聞えただけで、二人は宜いが半さいふが、ちどをかしい」  
兵馬とお君とは斯う云つて話をしてゐる間に、例の地聲の大きな馬方は店の方で、お角や其の他の者を相手に、盛んに大聲を上げて其の講釋をしてゐるらしくありました。それが洩れて聞える處によれば、狼に食ひ殺されたのは笹子峠の七曲りあたりであつて、食ひ殺された人は一人の藥賣と、それから魚屋と、もう一人危なく逃げたのは道中師であるらしく聞えます。半さいふのは恐らく其の道中師が命辛々逃げたから、それで半さ云つたのたうと思はれます。兵馬は、其の前路を控へた身で、こんな話を聞くことは、さすがに快しとはしませんでした。狼さいふもの、存在は豫ねて聞いてはゐるし、また此のあたりの山々には其れが住んでゐて、時あつては人里までも出て来るさいふ話も聞きました。けれども其んな話をお君に聞かせる事は、よくないと思つて其れで不快の感じがしたのであります。

「夜道なごをするから悪いのじや、悠くりご宿を取つて日のうちに出で、日のうちに越えてしまひさへすれば何んの事は無からうに、無理をするから其んな事になる」

兵馬はさう思ひました。一體深山に棲む狼は群を成してゐるものたさうだけれど、兵馬は今までの旅に狼さいふものに出逢つたことがありません。狼に出逢つた事が無いばかりでなく、狼さいふものゝ生きたのも死んだのも其の實物を見たことはありませんでした。それは繪にかいたものだけによつて、さう信じてゐるだけでありました。

斯うは云ふものゝ、明日、この女をつれて峠を越える時に、不意に其れ等の悪獸に襲はれたとしたら、それに對する用意をして置かなければならないのだと思ひました。

一旦帳場へ歸つて狼が人を食つた話を馬方の口から詳細に聞いたあとで、お角はまた再び第一番の室、即ち兵馬とお君のゐる處へ見舞に行かうとして廊下を渡つて行くこ、

「ちよつと、ちよつと、お角」

裏の垣根越に呼び留めたものがあります。

「誰方」

お角が其垣根越を振り返つて見ると、雨の中を笠をかぶつて合羽を着た人。

「おや、お前は百さんぢやないか」

「叱ッ、靜かに」

「誰も見てゐないから、早く其の土蔵の陰から七番の方へお廻り」

「大丈夫かエ」

「大丈夫だよ、あの裏木戸から入つて」  
「合點だ」

其の垣根越の笠合羽はがんりきの百藏であることに紛れもありません。二度まで見舞ひに行かうとして出端を折られたお角は、又しても第一番の室へ行かうとした足を引返して七番の座敷へ舞ひ戻つて來ました、この七番の座敷といふのは自分の部屋として借りてある座敷です。

お角が其處へ戻つて來た時分に、がんりきの百藏は、もう、草鞋を脱いで椽の下へ突込んで、合羽を抱えて其の座敷へ入り込んでゐました。

「おつそろしい目に逢つたよ」

「何が如何したの」

「昨日の夕方はお前、笹子峠の七曲りで狼に出逢して命辛々で逃げて來たんだ」

「さうかね、お前さんかエ、今、馬方が來ての話に二人半食ひ殺されたといふから、其の半といふのは如何いふわけだ聞いたたら、それは食はれ損なつて逃げた人があるんだと云つてゐた、それがお前さんとは氣がつかなかつた、何しろ命拾ひをして宜かつたね」

「まあ宜かつたといふものだ、大丈夫かエ、誰にも氣取られるやうな事は有りやしめえな」

「大丈夫、さあ其の合羽をお出し」

お角はがんりきの手から雨に濡れた合羽を受け取つて、そつと裏の方から竿にかけました。

「やれ〜」

旅装を取つたがんりきは火鉢の前へ坐りました。お角も亦火鉢によりかかりました。それから、ひそ〜話で、時々目面めづらで笑つたり睨にらめたりして、可なり永いこと話が續きましたが、

「それじゃ、今夜は泊り込むさしよう、だが明日の朝は、また烏澤まで行かなくちあならねえのだ」

「ほんたうに落着かない人だ、いくら足が自慢だからと云つて、さうして飛び廻つてはかりてゐるのも因果な話」

「如何も仕方が無えや、斯うしてセワしく出來てゐる身體だ」

「あ、そりやさうとお前さん、烏澤へ行くのなら、お客様を一人案内して上げて呉れないか、またお若いお侍だけれど、手形を失くしてしまつて困つておめでなさる容子、拔道を聞かして貰ひたいさ、わたしに頼む位だから、ほんたうに旅慣れない初心まがな女のやうな若いお侍だよ」

「成程、それや案内してやつても悪くは無えが、こちと等と違つてあさで出世の妨げになつても善くあるめえからな、それを承知で、よく〜の事情なら、随分拔道を案内してやらねえもので無え」

「そりやお前さん、よく〜の事情があるらしいね、手形を失くしたといふのは嘘うそで、持たずに

逃げ出して来たんだね、それで、如何やら追手がかるものらしく、外へも出ないで隠れてゐる容子が、あんまり痛々しいから、お前さん一つ助けてお遣りよ、女のやうな優しいお侍だから可哀相になつて終うし。

## 十一

その翌朝になつても雨はしどろしどろ降つてゐましたが、それにも拘はらず宇津木兵馬は駕籠を雇つて此の宿を立ち出でました。

兵馬は合羽を着て徒歩で此の宿を出て、尋常に甲州街道を下つて行くのでありましたが、兵馬とお君との駕籠が此の宿を尋常に出かけた前に、また暗いうちに同じく此の宿を出て、東へ向つて下つた二人の旅人がありました。

前のは旅慣れた片手の無い男であごに従つたのは前髪の女にも見まほしき美少年。前のはが、んりきの百蔵で、後のは昨日三番の室で關所の抜け道を問ふた少年であります。

兵馬お君の一行が本街道の關所のある處を大手を振つて通るのに、が、んりき美少年は裏へ廻つて關所のない抜け道を通ることが違つてゐるのであります。

本道を通ることは例外で、抜け道を通ることのみが其の本職であつた百蔵は、こんな事には心得たものです。

女にも見まほしき美少年は足を痛めたさはいふけれども、やはり旅には慣れてゐるもの、やうです。併し、兩刀の重味が如何にも身にこたえるやうで、それを抱へるやうにして、が、んりきのお君を連れて行くさ。

「これでもこれ、お關所のあるべき處を無いことにして通るんでございますから、表向六つかしく云へはお關所破りになるのでございますね、お關所破りの罪を表向にやかましく詮議すれば、そのお關所のある處で磔刑になるのが御定法ですから、あなた様も、わつし共も、御定法通りにいへば此れで磔刑ものなんでございますよ」

が、んりきの云ふことは少年をして薄氣味の悪い心持を起させないわけには行きません。が、んりきは其れを事もなげに云つて少年が氣にかける容子を尻目にかけて、

「併し、お役人さても其んなに野暮な仕打はかりはございませぬ。こんな事で一々お關所破りをつかまへて、磔刑にかけた日には關所の廻りは磔刑柱の林になつてしまひます、旅に慣れたわつし共のやうなものでなくても土地に近い人などは、わざと關所を通つて一々御挨拶を申上げて居られないから、その抜け道や裏道を突切つてしまふのでございませぬ、そんなものは、笑つてお眼こぼしでございませぬ、それでも、斯うして渡つて歩くうちに、如何かして間違つてお上の手で調べられた時には、こんな風に言ひ抜けをするんでございませぬ、實はあの勝沼の町から出まして、駒飼のお關所へかゝらうと思ふ途中で、ついで道を取り違へて山の中へ入つてしまひま

した、そこで如何して本道へ出たものか迷つてゐるうちに、山の中から樵夫が出て参りました。その樵夫に尋ねて漸く本道へ出て参ることが出来ましたけれど、その時は知らずにお關所を通り越して居りました、濟まない事は思ひましたけれど、又先を急ぐ旅でございますから立ち戻るさういふわけにも行かず、つい／＼其のまゝ通り過ぎてしまひました。斯ういつて言ひ抜をするんでございますね、さうするご然らば其の方に道を誤へた樵夫といふのは何村の何の誰じやお尋ねがある、その時は、いや其れを聞かうとしてゐるうちに樵夫は山奥深く分け入つて影も形も見えなくなりました」

「此んな風に申上ければ其れで事が済むんでございます、お關所にも抜け道があり、お調べにも言ひ抜けの道があるんでございますがね、八釜しいのは入鐵砲に出女いりてつちといつて、鐵砲がお關所を越して江戸の方へ入る時、女が江戸の方からお關所を越えて乗り出す時は中々詮議が厳しかつたものでございますがね、それも昔の事で、今は其んなでもありませんよ、そんなではないと云つた處で、此の頃は世間が物騒でございますから、男が女の風をしたり女が男の風をしたりしてお關所を晦くろますやうな事があるさ、なか／＼面倒には面倒になるんでございますね」

「こんな事を云つてゐる間に、いつか關所の裏道を抜けてしまつて本道へ出て笹子峠を上りにかゝつてゐました。」

「なほ、が、ん、り、き、は途中、色々の話をして此の少年に聞かせました。丁度、そんなやうな雨の事で

すから旅人も少いもので、山又山が重なる笹子の峠道は晝とは思はれないほどに暗いものでありました。峠を登つて行くさ坊主澤のあたりへ出ました。この邊は橋が幾つもあつて下には溪流が左右から流れ下つてゐる處もあります。

やがて、もう峠の頂上へも近づかうとする時分に、

「此奴は可けねえ」

「さが、ん、り、きが云ひました。」

今峠の上から一隊の人が下りてくるらしくあります。この一隊の人といふのは、尋常の人ではなく何か役目を帯びた人らしくあります。が、ん、り、きは其れを振り仰いで、

「あれは八州様の組だ、うつかり斯うしてはゐられませんが、少しばかり姿を忍はせませう」

斯う云つて坊主澤を左に切れて、傍道へ入りました。少年も亦、同じやうにしないわけには行きません。

成程、それは八州の役人らしい。幸にして此の役人達は今横へ切れた二人の姿を見咎めもしませんで、矢張雨の中を肅々として甲州の方へ向けて下りて行くのは、何か大捕物でもあるらしき氣配であります。

「さうも危ねえ」

が、ん、り、きは其の横道を先に立つて行きました。これは多分天目山の方へ行かるとべき路であらうと



思はれます。

八州の捕方を辭けて横道につれ込まれた少年は、此の案内者に相當の信用を置いてゐるらしいが、氣味の悪い感じも相當に伴はないではありません。併し何處までも弱身を身せなかつてもりて、それに従つて行くさ、さして大木ではないけれども、杉の木立の暗い細道へかゝりました。

その杉の木立の中に、山神の祠ほくらといったやうな小やかな社のあるのを指して、

「あれで暫らく休んで参りませう、ドノ道本道へかゝらなくてはなりません、そのうち雨も歇む  
ここでございませう」

が、いりきが先に立つて其の祠の椽へ腰をかけました。

「随分お疲れなすつた事でございませうねえ」

「いゝえ、其れほさに疲れはしませぬ」

と云つたけれども少年は可なりに疲れてゐるらしくありました。

「何しろ、お若いに一人旅さいふ事はなざるものではございませぬ、あなた様が男であつしや  
るから宜いやうなもの、若し女でもあつて御覽じろ、道中には狼が澤山ゐますからな」

が、いりきに斯う云はれた時に、少年はギクツとしたやうでした。さう云つたが、いりき自身も亦、  
妙に氣が引けたらしく、

「狼、狼と云へば、この山には本物の狼があるんでございませぬ、さう思ふと何たか急に氣味が惡

くなつて来た」

が、いりきは、わざとらしい身ぶるひをして前後を見廻しました。前後は杉の木立で、足下では澤  
の水が涼々ど鳴つて、空山の間響きます。

少年は何さなし居堪らないやうな心持になつて、

「兎も角、本道へ戻らうではござりませぬか」

「まあ宜うござんす、まあ休んでおゐでなさいまし、そんな事をしたからと云つたつて、日のあ  
るうちに越せねえ峠じやあございませぬや、八州のお方が立ち戻つてでも來やうものなら、今度  
は一寸抜け道が無えのでございませぬ、もう少し休んでゐらつしやいませ」

と云ひながら、いりきは少年の手首を取りました。

「あれ——」

少年は思はず斯う云つて叫びを立てました。

「そんなに吃驚びっくりなさる事はござんすまい、お武家様、あなたは男の姿をしておゐでなされるけれど、  
實は女でございませう」

「左様なものではない」

「可けません、わつしは道中師でございませぬ、旅をなさるお方の一から十まで、ちやあんど睨ん  
で少しの外れもないんでございませぬから、お隠しなすつても駄目でございます」

「隠すことはない」

「それ、其れがお隠しなさるんでございます、あなた様は女でないご仰有つても、これが……  
が、い、い、其の片手を伸べて乳のあたりを探るやうにしましたから」

「無禮をするご容捨てせぬ」

少年はツト立退いて刀の柄に手をかけました。が、い、い、其れを驚く模様は更になく、

「は、は、たごへ、あなた様が男でござりませうとも、女であつしやいませうとも、それを如何しようといふわつし共ではございませぬ、御安心下さいまし、併し、斯うしてお伴になつて見るごいふご其の本當の處を確めて置いてお貰ひ申さぬご臨機の掛引といふ奴が旨く行かねえんでございますから」

「もう、雨も小歇みになつた容子、早く本道へ戻りませう」

「まあ、もう少しお休みなさいませ、一體、あなた様は女の身で……如何してまた、わざく一人旅をなさるんでございます、それをお聞き申したいんでございますがね、次第によつては、これも男の端くれ、随分お力になつて上げない限りもございませぬ」

「さあ、早く彼方へ参らう」

「まあ、宜しいじやあございませぬか、私が斯うしてお聞き申すのは、實は、あなた様を何處ぞでお見受け申した事があるからでございます」

「えッ」

「たしか、あなた様を甲府の神尾主膳様のお邸のうちで、お見かけ申した事があるやうに存じて居りまする」

「知らぬ」

「あなた様は知らぬご仰有いますけれど、私の方では、あなた様の御主人の神尾様にも御懇意に願つて居りまするし、それから、あなた様の伯母さんとかお師匠さんとか存じませんが、あのお絹さんといふのは、格別御懇意なんでございます、間違つたら御免下さいまし、そのお内で、たしかお松様ご仰有るのが、あなた様に其儘のお方でございました」

「如何して其れを」

「が、い、い、百蔵ご云つて、お聞きになれば、あなた様のお近づきの人は皆んな成程ご御承知をなさるでございませう」

「あ、それでは是非もない」

少年はホツ息を吐いて、が、い、い、其の面を見てゐたが、遽かに聲も言葉も打つて變り、

「いかに、わたしが神尾の邸に居りました松でござりまする、斯うして姿を換へて邸を脱けて出ましたのは、よくの事情があればの事、如何ぞお見のがし下さいませ」

「それ、それで、私も安心を致しましたよ、神尾様のお身内なら、何の、失禮ながら御親類

も同様、これから、お力になつて何處へなりと、あなた様のお望みの處へ落着き遊ばすまで、このがんりきが及ばすながら御案内を致します」

「何分、お頼み致しまする」

何分頼んでいゝのたか悪いのたか知らないが、此の場合お松は斯う云つてが、んりきに頼みました。「宜うございますとも、さあ、さう事がわかつたら、こんな窮屈な處に長居をするではございませぬ、本道をサツサと参りませう」

それから後は存外無事でありました。無事ではあつたけれども、こんなに見透されてしまつた上に、これが肩書附の人間であることがわかつて見れば、決して氣味のよい道づれではありません。併し、斯うなつて見るさ急に此の氣味の悪い道づれと離れることも出来ないで、お松は笹子峠を越してしまひました。

何事か起るべくして何事も起らずに峠を越してしまひました。人にも咎められず、狼にも襲はれることがありませんでした。たゞ此の道案内であり道づれである男が却つて追手の者よりも恐ろしいものであり、或は狼よりも怖い者であるか如何かは、またわからない事です。

さうして黒野田の宿へ無事に着いて、また二三驛は樂に行ける時刻であつたけれども、其處で一先づ泊るこゝになりました。が、んりきが、お松を案内したのは、前の本陣の宿ではなく林屋といふ宿でありました。

此處へ着いての思出はお松に取つて少からぬものがあります。こゝの本陣へ駒井能登守と共に泊り合せた一夜の出来事は鮮かに其の記憶に残つてゐるのであります。

お師匠様のお絹が此處で何者にか凌はれて大騒ぎを起しました。狼も棲むといふし天狗も出没するといふ、このあたりに来た時は、あんな事があり、歸る時にこんな事になつて、險呑な道づれに案内されて同じ處の宿へ泊るといふのも、お松に取つて心強いものではありませんです。

處が、此の宿へ着いて旅装を解くと、間もなくが、んりきの姿が見えなくなつてしまひました。お松は心には充分の警戒をして、萬一の時は身を殺してもと思つてゐるのですけれども、其の警戒の相手が不意に無くなつて見ると、何さなく拍子抜のやうでもありました。いく時経つても、が、んりきは歸つて来ませんでした。遂に夕飯の時になつて見ると其の食膳は一人前でありました。これを以て見れば宿でも亦、自分に連のあることは認めてゐないものと見なければなりません。またお連様はとも尋ねて見ない事を以て見れば、この宿では全然、自分に連のあつた事をさへ想像してゐないらしくあります。

お松は合點の行かない事に思ひながらも、食事を済ましてしまひました。日が暮れても、風呂が済んでも、いよく寝る時刻になつても、さうくが、んりきは姿を見せないであります。お松は其れを合點が行かない事に思つたけれども、また多少安心をする氣にもなりました。ナゼ

ならば、あんな氣味の悪い男に導かれて行くこの不安心は、慣れぬ一人旅をして歩く不安心よりも一層不安心であるからです。前途は兎に角、あの男と離れた事が、却つて幸ひであつたさ、寢床に就いた時分にホツ息を吐きました。

お松が此んな装ひをしてまで甲府を逃れ出さねはならなかつた理由は、全く彼地では行き詰まつてしまつたからである事は申すまでもありません。内には神尾の壓迫があり、外には筑前守へ奉公の強要があり、自分としては兵馬やお君の事が氣にかゝり、能登守の運命にも同情したり、主人の神尾の舉動には身ぶるひするほかに怖れと嫌氣を催して、如何しても居堪まられないから、此の非常手段で逃げ出したものであります。

兵馬が惠林寺に留まつてゐる事がわかりさへすれば何の事はなかつたらうけれど、それをお松は知る事が出来ませんでした。たゞ斯うして行くうちに兵馬の行方を知る由もあらうかと思ひ、それがわからぬ時は、一層、江戸へ出て、外ながら能登守やお君の身の上に就いて知りたい。また例の與八といふ男の許をも尋ねて見ようかといふやうな心持でありました。

其翌日早朝に宿を出立すると、如何でせう阿彌陀街道の外れへ來た時分に、もう其處に、旅の装ひをして、が、ん、り、き、が、ち、や、あ、ん、と、待、つ、て、ゐ、る、で、は、あ、り、ま、せ、ん、か。尤も今日は雨が降りませんが、ん、り、き、が、待、つ、て、ゐ、た、の、は、阿、彌、陀、街、道、を、過、ぎ、て、笹、子、川、の、橋、詰、の、處、で、あ、り、ま、す。

お松も、はじめは其れどは氣がつきませんでした。近寄つて見た時に、それを知つてお松はギョツとしました。

「お早うございます」

が、ん、り、き、は、挨拶をしました。

「これは、まあ」

と云つてお松は呆氣に取られました。

「お待ち申して居りました」

この分では、この男に見込まれたやうなものだと思ひました。

「昨夜は何處へお泊りなさいました」

とお松は尋ねました。

「ツイ此の近い處に知合があるんでございます」

が、ん、り、き、は、其、れ、だ、け、し、か、答、へ、ま、せ、ん。お松もその上は問うことをしませんでした。如何しても此の男の道づれを斷るわけには行きません。

「此處は橋詰といふ處でございます、この次がよし久保と申しまして彼處にあるのが虚空藏様で、それと違つた此方の方に毒蛇齋度の禪石といふものがございます、それから白の原に白野、天神坂を通つて立川原へ出て橋を渡るご神戶、それから中初狩に下初狩、上花咲に下花咲、大月

橋を渡つて大月

こんな事を云つて、が、ん、り、きは細かな道案内をしながら歩いて行きます。暢氣に歩いて行くやうだけれども、絶えず往來と前後とに氣を配つてゐることは、お松が見てもよくわかります。殊に前後から来る人の容貌を遠くから見定めようとする事と、通りすぎる人を横目に見やる眼つきなど、氣味が悪いばかりです。

そのうち大月の手前まで来るに不意に、

「如何か一足先にお出でなさいまし、私は少しばかり廻り道をして参りますから」

と云ふかと思へは、が、ん、り、きはツイと横道へ切れてしまひました。お松と一緒に歩いてゐる時は、そんなでも無かつたけれど一人で横道へ切れる時の足の早いこと、あ、と云ふ間もなく何れへか姿を消してしまひました。

それから、お松はまだ一人で歩いて行きました。この男は、慥に道中の胡麻の蠅といふものたらうと思ひました。飛んでも無いものに付き纏はれてしまつたこと、泣きたいにも泣けない心持で心細い旅を歩きました。

笹子の山中で、右の男は道すがら、自分は斯う見えても女に餓ゑてゐるやうな男でないから、一人旅をなさるお前様を取つて喰はうの煮はうのといふ了見はございませんと云つた言葉を思ひ起しました。事實、あの男が自分を女と知つた上で、無禮を加へるつもりならば、今までに其

の機會もあつたらう、殊に昨夜の泊りで、わざと外してしまつたのが不思議であるなど、お松は考へて歩きました。

併し、氣味の悪い男は氣味の悪い男である。さうしてもあの男と道づれの縁を切つてしまはねはならぬと思ひました。それをするには如何なる手段を取つたらは宜いたらうかと、其の事をそれからそれと考へて大月から駒橋横尾、殿上と通つて漸く猿橋の宿まで入る事が出来ました。

お松は幼ない時分から諸國の旅をして歩きました。それ故に、はじめの頃は辛かつたけれど足が慣れて見れば、世の常の女のやうに道に悩むことが少いのであります。たゞ腰に差し慣れない兩刀の重荷が苦しく、人の見ない處では其れを抱えるやうにして歩きましたが、猿橋の宿へ来て、さある茶店へ入つて一息つきました。

お松が此の店に休みながら考へたのは、やはり此の後如何にして、が、ん、り、きといふ氣味の悪い道づれを撒かうかといふ事でありました。お松の思案では、幸に此の道中で然るべき有力な旅の人を見つけて、その従者に加へて貰うか、或は同行に入れて貰へば、これから先の道中も無事であるし、あの氣味の悪い男も寄りつくまいといふ事でありました。

こゝで中食をしてゐる間にも、お松は其の心持で街道の方を眺めてゐました。

暫くした時に、其の前をズツシ／＼と通つたのは、昨日笹子峠の坊主澤のあたりで遣り過ぎた八州の役人といふ一隊でありました。その一隊の人が、ズツシ／＼と通つて行く光景は何となく

種かではありません。昨日あれから何處まで行つたのか、甲府までは行くまいけれども、勝沼あたりまでは行つて、それからまた引返して来たものに相違ないのであります。

如何に同行の人を求めたいからと云つて、あの一行の中へ騙け込むわけにも行かないから、お松は其れの通り過ぐる間は隠れるやうにして、それが遠く離れたと思はれる時分まで、わざと此の店に隙をつぶしてゐると、其處へ頬冠りをした逞しい馬子が一人馬を曳いてやつて來ました。

「御免なさいよ」

と云つて頬冠りを取つた馬子の面は目に焼けて曇たらけであるけれども、殿めしい面で見つきの尋常の馬子とは違ふやうに見えます。眼つきが違ふといつても、悪い方に違ふのではありません。が、りき、の百藏は身なりを小綺麗にしてゐるに拘はらず、何となく小氣味が悪い男であるけれど、今入つて來た馬子は、容貌が怖ろしげなのに、かはらず、一見して氣味の悪いといふ感じをお松に與へないで其の御粗末な服装の中に、何處やらに親しみのある人品が備はるやうに見えないでもありません。無雜作に入つて來たけれども其處にお松のあることを見て、丁寧に小聲をかけた

此の店の親方は、心安い問柄と見えて話しぶりも打ち解けたものです。その話を聞くと、簀子まで客を送つて行つて此れから鳥澤へ歸る處であるといふことです。

此の馬子は隅つ子へ腰をかけて、お松の方を遠慮深く見てゐたやうでしたが、

「もし、お武家様」

と云つて言葉をかけました。

「はい」

お松は馬子から言葉をかけられたので、少しうろたへて返事をしました。

「失禮でございますが、あなた様は、これから何方へお越しでございますか」

「江戸へ下ります」

「左様でございますか、お一人で……」

「はい」

「如何でございますか、さの道歸りでございますから、お馬にお乗りなすつてお呉んないさいませうまいか」

と云はれて、お松は馬子の面をチラと見ました。人の悪い馬方や雲介の多いことでは郡内は名うての處であります。ですから、成るべく今まで馬も駕籠も備はない事にしてゐました。が、りきがついてゐたから、それでも今まで通つて來ただけれど、これから先、一人で歩かうものなら、さんな五月蠅い勤め方をされるかわからないし、萬一自分が女と知られた上は、またさんな目に遭うか知れたものでないと思ひました。

今、こゝで此の馬子から馬に乗れと云はれて見るに、もう此れが惡強の最初ではないかと思はれ

て、その馬子の面を見たのですけれど主人の話し振を見て、其の人格を見て、性質の悪い馬子は見えません。

お松は心を決めて、さうく其の馬に乗ることに約束しました。

馬子は喜びました。この道歸り馬の事だから賃錢も安くするやうな事を云ひました。お松は何處までいふ定まりを此處ではつけませんでした。けれど、實は上野原まで一氣に行つてしまはうといふ心で此の馬に乗ることにしました。

この馬子の面は何處やら、先に甲府の牢を破つた南條といふ奇異なる武士の面影には似てゐるけれど、それはお松は更に交渉のある事ではありません。

程なく例の猿橋まで来ました。此方へ入る時にお松は此の有名な橋の傍へ駕籠をこめて見て過ぎました。今、馬上から其れを見ることもた趣が變つたものであります。馬子は、この橋が水際まで三十三尋あること、水の深さも亦三十三尋あること、橋の長さは十七間あることなどを、この客人にも説いて聞かせるやうに、お松にも説いて聞かせました。

山谷の立場で休んで犬目へ向けて歩ませた時分に傍道から不意に姿を現はした旅人がありました。お松は早くも其の旅人ががんりきの百藏であることに氣が附いてヒヤリしました。

百藏も亦ツカく馬の傍へ寄つて、お松に向つて馴々しく口を利き出さうとした時に、前に手綱を曳いてゐた馬子が、不意に後を向きました。近寄つて来たがんりきが、ハタと面を見合せた

處、をかしいことに、がんりきが甚だしく狼狽しました。兎も角相當の悪黨を以て自任してゐるらしいがんりきが、此の馬子の面を見ての狼狽方は尋常とは見えませんでした。

それが爲に折角お松に近寄らうとして来たがんりきが一言も物を云う邊がなく、タヂく下がつて苦い面をしたが、そのまゝ前へ突き抜けてトットと早足に行つてしまふ有様は逃けて行くものやうであります。がんりきが、しかく狼狽するにかゝはらず、馬子は、

「あは、足の早い野郎だ」

と笑つてゐました。

成程、足の早い野郎で、忽ちに後影さへ見えなくなつてしまひました。

「お武家様、お前様は、あの男に見込まれなさいましたね、お氣をつけなさらなくちやあ可けません、彼奴は執拗い奴でございますからなあ」

「馬子どの、お前は、あの人を知つておゐるのか」

「知つて居りますよ、いやに悪黨がつて喜んでゐる他愛もない奴でムいます」

「實は、あの者に取りつかれて困つてゐます、何ぞか遠ざける工夫は無からうか」

お松は、つい此の事を馬子に向つて口走りました。

「左様でございますねえ、今度、出て来たら取捉まへて何ぞかして見ませう」

と馬子は云ひました。何ぞかして見るといふのは如何して見るつもりなのたらう。けれども此の

馬子が、が、ん、り、き、を怖れないと、反對に、が、ん、り、き、が此の馬子を怖れて逃げたことは今の舉動でわかるのですから、お松は何となく此の馬子を心強いものに思ひます。この馬に乗つたお松は犬目新田も過ぎ、矢壺の座頭ころがしの險も無事に通つて例の鶴川の渡し場まで来ました。

こゝは、その前の時分に宇治山田の米友が坊主にされた處であります。此處まで来る間に、如何したのか、が、ん、り、き、の百蔵は丸きり音沙汰がありません。

前の時には、大勢の川越人足がゐたけれども今は水の出も少いし、人足でなしに、橋を架けて橋錢を取つて渡してゐました。定めの橋錢を拂つて、此の橋を渡りきると、以前川越人足が詰めてゐた小屋があります。その小屋の中に休んでゐたのは例の八州の役人ご手先ごでありました。

「これ待て」

お松を乗せた馬が此の前を通つた時に呼びかけました。南條に似た馬子は其の聲を聞いて聞かないやうな振して行かうとするのを、

「その馬待て」

二度呼び留めましたけれども、馬子は矢はり聞かないふりをして行つてしまひます。役人は後を追つかけて来るかと思ふと、それつきり何の音沙汰もありませんでした。たからお松の乗つた馬は無事に渡し場を越えて上野原の宿へ入りました。

こゝで若松屋といふ宿屋へ此の馬子によつて案内されました。これから江戸へ行くまで放したくない馬子だと思ひました。けれども、さういふわけには行かないから、お松は此の馬子に定めの賃銀と若干の酒料とを與へて、自分は、また二人で心細い宿屋の一室へ隠れるやうにしてゐました。

さて斯うして見ると、が、ん、り、き、の事が思ひ出されます。あの馬子の面を見て逃げた狼狽さも可笑しいけれど、それつきり出て来ないといふ男ではない筈であります。馬子を歸してしまつて此れからの道も心細いが、またあの男に出て来られる事も氣味が悪い。お松が其の兩方を考へてゐる處へ、

「お客様、誠に恐れ入ります、八州様の御用が参りました」

「八州様の御用とは」

「この邊をお見廻りのお手先でございます」

「役人に調べられるやうな筋は無いが」

「さあ、如何いふわけでございますか、先刻お馬でお着きになつた若いお武家の方にお目にかかりたいと申して店へお出向になりましたでございます」

「はて、先刻馬で着いたといへば、如何やらわし一人のやうな」

「左様でございます、外にお馬でお着きになつたお方もござりますれど、若いお武家様ご仰有



られるご貴方様の外にはござりませぬ」

「わしに何の用向か知らんが、會ひたく無いものじや」

「それでも、ちやんと、おあさを見届けてお出でになつたものでございますから、外様と違ひま  
してお断り申すことは出来ないで困つて居ります……」

「そんなら是非もない、會ひませう、これへお通し下されたい」

とお松は云つて番頭を歸しました。

けれども此れは安からぬ思ひであります。この際に役人から取調を受けるといふ事は一大事であ  
ります。併し斯うなつて見れば逃れる事が出来ません。断ることも出来ません。断れば職權を以  
て踏込むに相違ない。逃るれば手分けをして引捕へるに相違ない。合つて見るより外は如何にも  
仕方がないのであります。此の位なら、一そ、が、ん、り、き、と連になつてゐた方が、また智慧もあつ  
たらうにと思はれる。さうして胸を痛めてゐる處へ案内につれて、八州の役人と手先がツカノ、  
と入つて來ました。

お松は胸が喉いで氣が嚇つと逆上るやうであります。

「ちよ、お尋ね致したいが其許様は何れからお越しになりました」

入つて來た八州の役人といふのは、割合に丁寧な物の尋ねやうです。

「拙者は甲府より参りよした」

お松も一生懸命で度胸を定めて返事をし初めました。

「甲府は何れのお身分」

「勤番支配、駒井能登守の家申の者にござります」

「駒井能登守殿の御家中さな、失禮ながら御姓名は」

「和田靜馬と申します」

「和田靜馬殿」

と云つて役人は小首を傾けましたが、

「して、これより何れへお越し」

「主人能登守の後を慕うて江戸まで出まする途中」

「たゞ御一人にて」

「左様、それには少々事情ありて主人の一行に後れ申しました」

「兎も角、少々御意得たきことがござる故、本陣まで御足勞下さるまいか」

「それは迷惑な」

「強つてはお願い申さぬ、實は貴殿のお身の上と云ひ、只今承はつた處と申し、ちよ不審の議  
がござる」

「不審と仰せらるゝのは」

「宜しい、然らば後刻また改めてお伺ひ致さう、御迷惑ながら其れまでは此の宿をお立ち出でなさらぬやうに願ひたい」

「心得ました」

「これは御無禮の段お詫を申上げる」

と云つて役人ご手先ごはソロ／＼と歸つてしまひました。

兎も角も歸つてしまつたから、お松はホツと息を吐きました。ホツと息は吐いたけれど此れは、いよ／＼安心がならないのであります。存外、立ち入つて調べる事はしなかつたけれども、實に此處へ檢束されてしまつたのと同じことでもあります。後刻といふのは何時頃の事か知らないが、その時に來て委細を調べられてしまへば、何もかも曝露されてしまふ事でもあります。關所を抜けて來た事も表向きになつてしまはねばならぬ。駒井能登守家中といふ事や、和田靜馬といふ事の化の皮も立處に剥がれてしまはねばならず、その上であられもない男裝して神尾の家を抜け出したこの一部始終は他愛もなく露見してしまふのであります。お松は漸く絶對絶命のやうな處へ追詰められる氣持に迎られて、いざといへば自害をして果てるはかりご小刀を膝の處へ取り上げて、その後の成行を怖ろしい思ひで待つてゐました。

けれども待ち構へてゐる役人も手先も容易にやつて來る模様は見えませんでした。可なり身體も心も疲れてゐるから、もう寢てしまひたい時刻であつたけれど、いつ役人が押しかけて來るか知

れないのだから、寢てしまふわけにも行きませんでした。

行燈の影に、ぼんやりご小刀を膝の上へ載せたまゝで、限りのない心細い思ひご、それから危険を前にした一種の張りきつた心ごで、お松は事の成行を待つてゐます。

甲府から江戸までは僅かに三十餘里の旅、前に長い旅をしてゐた經驗から、それを餘りに多寡を括つた無謀を事毎にお松は覺つて來るのであります。

「若し、役人に引立てられて本陣さやらへ行かねばならぬ場合には自害する、一層、斯うなつては、其の前に此處で死んでしまつた方が宜いかも知れぬ」

お松は調べられて一切が曝露した噂に恥辱を取るよりは、其れより前に死んでしまつた方がご、さしにも氣が張つてゐるお松も、さても逃れぬ運命ご死を覺悟して見ると、一時に心弱くなつて來て涙を落しました。

その時に、役人の來るべき表口でなく、障子を隔てた廊下の方で人の氣配がするやうであります。

## 十二

お松が斯うして宿に着いた時よりは少し遅れて、同じやうな客が此の上野原の本陣へ同じやうな方向から來て宿を取りました。それはお松のやうに忍びやかに來たのではなく、大手を振らないまでも、旅路には心置のない人のやうでありました。

その客は、お松と同じやうな若い侍の姿をしてゐましたけれど、お松のやうに單獨の旅ではなく、他に一挺の駕籠と共に、自分も此處へ着く時は駕籠へは乗つて来たけれども、寧ろ他の一挺の駕籠を守護して来たもの、やうであります。

本陣へ着いて間もなく、守つて来た他の一挺の駕籠の人を隠すやうに別間へ置き、自分は其の次の一室を占めました。申すまでもなく其の隠すやうに守護して来た人といふのはお君で、それに附いて来た人は宇津木兵馬であります。兵馬が其の一室に控へてゐる時に、これもお松が受けたと同じやうに、例の八州の役人の見舞を受けました。

「はて、八州の役人が何用あつて、我々を詮議する」

と兵馬は訝かりましたけれど、それに應對する用意は充分であつて表面上は何等の咎め立を蒙るべき由もないのであるから、お松のやうな不安な心でなしに、立處に其の役人を迎へました。

役人は、またお松にしたやうに、其の何れより來り何れへ行くやを尋ねました。また兵馬に向つて身分と姓名とを尋ねました。その時兵馬は答へました。

「甲府勤番支配、駒井能登守の家中、和田靜馬と申す者」

「ナニ、貴殿が和田靜馬殿と申される」

役人は眼を丸くしました。その上に念を押して、

「お間違ではござるまいな、しかと貴殿が和田靜馬殿か」

「御念には及び申さぬ、元、駒井能登守の家中にて和田靜馬と申すは拙者の外にはござらぬ」

「處が、その和田靜馬殿が二人ござるから物の不思議じや」

「何と云はれる」

「然も、同じく此の上野原の宿屋へ、今日泊り合せた客人に、同じく駒井能登守殿の家中にて和田靜馬殿と名乗る御仁がござる」

「これは不思議千萬、その者は何れの宿に居て、何を苦しんで拙者の名を騙る」

「それは只今、我々が確に會うて其の名乗を承はつて參つた、當所の若松屋といふのに、今も尋常に控へて居らるゝ」

「はて怪しい、して其者の年頃は」

「貴殿よりは一つ二つお若うござるかな」

「それほどの年にしては大膽な、兎も角、それは心あつてする事か、或ひはまた旅路のいたづら心から、わざと拙者の名を用ひるものか、これへ同道して突き合はせて御覽あれは直ぐにわかる事」

「如何にも、貴殿が、まことの和田靜馬殿であることは、惠林寺の先觸でも毛頭疑ひのない處、若松屋の若者こそ甚だ怪しい、篤き吟味を致さねばならぬ」

「引捕へて是へお伴れあらは、拙者から懲らして済むものならは懲らしめ、意見して追ひ放すべ

き者ならば意見を加へて見るも苦しいござらぬ」

「然らば其の者を引捕へて、これに連れて参らう」

役人や手先が立ち上つた時に、兵馬は不圖何事か胸に浮んたらしく

「お待ち下さい、何にせよ、承れば年若の者、無下に恥辱を與へるも不憫故、拙者、これより同道致し、穩かに其の者に會うて見たい」

「それは御隨意」

兵馬は身仕度をして、わが變名の變名を名乗る若者の何者であるかを見定めようと思つた。

若松屋の一室に和田靜馬と名乗つたお松は、非常の覺悟をしてゐます。

和田靜馬の名は或時に於て兵馬が假に名乗る名前でありました。お松は其の名を此の場合に利用した事が、此んな風に喰ひ違つた事を知らう筈がありません。

再び役人の來るべき時を豫想して待つてゐる役人は來ないで、障子の外に人の氣配がしたかと思つと、密に其處を開いて、

「御免なさいまし」

小さい聲で云ひながら面を出したのは、思ひきや、が、ん、り、き、の、百、で、あ、り、ま、し、た。

「……………」

お松は呆氣に取られてゐると、

「また参りました」

來なくても宜い男であります。お松は苦りきつてゐました。

「また参りましたのは、大變が出来たからなんでしょう、大變といふのは、わたし共の方の大變ではございません、貴方様の方の大變なのでございます、その貴方様が斯うして落着いておゐでになる氣が知れませんが、一刻も早く此の場をお逃げ出しになりませんか命までが危なうござりますよ、それで、わたし共が又迎へに上つたんでございます、早くお逃げなさいまし、わたしと一緒に此の宿屋をお逃げなさいまし、取る物も取り敢へずお逃げなさらなくては可けません、第一お關所破りだけで、命と釣替がものはあるんでございますから、是が非でも逃げなくてはなりません、さあ、お逃げなさいまし」

が、ん、り、き、は、執、念、深、く、お、松、を、伴、れ、出、し、に、來、た、も、の、さ、も、思、へ、る、し、ま、た、一、種、の、親、切、で、逃、が、し、に、來、た、も、の、さ、も、思、は、れ、る、の、で、あ、り、ま、す。け、れ、さ、も、お、松、は、さ、す、が、に、此、の、男、の、言、ひ、な、り、に、其、れ、で、は、さ、云、つ、て、逃、げ、出、す、氣、に、は、な、れ、な、い、で、ゐ、る、と、

「何を考へてお出でなさるんでございます、實は斯ういふわけなんでございます、貴方様が、この宿屋へ駒井能登守様の御家來たといつてお泊りなさつてゐると、丁度本陣の方へ、その本物の能登守様の御家來が、ちやあんと着いてお出でなさるんだ、役人から、貴方様のお話を聞いて、能登守の家中に左様な者があるさは訝しいとあつて、今此方へ調べにお出でなさる處なんでござ

います、それにつかまつて御覽じろ、退引ひきかへがなりません、それを聞き込んだから、わたしは斯うして抜がけをして御注進に上つたわけなんです、悪い事は申上げません、兎も角も此の場だけは外さなければ、貴方様の動きが取れません、決して悪い事を申上げるんではございませ

ん」  
 がんりきに斯う云はれて焦こき立てられて見ると、お松の心が動かないわけには行きません、ドノ道危みちない道を踏んだ以上は、手を束ねて捕はれの身になることも忌やです。所詮死を決してからは、逃げられるだけは逃げた方が恰ただ憐あはれではないかさへ思はれるのであります。併し、人もあらうに、此の男の手引で夜分逃げ出すといふ事はいくら何でも、また其の氣にはなれないのであるへ、表の戸をドン／＼叩いて、

「先刻お尋ねした和田静馬殿にお目にかゝりたい」

それは紛れもなき役人達の聲であります。お松は此の聲を聞くさ、さすがに狼狽ろうたいへて立ちかけた處を、がんりきは其の左の手でお松の手首をさつて、

「逃げなくちや可けません、お逃げにならなくちや損でございませ、馬鹿正直も時によりけりでございます」

早や表の方では役人達が案内されて此方へ来る足音が聞えます。お松は我を忘れて大小を抱えるさ、がんりきは早くもお松の荷物を取つて肩にかけてゐて、再び其の手を取つて、引するやうに

廊下へ飛び出しました。

事の急なるが爲にお松は、心ならずも、がんりきに引摺られるやうにして此の家を外に飛出しました。

外に出て見るさ外は眞暗です。その眞暗な中を、がんりきは案内を知つてゐるさ見えて、お松の手を引きながらズン／＼と逃にげんで行つたが、

「誰だッ」

途中で不意に異様な聲を立て、お松の手を放してしまひました。

「ア痛ッ」

最初誰だッと云つた時に、がんりきは何者にか一撃を加へられたやうでありましたが、二度目にア痛ッと云つた時には、たしかに大地へ打ち倒されてゐたものであります。

「うーん」

と云つて、がんりきが地上で唸うなりつてゐるのを聞けば、打ち倒された上に、手強く締めつけられてゐるものゝやうでありました。さては役人の手が、もう此處まで廻つてゐたかとお松は驚いて、木蔭に身を忍しのはせました。それにしても、不思議なのは、若し役人であるならば、御用ださか神妙にさか言葉をかけて打つてかゝるべき筈であり、何も、がんりき一人だけを狙ねらはないで、當の自分にも、言葉がかゝりさうなものです。それを不意に闇の中から出て、がんりき一人だけを打

ち倒したのは如何いふつもりであるか、さつぱりわかりません。

「覚えてやがれ」

や、あつて、斯う云つた其れは、が、ん、り、き、の聲でありました。それは少しはかり遠い處へ離れて聞えました。大地へ打ち倒されたのが如何かして起き上がつて、命辛々逃げ出した捨臺詞のやうに聞えてそれから後は静かになりました。お松は身體を固くして木蔭に隠れてゐるこ、

「もしく、若いお武家」

それは聞いたやうな聲であります。聞いたやうな聲で、たしかに自分を呼ぶのたさは思ひましたけれど、お松は此の場合に咄嗟に返事をする事が出来ませんでした。それ故に尙も身を固くして木蔭にひそんでゐるこ、如何やら其の者が自分に近く探り寄つて来るらしくあります。

お松はそれで身構へをしました。が、ん、り、き、をさへ取つて押へる位の者に、自分が身構へをした處で甲斐のない事とは思つたけれど、其れでも身構をしてゐるこ、その者は直に近寄つては來ないで、そこへ蹲くまつて、カチ／＼と燧を切りはじめました。さうして其の火を小田原提灯にうつしてゐる事がよくわかるのであります。

提灯をつけられては堪まらない、もう絶體絶命と思つて、お松は其の提灯の光を慄へながら見てゐるこ、意外にも其の提灯の光にうつる人の面は見えたやうなと思ふも道理、それは今日猿橋の宿から此の上野原まで自分を載せて來た馬子でありました。此の馬子を見た最初にか、ん、り、き、は逃げ

出してしまひました。この次に逢つた時は取つて押へてやるこ云つてゐました。昨夕あの宿へ自分を送りつけた後は、烏澤さやらへ歸つてしまつたものと思つてゐたら、またあの宿に泊つてゐたものらしい。

「如何なさいました、怖い者ではござらぬよ」

馬子は提灯をさしつけて、お松の隠れてゐる木下闇を照しました。お松の足は、ひさりでに其の木下闇から離れて、馬子の提灯の方に引き寄せられました。

この時に、が、ん、り、き、は何處へ行つてしまつたか姿も形も見えませんが、

「これから私が案内をして上げます、御安心なさいまし」

馬子はお松の先に立つて崖道を桂川の岸へさ下りて行きます。

しばらくして此の馬子は桂川の岸にある船小屋の處まで來ました。そこで振返つてお松の面を見て莞爾と笑ひました。お松は提灯の光りで其の面を見ただれども、其の意味を解することが出来ませんでした。

小屋の中には誰も住んでゐません。爐の中には火も無ければ燃えさしもありません。

馬子は提灯を羽目の一端にかけて置いて、床板を上げるこ其の中から空儀を程よくからけたのを一つ取り出しました。それを手早く解して開くと、其の中に何時用意してあつたのか、一組の衣類と見苦しからぬ拵への大小一腰が現はれました。

馬子は自分の衣裳を脱ぎ捨て、空儀に包んであつた衣類を着替へてしまひました。それも亦見苦しからぬ武士の着る衣裳であります。衣裳を着替へて帯を締めて、それから足をこしらへにかゝる手順が慣れたものであります。

身仕度をしてしまつてから、腰をかけて草鞋を二足取つて其の一足をお松の前に投げ出し、

「これをお穿きなさい」

お松に當がつて自分も亦其の一足を穿く。

お松はたゞ此の奇異なる人の爲す處を夢見るやうな心持で見、その爲せさういふまゝに従ふより外はありませんでした。

「これから御身と共に、拙者も江戸立ちぢや」

と云つて、サツサと先に立つて、例の提灯を持つて此の舟小屋を立ち出でました。お松も無論其のあとに従ひました。小屋を出て河原の町の方を見上げると、提灯の影が幾つも飛んで、人の罵る聲なごもします。

それを見てゐた奇異なる武士は、何ぞ思つてか自分の小田原提灯をフツと吹き消しました。四邊は、やはり眞暗で、桂川の川波のみが音を立て、噪いでゐます。その暗い中で、奇異なる武士は無言にお松の手を取つて引き立てました。併し其疲れきつてゐるのを認めて、

「拙者の脊中をお貸し申さう、遠慮なさるには及ばぬ、それがお互に樂で宜しい」

奇異なる武士はお松を背負うて、桂川の岸の大石小石の歩きづらい中を飛び越えて、流れと共に下つて行くのであります。

慢心和尚の巻了

一六 道庵と鱈八の巻

下谷の長者町の道庵先生が此の頃何か氣に入らない事があつてブン／＼怒つてゐます。

その氣に入らない事を、よく尋ねて見るに成程と思はれる事もあります。それは道庵先生の直隣の屋敷地面を買ひつゞぶして贅澤な普請をはじめたものがあります。道庵先生ほどのものが、他人の普請を嫉むさいふ事はありません。其の普請が出来上るまでは、先生は更に頓着をしませんでしたけれども、いよく出来上つて其の事情が知れた時に、先生が非常に憤慨してしまいました。その普請さいふのは其の頃有名な鱈八大盡さいふもの、妾宅なのであります。鱈八大盡さいふのは其の頃の成金の筆頭でありました。見すばらしい棒手振から仕上げて今日では其の名を知らないもの、ないほどの大盡であります。それは國內に聞えた大盡であるのみならず、外國人を相手に手廣い商賣をしました。絲の取引をしたり唐物の輸入をしたり、金銀の口錢を取つたり、其の富の力の盛んな事は外國までも響き渡るほどの大盡でありました。

「おれの隣へ来たのは鱈八の野郎か、それさ知らなかつた、口惜しい」



道庵先生は其れぞ知つた時に齒齧みをしたけれど、もう追附きません。

其の妾宅が出来上るに盛んなる披露の式がありました。集まる者、朝野の名流といふほどでもなかつたけれど、多種多様の人が集まつて、萬歳の聲が湧くやうでありました。それを聞いて道庵先生は、火のやうに怒つてしまひました。其の後とても、毎日々々、鱧八大盡の妾宅へ詰めかける朝野の名流(?)は少い數ではありませんでした。其の門前の賑やかな事は長者町初まつて以来の景氣であります。處が道庵先生の方は相變らずの十八文でありました。その門を叩く人も十八文に準じた人で朝野の名流などは餘り集まらないのであります。

今まで十八文で賣つてゐた道庵先生、長者町といへば酔はらひの道庵先生と受取られるほどの名物であつた先生が、鱧八大盡の妾宅が出来てからといふものは、その名物の株を奪はれさうになつたのであります。道庵先生が憤慨するのも道理が無いわけではありません。鱧八大盡の方こそ、故らに道庵先生の隣を選んで普請をはじめたわけでは無からうけれど、偶然にさうなつた事が可笑なものであります。殊に門が崩れ、塀が破れ家が傾いた先生の屋敷の地境へ持つて行つて、宮殿を見るやうな大きな建築が湧き出し、その樓上で朝野の名流たの、絶世の美人たのが豪華を極める處を、道庵先生が縁側で藥草などを乾かしながら見上げてゐる心持は、どんなものでありませう。

「今に見てゐやがれ、鱧八の野郎ヒデ月には逢はしてやるから。」

道庵先生は、こんなわけで此の頃はブン／＼怒つてゐるのであります。

鱧八大盡の方では、こんなわけで道庵先生を敵に持つた事は一向知りませんでした。大盡が其の高樓の上から、先生の屋敷と庭を一眼に見下ろして、

「汚い家だな、何さかして早く買ひつぶしてしまへ。」

と云つて不快な面をしてゐました。それで三太夫が人を介して内々買ひつぶしの相談に當らせて見ようとするに、あれは有名な變人だから、そんな話しを持ち込まうものなら却て飛んだ事壞しになります。まあもう少し時機をお見合せなさいといふ事であつたから、大盡には其の事を云はないで置いてありましたけれど、此處に鱧八大盡と道庵先生とが表向いて相争はなければならぬ事情が出来たのは是非ない事と申すより外はありません。

それは鱧八大盡が、ある夜此の妾宅の樓上へ泊り込んだ時に、不意に食あたりを苦しめられて、上を下へと嘔がせた事がありました。大盡は非常に苦しみました。いかに大盡の力を以てしても、雇人達の追従を以てしても、病氣ばかりは醫者の手を借らなければならぬのであります。その醫者とても、この場合に於ては、遠くの名醫博士よりも、近くの十八文を有難く思はねばならぬのであります。そこで家の子郎黨達は取る者も取り敢へずに道庵先生の門を叩きました。

この時に、道庵先生の門を叩いた家の子郎黨達が心得のある人であつたならば、相手が何しろ道庵先生だといふことを腹に置いてかゝるのだけれど、不幸にして其の連中は、それだけの心得も

腹も無い連中が、狼狽わんぱつして駆けつけたもんだから、鱈八大盡たつぱちだうじんの爲にも、道庵先生の爲にも悪い結果を齎もたらすといふ事を夢にも豫想はしませんでした。

「今晚は、今晚は」

大盡の家の子郎黨は、傾きかゝつた道庵先生の家の門を荒々しく叩きました。

「國公起きて見ろ、忌に荒つぽく門を叩く奴がある、こちと等の門なんぞは、下手に叩かれたんでは引繰返つてしまはあな」

道庵先生は其の音を聞きつけて寢床の中から藥箱持ちの國公に差圖をしました。

國公は、慣れたものだから直に起きて案内に出ました。

「ごーれ」

國公が應接に出たけれども、道庵先生の寢てゐる處と立關とは、いくらか隔たつてゐないのだから、先生は其の應待の模様を、いつも寢ながらにして聞いてゐて、それによつて病氣の模様を察し、急いで、駆けつけるべき必要があると認められた時は急いで駆けつけ、悠々してゐた方が病人の爲になると思つた時は、わざと悠々ゆうゆうしたりなさるのが例でありました。

「今、御前が御急病であらつしやる、先生に大急ぎで出かけて戴きたい、御前はお氣が短くてゐらつしやるから、愚圖ぐず々々してゐるごお爲になりません、寢卷のまゝで決して御遠慮なさるには及びませんから、斯ういふ場合でございますから、失禮は私共から、あそこで幾重にも取りなして

差上げますからどうか御一緒に願ひたいもので」

國公が立關の戸を開けるを待ち兼ねて外から斯ういふ挨拶でありました。寢ながら聞いてゐた道庵先生は、さうも解せない挨拶だと思ひました。第一御急病であらつしやる御前ごぜんといふのは何者であるかといふ事も解せないものでありました。それに氣が短くてゐらつしやるから、愚圖々々してゐるご爲にならないといふ言分は、考へて見るごをかしな言分でありました。お氣が短かくてゐらつしやらうご、お氣が長くてゐらつしやらうご、此方の知つた事ではないのであります。寢卷のまゝで御遠慮をなさるには及ばないから出て来いといふ言草も随分變つた言草であります。失禮はあそこで取なして上げるといふのは一體誰に向つて云つたのたらうご道庵先生も少しく面喰つて、世には粗忽せまかしい奴もあるものた、頼まれる方へ向つてすべき挨拶を頼む方からしてしまつてゐる、急病で氣が顛倒してゐるごは云ひながらヲカしな奴等たご道庵先生は腹の中で可笑がつてゐました。

道庵先生にも解せなかつたやうに取次の國公にも解せなかつたから眼をパチ／＼して、

「一體、何方どこからお出でなすつたんでございます」

「何方から？ さう／＼それ／＼此のお隣の大盡から参りました。大盡が只今御急病であらつしやるから、それでお使ひに」

使ひの者が斯う云つた時に、

「馬鹿野郎！」

道庵先生がバネのやうに起き上がりました。

「何でエ、何でエ」

道庵先生はムツクリと跳ね起きて、寢巻の帯を締め直す隙もなく、枕許にあつた薬研を抱へて玄關へ飛び出しました。

若し先生が心得のある武士であつたなら薬研を持ち出すやうな事は無かつたでありませうけれど、先生の枕許には別段に武器の類を備へてありませんでしたから、先生は有り合せの薬研を抱へて飛び出したものであります。さうして玄關へ飛び出した先生の舉動は確かに鱧八大盡の使者を驚かすに足るものであります。舉動だけが使者を驚かすのみでなく、其の言葉も彼等の度膽を抜くに充分なものであります。

「さあ承知が出来ねエ、もう一遍云つて見ろ、手前達は何處から、誰に頼まれて来たのか、もう一遍云つて見ろ」

先生は薬研を眼よりも高く差し上げて、鱧八大盡の使者を睨みつけた處は、可なり凄いものであります。

「私共はお隣の鱧八大盡の邸から上りました……」

「鱧八が如何した、その鱧八が如何したと云ふんだ」

「鱧八の御前が急に御大病におなりなさいましたから、先生に診て戴きたいと思つて上がりました」

「それから如何した」

「元々、鱧八の御前は、滅多なお醫者様にはおかゝりにならないお方でございます、立派なお醫者様をお抱え同様にしてあるのでございますが、何分今晚の處は急の御病氣たものでございましてから據處なく先生の處へ上つたわけなのでございます」

「さうか、據處なく、俺の處へ頼みに来たのか、よく来て呉れた」

「何が御縁になるか知れたものではございません、これから此方の先生も、大盡へお出入が叶ふやうになるかも知れませんが、若し、これが御縁で大盡のお氣に入りになつてお出入が叶ふやうになりますれば、使ひに立つた私共までが面目でございます」

「この馬鹿野郎」

道庵先生は、この時に眼よりも高く差上げてゐた薬研を力を極めて玄關先へ投げつけました、薬研は凄じい音をして、鱧八大盡の使者の足許へ落ちました。それと共に爆裂彈の破裂するやうな道庵先生の大きな音で

「態あ見やがれ！」

使者の連中は、この人並ならぬ道庵先生の舉動と足許で破裂した薬研の響きで腰を抜かす程に驚

きました。

物を知らないといふのは怖ろしいものであります。使者の連中も、最初から道庵先生と心得てかかれはこれほどの事は無かつたであらうに、惜しいことに、その邊の注意が行き届かなかつたから斯ういふ事になつたのは返すべくも残念でありました。

「こりや氣狂だ」

長居をしては如何いふ目に逢うか知れないと思つて、あわてふためいて這々の體で使者の連中は逃げ歸つてしまひました。

斯うして彼等を追ひ返したけれども道庵先生の餘憤はまた冷めないものであります。寢巻のまゝで庭へ飛び下りました。庭へ飛び下りて用心梯子まで來ると、それへ足をかけて見る／＼屋根の上へ登つてしまひました。雇人の國公は、先生として斯様な舉動は有勝の事だから、別段に驚きもしないし、今、物狂はしく屋根の上へ登つて行く道庵先生を見ても、それを抱き留めようとも何さもしないのであります。

それよりも今、道庵先生が投げた藥研を玄關の鋪石の處から拾ひ上げて、轉んだ子供をいたはるやうに撫でてゐましたが、それが鋪石に當つて多少の凹みが出来たことを惜しいものと思つてゐます。先生がムキになつて何かを抛り出して大切の物を削にするのは今に始まつた事ではありませんでした。

この夜中に屋根の上へ登つた道庵先生は其れでも迂り落ちもしないで、やがて屋の棟の上へスツクま立ちました。

こゝから見上げると、鱷八大盡の大夏高樓は眼の前に聳えてゐるのであります。道庵先生は其れを睨みつけながら、

「鱷八、鱷八」

と突拍子もなく大きな聲で怒鳴りました。近所の人はその聲に夢を破られたのもあつたけれど、直にまた例の道庵先生かと思つて、わざ／＼起きて客子を見届けようとするものもありませんでした。けれども、當の鱷八大盡の家では其の大きな聲で驚かされないわけには行きませんでした。殊に時めく大盡に向つて、鱷八、鱷八と云つて横柄に頭から呼びかけるやうな人は滅多に無い筈なのであります。

丁度其の高樓の二階の間で急病に苦しんでゐた鱷八大盡は、今少しばかり其の苦しみが退いたので附添のものもホット息を吐いてゐる處へ、外の闇の中から、何處さもなく此の突拍子もない大音で、

「鱷八、鱷八」

と呼びかけたのが耳に入りました。

「あれは誰だ」

さ其れが大盡の耳ざはりになつたのは道庵先生に取つては誂へ向きであつたけれど、並んでゐる人達に取つては身體を固くするほどの恐縮なのであります。何かにつけて誤魔かさうとしてゐる時に、又しても、

「鱧八、鱧八」

と破鐘のやうな大きな聲で續けざまに呼び立てる聲がします。

「あれは誰だ」

急病は一時に落着いたけれど、この聲で大盡の落着きが亂れて来るやうであります。鱧八、鱧八と、事も無けに自分呼び捨ての怪物が外にあると思へは善い心持はしなしくあります。それが怪物であるならば、またよいけれど、人間であるとして見れば、打ち捨て、は置かれぬのであります。大盡は其の聲のする方を睨めてゐると、

「氣狂ひでございます」

さきに道庵先生の處へ使者に行つて逃げ歸つたのが恐る／＼大盡に向つて斯う云ひました。

「隣りの屋根の上あたりでする聲のやうだ、隣りは一體何者が住んで居るのだ」

大盡は耳をすまして、尙ほ其の聲を聞かうとしながら附添の者にたづねると、

「貧乏醫者でございます、貧乏な上に氣違ひ同様な奴でゐいます」

「怪しからん、なぜ早く買ひつづして立ち退かせないのだ」

「それが如何も……」

大盡の御機嫌が斜になるのを附添の者はハラ／＼してゐると、

「鱧八、病氣はごんな鹽梅だ、ちつこは落着いたかい」

屋根の上で斯ういふ大きな聲がしました。

「怪しからん」

「鱧八」

「憎い奴だ」

「鱧八よく聞け、手前は貧乏人から其れまでの人間になつた男だから、兎も角も物の道理はわかるたらう、手前の廻りにゐて胡麻を搗つてゐる奴等が禮儀を知らねえから其れでこの道庵が頼にさはるんだ、口惜しいと思つたら鱧八、此處へ出て来て、道庵の前へ手を突いてあやまれ、もし、あやまらなければ、この後は道庵にも了簡がある、さ云つた處で、おれは手前より慥に貧乏人だ、貧乏人だから金で手前と競争するわけにやあ可かねえ、さうかさ云つて劍術や柔術の極意にわたつてゐるさいふわけでもねえから、腕づくでも危ねえものだ、けれども、おれにはおれでお手前物の毒さいふものがある、色々の毒を調合して飲ませて恨みを晴すから覺悟をしろ」

この道庵先生の露骨にして無遠慮なる暴言は、あたり近所に鳴りはためくほどの大きな聲で怒鳴り散らされました。

先生は、それで漸く、いくらかの溜飲を下けて屋根の上から下りて來ましたけれど、龜八大盡は言ふばかり無き不快を感じて病氣も忘れて荒々しく寢床を立つて雨戸を押し開いて欄干から外の欄を覗みつけましたけれど、その時分には道庵先生は、もう屋根から下りて自分の寢床へ潜り込んでしまつてゐました。龜八大盡は、可なりに腹が大きいから、そんなに物事を氣にかける男では無かつたけれど、この道庵の暴言は聞き捨てにならないと思ひました。

よし、そんなら、いくら金がか、つても宜しい、あの屋敷を買ひつづせ、あの屋敷も賣らないと云へば、その周圍の地面家作を買ひつづして、道庵を自滅させるやうに仕向けるさ、執事や出入の者に其の場で固く言ひつけました。

その後、龜八大盡の御殿さ、道庵先生の古屋敷さの間を見てゐると随分、可笑なものでありました。

大盡の方では、絶世の美人たの、それに随ふ小間使たのさいふものを、高樓に上せて、道庵先生の古屋敷を眼下に見下させながら、そこでお化粧をさせたり、随めかしい振舞をさせたり、鼻をかんだ紙を投げさせて見たり、哄さ聲を上げて笑はせたりなごしてゐました。それを見た道庵先生の方は、また道庵先生の方で、屋根の上へ一はいに櫓を組みはじめました、丁度大盡の高樓さ向ひ合うやうに大工を入れて櫓を高く組み上げさせました。

大盡の方では、その櫓を見ては笑ひ物にしてゐました。それは大盡の家の高樓さ、道庵先生が大

工を入れて急ごしらへにかゝる櫓さは比較になりません。そんな事をして張合はうとする道庵の愚劣を笑つてゐました。

或日の事、大盡の家の高樓では、大廣間を開放して例の美人連に合奏をさせ、出入の客を盛んに集めて大陽氣で浮れはじめたのを道庵が見て、外へ飛び出しました。

間もなく道庵が歸つて來た時分には、其の背後に二十人はかりの見慣れない男を伴れて來ました。

それは年を取つたのもあれば、若いのもあり、脊の高いのもあれば低いのもありました。道庵は

此の廿人はかりの見慣れない男を櫓の上へ迎へ上げました。さうして彼等に何事をさせるかと思

へば、つゞいて其處へ太鼓を幾つも擔ぎあけさせました。

この連中は、馬鹿囃子をする連中でありませぬ。何處から頼んで來たか知れないが、わづかの間に此れたけの馬鹿囃子を集めることは道庵でなければ出來ない事と思はれます。

大盡の家では、琴や三味線や胡弓で、ゆるやかな合奏の興が耐になる時分に、道庵の櫓では天地も崩れよと馬鹿囃子がはじまつてしまひました。それが爲に大盡の樓上の合奏は滅茶々に破壊されて呆氣に取られた美人連さ來客さは忌々しさうな面を見合せるばかりでありました。

それを得たりと道庵先生は囃子方を勵まし立て、自分は例の潮吹の面を被つて御幣を擔ぎながら櫓の真中で、これ見よがしに踊つて踊り抜きました。

道庵先生の潮吹の踊りは、たしかに専門家以上であります。これまでに踊りこなすには道庵も多

年苦心したもので、藝も熟練してゐる上に、自分が本心から興味を以て踊るのだから、潮吹が道  
庵だか、道庵が潮吹たかわからない位に妙境に入つてゐるのであります。

合奏の興を破られて敵意を持つてゐた大盡の高樓の美人連や來客も道庵先生の踊りぶりを見るこ  
敵ながら感服しないわけには行かないのであります。

道庵の屋根の上ではその都度々々馬鹿囃子がはじまります。馬鹿囃子がはじまるこ、龜八大盡の  
妾宅は滅茶々にされてしまひます。龜八は道庵風情を相手に喧嘩をすることを大人げないと思  
つてゐますけれども、あんまり無茶な事をするものだから腹に据ゑかねて、幾らか、つても宜い  
から道庵を退治するやうに出入の者に内命を下しました。

一方、道庵の方では馬鹿囃子が當りに當つたものだから、いよく宜い氣になつて、此の頃では、  
道庵も本業の醫者を其方退けにして踊り狂つてゐました。さうするこまた近所界限が其れを面白  
がつてワイ／＼と集まつて來ました。遂には道庵先生の庭から屋敷の前まで露店が出て物日縁日  
のやうな景氣になりました。

龜八大盡の妾宅の喧しい事云つたら、それが爲め夜の目も寝られないのであります。大盡から  
内命を下された出入の者は、如何にして此の暴慢なる道庵を退治すべきかに肝膽を碎きました。

その結果如何しても、右の馬鹿囃しに對抗するやうな景氣をつけて道庵の人氣を壓倒しなければ  
ならないと、その方法を色々と研究中でありました。

その間、道庵は、いよく圓に乗つて此れ見よがしに踊り狂ひ、踊りながら、

「スツテケテンツク、ボラ八さん」

なんぞと妙な節をつけて出鱈目の唄をうたひました。それがまた子供達の間に流行つて、

「スツテケテンツク、ボラ八さん」

何も知らない子供たちは、道庵の眞似をして大きな聲で町の中を唄つて歩くやうになりました。

大盡の一味の者は、いよく安からぬ事に思ひ、遂に大きな園遊會を開いて道庵を壓倒するの計  
畫が出来上りました。

その計畫は、さすがに大きなものであります。天下の富豪たる龜八大盡が、費用を惜しまずに  
やる事ですから、トテモ十八文の道庵なごが比較になるものではありません。

其の園遊會の餘興としては決して馬鹿囃子のやうなものを選びませんでした。その頃の名流を擇  
りすぐつた各種の演藝の粹を抜いて番組をこしらへました。また主人や出入の者も各々腕に懸を  
かけて其の隠し藝を發揮しようといふ事でありました。その上に、その頃、朝鮮から來てゐた名  
代の美男子の役者がありました。それに非常な高給を拂つて朝鮮芝居を一幕さし加へるといふ事  
などは、作者が可なり腦髓を絞つての計畫でありました。

これ等の計畫や、選定が、すっかり定まつてしまふと、それを成るだけ大袈裟に世間に觸れても  
らはねばならぬ必要から、人に金をやつて、散々に吹聴させ、お太鼓を叩かせたものですから、

この度の園遊會の景氣は長者町界隈は愚か江戸市中までも鳴り響きました。さすがに大盡の威勢は大したものだ、すばらしい御馳走をした上に、日本の土地では見ることの出来ない朝鮮芝居を見せてくれるさうだ、鱸八大盡でなければ出来ない藝當だ、さすがにする事が大きい。

江戸市中は此の評判で持ち切つてしまひました。道庵の馬鹿囃子などは此の人気に比べるご、お月様に螢のやうなものでありました。道庵も少しばかり情氣で來ました。これは馬鹿囃子だけでは追付かない、何か外に一思案と思つてゐるうちに、大盡の屋敷の園遊會の當日となりました。江戸市中の見物は我も我もご押しかけて來ましたけれど、大盡の妾宅の門まで來て見ると急に二の足を踏んでしまひました。

それは園遊會も朝鮮芝居も無料で接待するものさばかり思つてゐたら、目玉の飛び出るほど高い塙代を徴集するのでありました。それで集まつたものが、あつご二の足を踏みました。

あれほど吹聴したり評判を立てさせたりしたのだから、無料で入れて無料で見せるのたらうと思つたら、目玉の飛び出るほどの塙代を取るごいふのだから、集まつて來た人が門の前で二の足を踏みました。

「馬鹿にしてやがら、大盡が如何したご云ふんたい、鱸八が如何したんたい」と云つて惡態をつくものもありました。併し其れは惡態をつく方が間違つてゐるのであります。

大盡だから云つて、この廣大な園遊會を開き、それから非常な高給を拂つて朝鮮役者を招くからには、その位の塙代を取るごは少しも無理はないのであります。無理はないのみならず、日本では、ほさんご見ることが出来ないご云はれた朝鮮芝居を、斯うして其儘持つて來て居ながらにして見せて呉れるごいふごは、並大抵の興行師などでは出来ない事でありました。それですから、見物は大盡の威勢ご恩恵ごに感涙を流して塙代を拂はなければならぬのであります。それを無料見ようなごいふのは如何にもささしい事でありました。

併し、江戸兒にも、さうささしいものはかりは有りませんでした。塙代が高いご云つて、後込をしてこの珍らしいものを見ないで歸るのは、たしかに江戸兒の估券に觸るご力み出すものが多くありました。江戸兒の腹を見られて朝鮮人に笑はれても詰まらねえご、國際的に氣前を見せる者もありました。それが爲に一旦、二の足を踏みかけた見物が、見す／＼目玉の飛び出るほど高い塙代を拂つて門の中へ入り込むご、人氣ごいふものはヲカしなもので、遂には我も／＼ご先を争つて切符を買うやうな景氣になつて門内へ雪崩込みます。

さすがに鱸八大盡のすることは、こんな些細な事までも違つたものであります。道庵などは貧乏人の辭に身錢を切つて馬鹿囃子を雇ひ、家業を其方のけにして騒いでゐるのに、大盡は大評判を立てた上にこんな事でも充分に算盤を取れるやうにするのだから、ごの道相撲にはなりません。併し、これは鱸八が豪いごいふよりも、お附の作者や狂言方の仕組が上手なので、それが



爲に一段と大盡の器量を上けたと云つた方がいゝのかも知れません。

この園遊會も餘興も朝鮮芝居も悉く大成功でありました。その日一日でおしまひといふわけではなく、當分の間、毎日つゞくのであります。市中一般に於ては、これを見なければ、話にならないから毎日々々續々詰めかけして來ました。日のべを打ては打つほど儲かつた上に評判が高いのでありますから、彌八の御機嫌も斜ではないし、お出入の人々も恐悦に感ずるし、作者や狂言方のお覺えも結構なものであります。

こゝに哀れをさぐめたのは道庵先生で、折角、園に當つた馬鹿囃子は、この園遊會と朝鮮芝居の爲に、すつかり壓れてしまひました。隣からは毎日々々、この景氣で見せつけられてゐるのに、もう馬鹿囃子でもなし、さうかよ云つて、それに對抗するには上野の山内でも借受けて和蘭芝居の一大座でも買ひ込んで來なければ追着かないのであります。それは先生の資力では、トテも追付かない事でありませぬ。

道庵は其れが爲に苦心慘澹しました。自分の智慧に餘つて、子分の者を呼び集めて評定を開いて見ましたけれど、いづれ、道庵の子分になる位のものだから、資力に於ても智慧袋に於ても、そんなに芳はしいものではありませんでした。

いよゝ大盡に打着かる手術が無ければ最後の段は、先生が口辭に云ふ毒を飲ませる事のみだが、口にこそ云ふけれど、此の先生は毒を飲ませて人を殺すやうな、そんな毒のある人間ではありませぬ。

せん。

## 二

こゝにまた前に見えた「貧窮組」の事に就て一言しなければならなくなりました。貧窮組といふのは一種の不得要領な暴動でありました。明治六年の出版にかゝる「近世紀聞」といふ本に、その時代の事を此んな風に書いてあります。

是より先、米價次第に沸騰して既に大阪市中にては小賣の白米一升に付代錢七百文に至れば其日稼の貧民等は又如何とも詮術なく殆ど飢餓に及はんとするにぞ九條村且つ難波村など所々に多人数寄集まり不穩の事を談合して始めは市中の搗米屋に至り低價に米を賣るべしとて僅の錢を投げ出し店に積みたる白米を理不盡に持行くもあり或は代價も置かずして俵を奪ひ去るものもなかりしが果はますゝ暴動募りて術よく米を渡さぬ家は打毀しなごする程に市街の騷擾大かたならず、這は只浪花のみならず諸國に斯る舉動ありしが、就中江戸に於ては米穀其他總ての物價又一層の高料に至れば貧人飢餓に耐へざるより或は五町七町ほどの賤民おのゝ黨を組んで身元かなりの商家に至り押し付けて救助を乞はんとて其町々に觸示し尙其の黨に加はらざれば金米その他何品にても救助の爲に出すべき旨強談に及ぶにぞ勢ひ已を得ざるより身分に應じ夫々

に物を出して施すもあり力及はぬ輩は餘儀なく黨に加はるをもて忽ち其の黨多人數に至り纏て何町貧窮人紙に書いたる蠅をおし立、或は車なんごを曳いて普く府下を横行なし所々にて救助を得たる所の米麥又は甘藷の類ひを件の車に積もて歸りて便宜の明地に大釜を据ゑ白粥を焚きなごするを貧民妻子を引連れ來りて之を争ひ食へる狀は宛然蠅の集まる如く蠅の群がるに異ならで哀れにも最淺間しかり、されは一町斯の如き舉動に及ぶを傳へ聞けば隣町忽ちこれに慣らひ遂に江戸中貧民の起り立たざる場所は少く……云々

これによつて見るに「近世紀聞」の記者は、貧窮組を蠅の集まる如く蠅の群がるに異ならずと見たのであります。貧民といへども人間であらうのに、其れを蠅や蠅と同じに見られたといふことは不幸であります。

けれども蠅や蠅に見立てられる貧民自身に取つては、必ずしも物好でやつた事ではないらしいのであります。彼等にあつては天下が徳川のものであらうと、薩長の手に渡らうと其んな事は大した心配ではありませんでした。たゞ心配な事は物が高くなつて食へなくなるといふ事でありました。

天下國家の大きな事を憂ふる人には、別に志士といふ一階級があつて、それは殿様から代々御扶持をいたゞいて、食うといふやうな賤しい事には別段の心配の無かつた者や、その家庭に生ひ立つた人が多いのであります。けれども此の貧窮組は生え抜きの平民でありました。武士は食はね

ご高楊枝といふやうな事を云つて居られぬ身分の者ばかりでありました。彼等は食ひたくて堪まらないのであります。世に食ひたくて堪まらないものが食へなくなるといふことほご怖るべき事實はないのであります。蠅や蠅でさへ生きてゐられる世の中に、人間が食へなくなつて生きてゐられないといふ世の中は無惨なものであります。

それが爲であつたか如何か知れないが、あの不得要領な貧窮組が勃發して江戸市中を騒がすに共に、有司も金持も不得要領に驚いてしまひました。殊に驚いたのは金持の連中でありました。一時は生きた空がなくて、金品を寄附したり慈善會のやうなものを起したりして、貧民の御機嫌を取らうとして見た狼狽方は可なり不得要領なものであります。けれども其れは誠意のある狼狽方ではなく不得要領はいよく以て不得要領な狼狽方でありました。

けれども其の時分の政治は打ては響くやうな政治ではありませんでした。徳川幕府が亡びかゝつた時代の政治でありました。

米が高くならうとも物價が上がらうとも幕府の方では、あんまり干渉をしませんでした。いよくの時まで成行に任せて置いて、何か出たら出た時の勝負といふやうな政治でありました。

金持の連中も亦、儲けたい奴は盛んに儲け、儲けた上に莫大の配當をしました。さうして大ビラで贅澤や僭上の限りを盡しました。蠅や蠅なんぞは踏みつぶして通る勢でしたけれども、その蠅や蠅が多數を組んで、あはれ出して見ると、唇の色を變へて周章狼狽した有様は滑稽にも亦不得

要領の現象でありました。

さすがに緩漫主義の幕府も、斯う騒ぎ出されて見ると、手を束ねてはかりは居られませんでした。同じ「近世紀聞」さいふ本のうちに、

其頃既に庄内藩には府下非常を誠めのため常に市中を巡邏あり且南北の町奉行にも這回の暴舉を鎮撫なさん自ら夥兵を従へつゝ普く市街を立廻りて適宜の處置に及はんとするに貧民は早や食うと食はぬの界に臨みたるなれば各死憤の勢ありて小吏等萬般説諭なせどもなかくに鎮まらず、或は淺草今戸町その外處々の辻々へ貧窮人等が張札をして區々の苦情を演べたるうへ、先づ差當り白米の代價百文に付五合ならねは窮民口を糊し難しと記し、また或は米穀は固より諸色の代價速かに引下ぐるにあらずんば忽ち市中を掃拂はんなど書裁なしたる所もあり、斯なして尙貧民等は市街を横行なせる事は目を追つて熾なりしが其頃品川宿に於て施行を出すを左右と拒みたる者ありさて忽ち其家を打毀せしより人氣いよ／＼荒立て溢りて物を出さぬ家は會釋もなく踏込で或は舖をうち毀し家内を亂暴に及ぶにぞ蓄財家は皆戰慄て家業を休み店を閉めて只亂暴の防ぎをなせば貧窮人のみ勢ひを得て道路に立て威を震ひしは實に未曾有の珍事なりけり……さる程に貧民の暴動斯くの如くなれば庄内侯の巡邏方且つ町奉行の手を以て其の頭人なる者を追々捕縛なしたりしかど、もこれ、米價の沸騰より飢餓に逼るに耐へかねて、かゝる暴動に及べるなれば兎に角是等を救助せずして靜まるべきの筋にあらずさて、先づ救民

小屋造立の間、本所回向院、谷中天王寺、音羽護國寺、三田功運寺、澁谷澁谷寺の五ヶ寺に於て炊出しを命ぜられ普く貧民に之を與へ其うち神田佐久間町の廣場に小屋を設けられて至極の貧人を救助せしかは是にて府下の騒擾も稍鎮靜に及びたり。

幸にして此の貧窮組は、それだけの騒ぎで鎮まりました。大鹽平八郎も出ないし、レニン、トキキも出ないで納まりました。たま／＼道庵先生あたりが飛び出してお茶番を差加へたやうな事で、兎も角も納まったのは國家の爲に大慶でありました。

表面、この騒ぎは納まったけれども、その根本が絶たれたといふわけではありません。一時は震へ上つた富豪達が、あわてふために貧民の御機嫌を取つて見たけれども、表面の暴動が過ぎ去つてしまへば、あさはケロリとして忘れたものゝやうに、書畫骨董に馬鹿けた金を出したり、巫山戯きつた集まりをして見せたり、無用の建築をして見せたり、そんな事で以前よりは一層の太平樂を露骨に見せるやうになつたのは困つたものであります。

それと共に、一時の雷同に出でないで、心ひそかに此の世の有様を観察し或は憤慨してゐる者が漸く多くなつて行きました。

本町一丁目の自身番へ、眼の色を變へて飛び込んだのは、いつも粗忽かしい下駄屋の親父であります。

「大變だ」

さ云つて其の親爺は息を切りました。この男の粗忽かしいのは今に初まつた事ではないけれど、今日は眼の色が變つてゐるだけに、それから貧窮組の騒ぎが納まつて間もない時であるだけに、其處に集る親爺連の胸を騒がせて、

「如何なすつた」

種彦の合巻物を読んでゐた親爺も、碁と將棊をちやんぼんにやつてゐた親爺も、その岡目をしめてゐた親爺も、晝寝をしてゐた親爺も其處に集る親爺といふ親爺が、皆んな下駄屋の親爺の大變たといふ一聲で驚かされました。

一體こゝへ集る親爺連は可なりいゝ氣なものでありました。外は往來の劇しい本町の真中で、内は閑々たる別天地、半鐘がジャンと打つからな限りは他人の來る氣遣ひはない處で、これ等の親爺連の心配になることは、夕飯を蕎麥にしようか、それとも鰻飯まで奮發しようかといふやうな心配でありました。鰻の序に酒の隠れ呑もしなければならぬといふやうな心配でありました。その閑々たる空氣を下駄屋の親爺が破つて云ふ事には、

「外へ出て御覽なさい、大變な物だ、その雨樋筒に生首が一つ……」

「H」

「嘘だ〜」

「冗戯じやねえ、善兵衛さん、貧窮組が納まつて間も無え時だ、嚇かしつこなし」

「生首は嘘だが、まあ外へ出てごらんない、大變な張紙だ」

「エ、張紙」

張紙を聞いてやゝ安心をしました。やゝ安心したけれど、それは生首を聞いた時よりも安心したので、此の時分の張紙は、生首を聞くのさ、ほど同じやうに氣味の悪いものでありました。親爺連は折角の興を殺がれたけれど、また別の興味を持つて外へ出たり、外を覗いたりして見ると、其の自身番の北手の雨樋筒に大きな張紙があつて、其れを通りが、りの人が大勢して讀んで、ワイ〜騒いでゐるのであります。

「また、此んな悪戯をはじめやがつた、人騒がせな悪戯だ」

さ自身番の親爺はブツ〜云ひながら其の張紙を引べがしにかゝりました。自分も讀まないうち、人にも讀ませないうちに成るべく早く引べがして町奉行にお届けをする方がよいと思つて、邪慳に其れを引べがして自身番の中へ持ち込んでしまつたから、見物の中には一讀したのもあらうし、また讀みかけて半のものもあつたらうし、これから讀まうと思つてゐた者もあつたのが、一同高に物を渡はれたやうな氣持になつて、自身番へ持込んだ親爺連の後を恨めしげに見送つてゐること暫時、幸に大した騒ぎにはならず散つてしまひました。

自身番の内部へ其の張紙を持ち込んだ親爺連、額を集めて眼の敵のやうに其れを讀みはじめまし

た。其の文言は斯うであります。

五五二

總會所取立所

三井八郎右衛門

其外組合の者共

此者共、めい／＼世界中名高き巨萬の分限にありながら、足ることを知らず、強慾非道限り無き者共、身の程を顧みず報國は成らずとも、皇國の疲勞に相成らざるやう心掛くべき所、開港以來諸品高價のうちには、絲類は未曾有の沸騰に乗じ、諸國絲商人共へ相場狀にて相進め、類りに横濱表へ積出させ候につき、絲類悉く拂底高値に成り行き萬民の難澁少からず、畢竟此の者共、荷高に應じ、廣大の口錢を食り取り候慾情より事起り、皇國の疲勞を引出し、一己の利に迷ひ、他の難澁を顧みず、不直の所業は瀬家へ立入り賄賂を以て奸吏を暗まし、公邊を取拵へ、口錢と名付け、大利を食り、奸吏へ金錢を差送り、絲荷を我が得手勝手に取扱ひ、神奈川關門番人並に積問屋共へ申合せ、所謂世話料受取り、荷物運送まで荷主に拘はらず自儘取扱ひ、不正の口錢食り取候事、右絲會所取立三井八郎右衛門始め組合の者他の難儀を顧みず、非道にて所持の金錢並に開港以來食り取る口錢廣大の金高につき、今般殘らず下賤困窮人共に合力の爲配當つかはし申すべし、若し慾情に迷ひ其儘捨て置かは組合の者共一々烈風の折柄天火を以て降らし、風上より煽立て申すべく、其節に至り隣町の者共火災差起り難澁に之れ有るべ

く候間前記會所組合の者共名前取調べ置き、類焼の者は普請金並に諸入用共存分に右の者より請取申すべく且火災差起り候は、困窮の者共、早速駆付彼等貯へ置き候非道の財寶勝手次第持ち去り申すべく、右の趣前以て示し置き候間、一同疑念致すまじき事。これだけの事を自身番の親爺のうちでも、讀むことの達者な眼鏡屋の隠居がスラ／＼と節をつけて讀み立てました。

下駄屋の親爺は面白さうに聞いてゐました。質屋の隠居は不安心らしい面をして聞いて居ました。

「何しろ、事が穩かぞわせんな」

と質屋の隠居は、いさ／＼不安心の色を深くしました。

「は、は、は、三井さんも、いよ／＼やられますかな」

下駄屋の親爺は、やはり面白半分には深くは問題にしてゐないらしくあります。

「ナニ、やる奴に限つて先觸は致しませんな、たゞほんのイタツラでございますよ、嚇かしに過ぎませんよ」

腰ころんで種彦を讀んでゐた親爺が、や、違くから言出ししました。

「さうも云へませんぜ、人氣のものですからワーツと騒ぐと、何をやり出すか知れたものではござんせん、本所の相生町の箱惣なんぞが其れでございませうからな、首を刺されて兩國橋へ驅されて、やつぱり此の通りの張札をされたんでございませうからな」

五五三

眼鏡屋の隠居は其れに答へました。

「あゝ、鶴龜、鶴龜、其んな話は御免だ」

と質屋の隠居は氣を悪くしたと見えて、煙草入を腰に挟んで立ち上りました。折角今まで恭を打つてゐたのに、それを早々逃げ腰になつた處を見れば、この親爺連のうちでは、質屋の隠居が一番弱蟲であることがわかります。

質屋の隠居が逃げ出したあとで、人々の噂によれば此の隠居も、實は張札の縁では組合に入つて大分儲けてゐる側たこの事でありました。この次に來たら嚇かして奢らしてやらすはなるまいな

んぞと、後に残つた親爺連はいろ／＼評定してゐました。

新様な張札は此の頃の流行り物とした處で此れは餘り物騒過ぎる、このまゝでは捨て、置けないから自身番の親爺連は、これを町奉行の手へ届ける事に評定を定めて、二三人の總代が其れを持つて表へ出ました。

表へ出た處へ、折よく町奉行の手に屬する見廻りの役人が此の自身番へやつて來ました。それを幸に總代は、

「實は斯様な次第でございまして斯様な張札が……」

役人は其れを聞いて見て一通り讀んで後、

「この筆蹟は……」

さ首を傾けました。

その張札を町奉行へ持つて來て、その筆蹟を彼此と評議をして見た處が、それが道庵の文字に似てゐるさいふことが至極迷惑な事でありました。

長者町の名物としての道庵は、貧窮組と聞いて、喜んで演説までしたけれども、それは至極穩健な演説で、貧窮組にも同情を寄せるし、物持連中にも成るべく怪我をさせないやうにこの苦心をしたものでありました。

道庵は此んな張札をする人物でないさいふ事はお上の役人にも、よくわかつてゐるけれど、其れにしても此の筆蹟が道庵ソツクリの筆蹟でありました。これはイタツラ者が、わざと道庵の筆蹟を真似て書いて、あさを晦まさうとした手段であることは明かたけれど、それが爲に善い迷惑を蒙つたのは道庵先生であります。殊に此の頃は龜八大盡と桶を突き合つてゐる時でもあるし、よし、これは道庵が書かないにしても、道庵に知合のもの、道庵の許へ出入する者の仕業ではないか、と、目を着けられるやうになつたのが可哀相であります。

### 三

甲斐の國の八幡村の水車小屋附近で若い村の娘が慘殺されて村を騒がした後、小泉家には机籠之助もお銀様も其の姿を見ることが出来なくなりました。

二人は何處へ行つたか、その入つて来た時と同じやうに、此の家を去つたのも、誰も知るものはありませんでした。これを想像するに或は一旦、甲府へ歸つて、また神尾主膳の下屋敷にでも隠れるやうになつたものかも知れません。或はまたお銀様の望み通りに、江戸へ向けて姿を晦ましたものかも知れません。兎に角、八幡村には、この二人の姿は見えないのであります。

或人は、また夜陰、小泉家から出た二挺の駕籠が、惠林寺まで入つたといふことを見届けたといふものもありました。併し、小泉家と惠林寺とは、常に往来することの珍らしからぬ間柄でありましたから、それを怪しむ心を以て見届けたのではありません。

駒井能登守去つて以来の甲府は神尾主膳の得意の時となりました。けれども其得意はあまり寝ざめのよい得意ではありませんでした。心ある人は主膳の得意を爪弾きしてゐました。主膳自らも、この頃は、酒に耽ることが一層甚たしくなつて、酒亂の度も追々嵩じて來るのであります。酒亂の後には二日も三日も病氣になつて寝るやうなことがあります。

主膳は執念深くも、能登守がお君といふ女をこの様に處分するかを注目し、手討にしたといふ評判を聞いた後も其の注目をゆるめることなく、その後向嶽寺に見慣れぬ尼が送り届けられてゐるといふことを聞いて、途中で其の女を奪ひ取らせようと思つてお松が神尾の屋敷を脱け出したのは其の間の事でありました。向嶽寺から出た乗物を奪はせよう

と計つた事が散々の失敗に終つたといふ報告も同時に齎されたが、それと聞いて何とも云はずに

苦笑ひして、寢込んでしまつたのも其の時分の事です。

甲府城内の暗闘とか勢力争ひとかいふ事は其れで一段落になりました。

別家にゐるお絹といふ女に取つても、此の頃は同様に荒んだ有様が歴々に見えます。出入の誰彼との間に、色々良くない噂が口の上るやうになりました。或ひは當主の主膳と此のお絹との間柄をさへ疑ふものが出て來るやうになりました。

其れ等の不快や不安を紛らはず爲か如何か知らないが、神尾を中心として酒宴を催される事が多くなり、お絹も亦、その別家へ人を招いては騒々しい興に夜の更くることを忘れるやうな事が多くありました。それから勝負事は一層烈しくなり、お絹までが勝負事に血道を上げるやうになつてしまひました。

此の頃のお絹は自宅へ男女の客を招いては勝負事に浮身をやつしてゐます。

或時は思ひがけない大金を儲ける事もありました。或時は大切の頭飾りなどを投げ出すやうな事もありました。

興が盡きて客が去つたあとでは、何たか堪らないほどの淋しさを感ずるやうになりました。その淋しさを消す爲に冷酒を煽るやうな事もありました。遂には毎夜冷酒を煽らなければ寝つかれないやうになつてしまひました。

お松がゐれば此れほどにはならなかつたものであります。お絹は兎も角もお松を保護してゐまし

た。お松も亦何のそ云つても思入として其の人に忠實でありました。たからお松があることによつて、何ごなしに前途に希望を持つてゐましたけれど、其のお松が逃けてしまつて見ると、頼む木蔭の神尾の當主といふのは、此の通りの人物であるし、自分は年漸く更けて容色は日にく凋落して行くし、さうか云つて、頼るべき親類も、力にすべき子供もないのであります。それを考へると前途は絶望あるのみでありました。足許の明るいうち、また故郷の濱松に舞ひ戻らう、お絹は斯うも思慮を定めました。併し故郷へ引込むには引込むやうにしなければならぬと思ひました。先立つものは金であります。その金が全く思ふやうにならぬ時分に、こんな思慮を定めた事は不幸であります。

「金が欲しい、お金が欲しい」

お絹は痛切に其の事を考へました。それがお絹をして一層勝負事に焼けつくやうにさせてしまひました。

處が其んな場合に於ける勝負運は皮肉なもので、勝ちたいと思へば思ふほど負け、焦せれば焦せほど喰ひ違つて行くのであります。お絹は身の廻りの、ほさんと總ての物を失つてしまひました。借りるだけの信用のある金は借り盡してしまひました。

今夜も、お絹は堪らなくなつて、隠して置いた冷酒を茶碗に注いで飲まうとする時に、本邸の方で大きな聲で罵るのが聞えます。

それは紛れもなき主人の神尾主膳が酒亂の爲に人を罵つて居るのであります。それを聞きながら、お絹は、また一杯の冷酒を茶碗に注いで口の處へ持つて行つたけれど、其れは苦いものゝやうでありました。

「お絹殿、お絹殿」

呂律も廻らない聲でお絹の名を呼びながら、庭下駄を穿いて此方へ來るらしいのは正しく酒亂の神尾主膳の聲であります。

此の頃では神尾が酒亂になつた時には、誰も皆逃げてしまひます。誰も相手にしないで罵るだけ罵らせ、荒はれるだけ荒はれさせて、その醒める時まで抛つて置くのであります。

相手のない酒亂に拍子抜けのしたらしい神尾主膳は、何を思ひついたか、お絹の住む別宅の方へ押しかけて來るらしいのであります。其の聲を聞くとお絹は浅ましさに身を震はせました。

幸にして神尾主膳は境の木戸を開かうとして、其の錠の殿しいのに飽んだものか、取り止めなき言葉を吐き散らした上に引き上げてしまつたものゝ様でありました。

お絹はホツ息を吐きましたけれど、苦悶の色が面に滿ち渡るのを隠すことが出来ません。

#### 四

氣の毒なのは駒井能登守であります。江戸の本邸に着いたまでは、兎も角も其の格式で歸りまし



江戸へ着いてから幾何もなくして其の姿をさへ認められたものはありません。番町の本邸は續されて朽ちかゝつたけれど、新しい主を迎へる模様は見えませんでした。

此れより先き、病氣であつた夫人は親戚の手に奪ふが如く引き取られてしまつたといふ事です。家來の者は四分五裂です。

主人の能登守は自殺したといふ噂もあるし、遠國へ預けられたといふ噂もありましたが、たゞ其の噂だけで誰も一向に其の消息を知つた者はありません。

餘りさいへは此れは脆い話であります。器量さいひ學問さいひ、殊に砲術にかけて並ぶ者がないといふはれた人であります。未來の若年寄から老中を以て望みをかけられたほどの若い人才が、ほんの一人の女の爲に身を誤つたといふは惜しみても餘りあることでもあります。失敗や蹉跌は男子の一生に無いことではありません。事によつては其れが却つて後日大成を爲す苦き経験であることさ少くはありません。

けれども能登守の此の度の失敗ばかりは到底取り返すことの出来ない失敗であります。能登守といふものは此れで全然社會から葬られてしまつた結果になりました。能登守自身が葬られてしまつたのみならず、遠くは其の祖先の名も、近くは其の親類の名も、これによつて泥土に汚されたと同じやうな結果になつてしまひました。

一死よりも名譽を重んじ、一命よりも門地を尙ぶ習慣の空氣に生立ちながら、見す／＼斯ういふ亦を仕出かした能登守には魔が附いたと見るより外はないのであります。それほどの馬鹿でも無かつた筈の人が、これより上の恥辱は無いほどの恥辱を以て生きながら葬られたことは、人事ながら淺ましさに堪へられないほどの事でもあります。

それでありながら立派に腹も切れないとは、よく／＼腰が抜けたものたゞ憤慨する人や、こゝで腹を切つたら其れこそ恥の上の恥の上塗りたご冷笑する者や、それ等の空氣の間で、駒井家は見事に没落して、其の空屋敷の前を通りかゝつた者でもなければ、もう噂をいふ人も無いといふ時分になつてしまひました。

その時分に王子の瀧の川の碓兵衛といふ水車小舎の附近へ公儀から役人が出向いて繩張りをはじまりました。何か目的あつて此の土地へ建前をするものゝやうに見受けられました。殊に其れは川に沿うて水の流れを利用するらしい計畫であります。

土地の人も、最初は何の目的の繩張りであるかを知りませんでした。程なく同地の扇屋を旅館として身分ある公儀の役人が詰めた時に、其の繩張の計畫が可なり重大なものであることを悟りました。其處へ来た役人の重なる者は澤太郎左衛門と武田斐三郎とでありました。この二人は幕府の其の方面に於て輕からぬ地位の人でありました。扇屋へ招かれた大工の伊三郎たの爲の萬藏たのさいふ者の口から聞くさ、此の度のお繩張りは瀧の川附近へ公儀で火藥の製造所をお建てにな

る御目論見から出たものたさいふころがわかつて来ました。

この火薬の製造所は、従来の火薬の製造とは違つて、日本に於て初めての西洋式の火薬の製造所を建てるさいふころなのであります。その計畫は小栗上野介と武田斐三郎との兩人の企て、澤太郎左衛門が其れに参加したのは、やゝ後の事になります。

斯うなつて来ると思ひ出されるのは、それにもう一枚、駒井能登守さいふ事ではありますが、惜い哉、折角の人材も烏有のうちに葬られてゐます。

この日本で初めての西洋式の火薬の製造所の工事は着々進んで行きました。

最初に縄張りをした甚兵衛水車の附近が水量が不足たからさいふ理由で三ツ又の方へ持つて行かれました。

工事の頭取には武田斐三郎、それを助けるのは御鐵砲玉薬下奉行の小林祐三、外に俗事役が三人と、其の頃算術と舎密學に通じてゐた貝塚道次郎さいふものが手傳ひに出動することゝなりました。

注文の火薬製造機械は和蘭のアムステルダムから帆船前船に積み込まれたさいふ通知もありました。

頭取をはじめ役人達は扇屋を宿と定めてゐたけれど、工事の場所には作事小屋があつて、其處に絶えず宿直をしてゐる役人らしい者があります。

その小屋の一室へは武田斐三郎や貝塚道次郎等が出入するのみで、他に何人も出入することを許されませんでした。それは、人に知られてはならない火薬上の秘密や機械類の組立をする處であらうと、俗事役の者や土方人夫などは、敢て其に近寄らうとはしませんでした。

この秘密室は夜になると嚴重に錠が下ろされてしまひます。工事の見守りをする夜番の小屋は其處よりズツと隔つた處にあるから、たゞ時々其の邊を廻つて火の用心をする位に過ぎませんでした。この火薬の製造所を計畫した小栗上野介は一流の人傑で、幕府に於ての主戦論者の第一人でありました。勘定奉行にして陸海軍奉行を兼ね、勝も大久保も皆其の配下に働いたものであります。この火薬の製造所でも、西の方に起る大きな新勢力に對する用意の一つであることは申すまでもありません。王政維新を叫ぶ西の方の諸藩の人に取つて、此の火薬製造所の計畫が尋常のものとして見過ごされないのであることは當然であります。

この工事に入つてゐる土方や人足にも相當の吟味をして入れなければならぬ筈なのが、如何したものか、少くとも、たつた一人だけ種かでない人足を入れてあることは、役人達の大きな手落ち云はうか、それとも其の一人が變装と素性を隠すことの巧な爲と云はうか、兎に角、其の土を擔いたり、石を運んだりする人足のうちに、氣を付けて見れば、其れと氣のつけらるべき男が一人あります。

それは甲府の破獄以來の事を知つたものには指して云ひさへすれば直ぐにわかる事なので、あの

時、牢屋を破つた主謀者、後には偶然駒井能登守邸に隠まはれた奇異なる武士、また甲州街道では馬を曳いてが、りきを追ひ飛ばした馬子、こゝでは土を擔いたり石を運んだり様々に變幻出沒するけれど、要するに同一の人で、あの時南條といはれて通つた浪士らしい男であります。

繩張外に立てられた土方部屋を夜中に密に抜け出して手拭をかぶりつゝ、作事小屋の方へ忍んで行くのも其の人であります。何處へ何の目的あつて行くのかと思へば、柵を乗り越えて作事小屋の中へ足を踏み込みました。

工事の頭取と公儀の重役とが秘密に會議をする作事小屋の入室——そこを目ざして此假裝の労働者は忍んで行くものゝ如くであります。この男が秘密室を探らうとするのは、今夜に始まつた事ではないのであります。

毎夜のやうに其の邊を探らうとして忍ぶものらしいが、いつも其の目的を達せずして歸るものゝやうであります。今宵も亦其の通りで空しく工夫部屋まで引き返したのは、やはり例の秘密室の構造が嚴重なのか、或は中にある人の用心が周到なので近寄れなかつたものと見えます。

さうしてあるうちに此の火薬製造所の工事は進んで行くのであります。右の南條と覺しき奇異なる労働者は相變らず毎日石を運んだり土を荷つたりして、他の労働者と同じことに働いてゐるのであります。

硝石の精製所も出來ました。硫黄の蒸溜所も出來上りました。機械類の磨き方は職師の川崎長

門と國友松造といふ者が來て引受けました。水壓器の組立も出來ました。

その都度、右の労働者は、役人や仲間のものゝ氣のつかないうちに家の建前と機械類の構造を注意することは驚くべき熱心さでありました。熱心でさうして機敏でありました。人に氣取られやうとする時は、何かに紛らわして、何食はぬ面をしてゐる濟まし方などは、其のつもりで見れば驚くべき巧妙さでありました。

夜になつて人の寢靜つた時分には、それ等の見取圖を頭の中から吐き出して紙に寫してゐることも、誰にも知られないで進んで行きました。紙に寫した見取圖は工夫部屋の下を掘つて埋めて置くことも、誰にも見つけられないで納まつて行きました。叩いて置いてから割つ返り疑問の秘密室の方へ出かけるけれども、其處ばかりは如何しても近寄るゝが出來ないらしくあります。この奇異なる近寄る事が出來ても、内部の様子は如何しても知ることが出來ないらしくあります。この奇異なる労働者が知らうとして知ることの出來ないのは、たゞ右の秘密室の内部ばかりであるやうです。併し乍ら長い間、間斷なく心がけてゐれば、遂には何物かを得られる機會があるものです。今宵も例の通り秘密室の柵の外まで忍んで水邊の立木の下に、そつと忍んで考へてゐると、その柵の一部分の戸が開きました。

打ち見た處は高い柵であつたけれど、その下の一部が開き戸になつてゐて、内から押せば開くものたといふ事は今まで氣が着きませんでした。

南條と云はれた奇異なる労働者は、さてこそ闇の中に眼を見張りました。この人は永らく獄中の経験があつた爲に暗い處で物を視るの力が人並以上なのであります。

そこに南條が隠れて容子を見張つてゐるといふことを知らないらしい中なる人は、戸を開けると、スツクと外へ身を現はしました。

それを一目見た時に南條は直に見覚えのある人だといふ事がわかりました。また年若き侍體の者であることは誰が見てもわかる事でしたけれど、その若い侍體の人柄に見覚えがあることから、南條は疑と立つて動きませんでした。

この人の外へ出るに、開き戸が内から閉ざされてしまつた事を見ると、内にも慥に人がゐることに違ひないのであります。

内から出た人は小橋を渡つて木立の深みへ身を隠しました。この人を遣り過ぎて申なる秘密室の構造に當つて見ようか、それとも此の人のあそをつけて、其の行先を突留めようかと奇異なる労働者は思案をするものゝやうでありましたが、其の思案は後の方のものに止まつたらしく、出て行く人のあそをつけて、木立の深みへ入りました。人影は榊現の社の方を目ざして歩みを運ぶものゝやうであります。

「其處へ行くのは宇津木ではないか」

火薬の製造所をや、離れてから後に呼ぶ聲を聞いて、前に進んで行つた若い侍體の人はハタと歩

みを止めました。

「誰ぢや」

闇の中から透して後を顧みた處へ、

「おれた、南條だ」

と云つて慣々しく近寄つて來たので、

「お」

と云つて前なる人は驚きと安心とで立つて待つてゐました。呼ばれた通りこれは宇津木兵馬でありました。

「久し振だつた、久しぶりにまた妙な處で會つたものだ」

目の前に立つたのは、甲府の牢内にある時と、その牢を破つてから後も苦樂を共にした奇異なる武士の南條でありましたから、

「これは南條殿、全く珍しい處で、如何してまた此の夜中に、その身なりで」

「それよりも宇津木、君こそ此の夜中に何處へ行つたのぢや」

「ツイ其處まで」

「ツイ其處とは」

「近い處に知り人があつて」

「近い處は」

「それは、あの」

「いや、隠すには及ばない、君が今、あの火薬の製造所から出て来た處を見かけて拙者は後をつけて来たのだ」

「エ、それでは見つかったか、併し、餘人ならぬ貴殿に見つけられたのは心配にならぬ」

「一體、あの火薬の製造所の秘密らしい研究室に隠れてゐるのは彼は誰ぢや」

「南條殿、貴殿はあの人か誰であるかをまた御存知ないのか」

「知らん」

「それほど鋭いお目を持ちながら、さは云へ、誰にも知られぬが道理、實は外から出入する者は拙者の外に無いのでござる」

「うむ、さうであらう、おれも長らくあの邊に、うろついてゐるが、ツイそ其の人を見た事が無い」

「判つて見れば何でも無い事、あれはな、甲府に居られた駒井能登守殿ぢや」

「エ、駒井甚三郎か、それは知らなんだ、成程、駒井か、駒井ならば彼處に隠れてゐさうな人ぢや、これで萬事がよく飲み込める、さうか」

南條は態度も頷きました。

「今も能登守の話に貴殿の噂が出た處、貴殿ならば、隠れて居られる能登守殿も喜んで會はれる事と思ふ」

「會つて見たい、さう聞いては今夜にも會つて見たい」

## 五

權現社頭から歸つて来たのは駒井能登守であります。今は能登守でもなければ勤番の支配でもありません。一個の士人としては到底世の中に立てなくなつた日影者の甚三郎であります。

例の瀧の川の火薬製造所の秘密室までは無事に歸つて来て、眞暗な室内の卓子の上を探つて、その一端を押すと室内がバツと明るくなりました。

頭巾を取つて椅子に腰を卸した能登守を見ると、姿も形も大分前とは變つてゐる事がわかります。先づ其の髪の毛を、當時異國人のするやうに散髪にして、真中より少し左へよつた處で綺麗に分けてありました。それから後の襟へかゝつた處まで長く撫で下ろした髪の毛の末端を鍔を當てたものかのやうに軽く捲き上げてゐました。身につけてゐるのも筒袖の着物と羽織に太い洋袴を穿いてゐました。

此の人としては斯ういふ形をする事も有りさうな事だけれど、其の當時にあつては破天荒なハイカラ姿でありました。この姿をして浮かり市中を歩いて、例の攘夷黨の志士にでも見つからうも

のならば買國奴のやうに罵られて其の長い刀の血祭に會ふことは眼に見えるやうなものでありません。幸な事に、この人は此處に引籠つてゐるから、此の急進的なハイカラ姿を何者にも見つからないで済むのでありませう。

能登守——と云はず、これからは駒井甚三郎と呼ぶ、は今椅子へ腰を卸ろすと共に額に滲む汗を拭いてホツ息を吐いて空しく天井をながめてゐました。

この室内の模様は、前は甲府の邸内にあつた時と、ほゞ同じやうな書物と武器と、それから別に、洋式の機械類と藥品等で充満してゐました。

吐息をついた駒井甚三郎は、やがて兩の手を面に當て卓上に臂をついて俯伏してゐました。それからまた身を起し脇掛に片腕を置いて凝む前の卓上をながめてゐる前には、長さ二尺に幅四寸ほどの小形の蒸汽船の模型が一つ置いてあります。

駒井甚三郎は、その蒸汽船の模型からしほしも眼は放さずに、手はペンを取つて頻りに角度のやうなものを幾つも書いてゐるのであります。この人は今出向いて行つた事の爲に、何か氣に鬱屈があつて斯うしてゐるのかと思へば、さうではなくて、この小型の蒸汽船の模型とそれを見ながら、幾つも幾つも線と劃を引張ることに一心不亂であるものらしく見えます。それに漸く打ち込んで行くに、急に洋式の算術らしいことを始め、次に日本の算盤を取つて幾度か計算を試み、それから細長い形の黒い玉を取つては秤臺の上へ載せ、それを幾つも幾つも繰返して其の度毎に目

方を記入してゐるやうでありました。

この時分、夜は漸く更けて行つて水車の萬力の音もやんでしまひ、空は大へんに曇つて雨か風かど氣遣はれるやうな氣候になつて來たことも、内にあつて一心に是れ等の計算に耽つてゐる駒井甚三郎には一向感じが無いらしくあります。

風が出たなと思つた時分に、駒井甚三郎は不圖戸の外を叩く物の音のある事に氣が着きました。

宇津木兵馬がまた訪ねて來たなと思つて甚三郎は立つて戸を開けにかゝりました。けれども其れは宇津木兵馬ではなくて見馴れぬ労働者風の男でありましたから、

「誰じゃ」

甚三郎は拳銃をさぐつて用心しました。

「拙者だ、南條だ」

駒井甚三郎は、その一言で了解する事が出來ました。

程なく駒井甚三郎と南條なにかしと云ふ奇異なる労働者と二人は前の室内で椅子によつて對座する事となりました。

その以前には、矢張、不意に此の男が甲府の駒井能登守の邸を夜中に驚かした事がありました。

その時は其れと知らずして驚かしたものでありました。今は其れと知つて訪ねて來たものらしい事です。

能登守の屋采も其の時は變つてゐるが、南條の屋采もや、變つてゐます。

五七二

「何をしてゐた」

と駒井甚三郎が尋ねました。

「此處の工事の人足を働いてゐる」

南條が答へます。

「それは知らなかつた」

「此方も知らなかつた」

「如何して拙者が此處にゐる事がわかつたか」

「宇津木兵馬から聞いた」

「成程——」

南條は室内を一通り見渡したが、例の小型の蒸気船の模型を認めて

「此れは——」

と云つて特に熱心に其の船の形を見つめてゐました。

「此れは拙者が工夫中のカノネール、ポートぢや、随分苦心してゐる」

「成程」

南條は面をつきつけるやうにして、其の小形の蒸気船の模型を前後左右からつくつくとながめ入

ります。其の熱心さが設計者の駒井甚三郎にとつては、何物よりも満足に思ふ所らしく、

「よく見て呉れ、そして批評をして呉れ、長さは廿間で幅は四間になる。船の構造は先づ自分ながら申分はない積りだ、機關の装置も多少は研究し、速力も巡陽回天あたりよりも一段とすぐれたものになるつもりぢや、併し、今問題にしてゐるのは其れに載せる大砲よ、成るべく大口徑にして遠距離に達するやうに苦心してゐる、それと大砲を据ゑ付くる場所ぢや、此處のブーフに装置するが最も宜からうと思はれる、船體の釣合上大砲が大き過ぎても困る、と云つて従來の例を追うのも愚な事、火薬と瓦斯の抵抗がドノ位まで全體の平均に及ぼすか、それを實地に計つて見たいと苦心してゐる」

駒井甚三郎は、こんな風に説明しながら、今秤臺にかけてゐた細長い形の宜い玉を取つて卓子の上から南條の方に突き出しました。

「成程」

南條は其の船體を見るこそが、いよく熱心でありました。

「如何も斯うして調べて實地に當つて見れば見るほど、我ながら智識の足りない事と経験の浅いところが残念で堪らぬ、だから拙者は思ひ切つて洋行して見ようと思つてゐるのぢや」

駒井甚三郎が斯う云ふと、小型の蒸気船の模型を見てゐた南條が急に駒井の面を見て、

「ナニ洋行？」

き云ひました。

「其の決心をしました」

「それは悪い事ではない、君の學問と才力を以て洋行して來れば其れこれ鬼に金棒じや」

「書物と又聞では齒痒くてならぬ、それに彼地から渡つて來る機械さても、果して其れが本當に新式のものであるやら無いやらわからぬ、彼地では最早時代遅れの機械が日本へ廻つて珍重がられる事も随分あるやうじや、この頃、少しはかり火藥の製造機械を調べてみるけれど、思ふやうに感心が出来ぬ、何を扱置いても洋行したい心が募つて靜止として居れぬ」

「大に行くが宜い」

「白耳議のウエツテレンと云ふ處に、最良の火藥機械の製造所があるといふ事じや、その工場を是非見て來たいものたさ思つてゐる、併し、それは他國の者には見せぬと云ふ事じや、己むを得ずんは職工になつて……君のやうに労働者の風をして忍んで見て來たいと思つてゐる」

「君は拙者と違つて美い男だから労働者にするは可哀相ぢや、併しそれだけの勇氣のあることば頼もしい、そして何時出かけるつもりじや」

「來月の半に下田を出る佛蘭西の船があるから其れに便乗する事に頼んで置いた、それで此の頭もこしらへてしまつてゐる」

「一人で行くのか」

「從者を一人つれて行く、その外には今の處件さいふものは無い」

「おれも一緒に行きたいな、羨ましい心持がするわい」と南條は笑ひました。

「君が一緒に行つて呉れ、は拙者も甚だ心強けれぞ、それが知れたら其れこそ第二の吉田松陰じや」

「それでは諦めて君の歸りと土産を待つてゐよう、併し、君が歸つて來る時分には日本の舞臺も如何變つてゐるかわからん、君の土産が江戸幕府のものにならないで或は其つくり我々が頂戴するやうになるかも知れん」

「其んな事はあるまい」

駒井甚三郎は微笑してゐました。

この二人は前に云つたやうに高島四郎太夫の門下に學んだ頃からの昵魂でありました。その故に地位たの勢力たのさいふものは頓着なしに、いつも會へは斯うして友達と同じやうな話をするのであります。

「思ひ切の宜いには感心する、我々は西洋の學問と技術はエライと思ふけれど頭まで、さうする氣にはなれぬ」

さ云つて南條は此時はじめてらしく駒井甚三郎の刈り分けた佛蘭西式の頭髪をながめました。



「一思ひに斯うしてしまつた洋式の蓮生坊かな」

甚三郎は靜かに艶やかな髪の毛の分目を額際から左へ撫でました。

「でも髷を切り落す時は、多少は心細い思ひがしたらうな」

「何の……」

「さうた、駒井君」

南條は此の時になつて、一つの要件を思ひ當つたらしく、

「君は一人で洋行するさうだけれど、君の周圍に當然起るべき様々の故障に就いて善後の處置が講じてあるのか、一身を避ければ萬事が納まるものと考へてゐるわけでも無からう」

## 六

南條と別れた宇津木兵馬は王子の扇屋へ歸つて來ました。扇屋の間には先程から兵馬の歸りを待ち兼ねる人があります。

一旦尼の姿をしてゐたお君は此處へ來ては、やはり艶やかな髪の毛を片はづしに結うて、輪子の着物を着てゐました。兵馬は刀をさつて其の前に坐り、

「またお寢みにはなりませんでしたか」

「お前様のお歸りを待つて居りました」

「其れほどに御執心故、よいお返事を聞かせてお上げ申したいが……」

兵馬の言葉が濁つて其の容子が萎れるのを見たお君の面色に不安があります。

「残念ながら、最早、この御縁はお諦めなさるより外はござらぬ」

と云ひながら兵馬は懷中から袋入の物と帛紗包みを取ら出して、

「これが、能登守殿より御身へお言葉の代り」

其の品をお君の眼の前へ置きました。その袋入の物は短刀であり帛紗包みは金子であることが一目見てわかります。

「わたくしは其様なものを戴きに上つたのではござりませぬ」

お君が恨めしさうに其の二品をながめてゐましたが、其の眼には涙が一杯であります。

「兎も角も」

と云つて兵馬は其の二品を前へ出したきりで腕を組んでゐました。兵馬の胸にも實は思ひに餘ることがあるのでありませう。

「宇津木様、さうぞ殿様のお言葉をお聞かせ下さりませ、縁を諦めよと、それが殿様のお言葉でござりましたか」

「能登守殿は、さうは仰有らぬ、さうは仰有らぬけれど」

「わたくしが殿様から前のやうな御情を戴きたい爲に、斯うして恥を忍んで上りましたものか、

「さうか、それを御存知ない貴郎様が恨めしい」

「それは拙者にもわかつてゐるし能登守殿も御諒解であるが……」

「そんなら、お言葉をお聞かせ下さりませ、わたくしは賤しいものでござりまするけれど、殿様のお家には二つこないまことのお血筋……其のお血筋がおいさしい爲に恥を忍んで上りました、殿様のお言葉一つによつて、わたくしは此の場で死にまする」

「又しても短氣な事を」

「いゝえ、短氣な事ではありませんぬ、わたくしの小さい胸で考へて考へ抜いた覺悟の上でござりまする、殿様のお言葉次第によつて、わたくしも此の世には居られませぬ、恐れ多い殿様のお血筋を、わたくしと一緒に彼の世へお件れ申すのが不憚でござりまする、それ故に……」

お君は歎息上げて泣きました。

「能登守殿は近いうち洋行なさるさいふて居られた」

兵馬は要領を外らして何とつかずに斯ういひました。

「洋行なさることは」

「この日本の土地を離れて遠い外國へお出で遊ばすさうじや」

「エ、遠い外國へ」

お君は涙を拂つて兵馬の面を見つめました。問ひ返す言葉にも力がありました。兵馬が何とつか

ずと言つたことが、お君の胸には手強い響きを與へたものゝやうであります。

「能登守殿が仰有るには、自分はもう今の世では望みの無い身體じや、この隙に西洋を見て來たい、いづれ萬事は歸つてから後の事、君女の事も、如何してやつて宜いか自分にはわからぬ、其許の思ふやうに保護して呉れいさのお言葉、歸りは長くて一年、或はまた……」

「よく解りました」

兵馬の説明をお君はキツパリ返事をしました。兵馬の重ねて説明することを必要とせぬほごにキツパリと云ひ切つてしまひました。

「もうお聞き申すこともござりませぬ、殿様は前から西洋がお好きでございました、わたくしの事なんぞを今こゝで申し上げたさて、お取り上げにならう筈がござりませぬ、もうあのお方のお心のうちは、西洋の學問や何かの事で一杯なのでございます、わたくし風情が何を申し上げたさて、それに御心配をなさるやうな、賤しいお方ではござりませぬ、それだけをお聞き申せば、もう充分でござりまする」

お君としては冷やかな言分でありました。その冷やかな云ひ分のうちには、多くの自棄の氣味、自棄と云はないまでも全くの失望をわざと冷淡に云つてのける頼りない心持を、兵馬にあつても見て取れないといふわけではありません。

「悪く取つてはなりません、能登守殿のお身の上を推量すると、拙者にはお氣の毒でお氣の毒で、

さうも立ち入つて強いことが云へない」

兵馬はお君を慰めようとして能登守の身の上に同情を向けさせやうとしました。併しお君は、やはり冷やかな態度を變へるのではありませんでした。

「如何致しまして、わたくしが殿様のお心持を善からぬやうに御推量申上げるなぞと、其のやうな事がありますものか、如何か御無事で洋行をしてお出で遊ばすやうに蔭ながら祈るばかりでございませう、この下されものも其の心で有難く頂戴致しまする」

今まで手にも觸れなかつた袋入の物と帛紗包の二品を手を取つて、お君は懇に推し戴きました。兵馬はなほ何か云ひたいと思つたけれども、何も云ふことが無いのに苦しみました。それは餘りにお君の態度が神妙であつたからであります。餘りによく解り過ぎてしまつた爲に、兵馬は何を云つて宜いかわからないのであります。

「宇津木様、もう夜も更けました、如何ぞお休み下さいませ、わたくしも疲れました、御免を蒙りたうございませう」

お君は二品を膝に置いて言葉叮嚀に云ひましたけれど、兵馬には其れが、いつものやうでなく冷たい針が含まれてゐるやうに思はれてなりません。さりさて何とも其の上に加へねばならぬ言葉はないのであります。

「然らば餘談は明日の事、御免を蒙りませう」

何となく物のはさまつたやうな心持ちで兵馬は己の部屋へ歸つて寝ようとしたけれども、また何となく心がよりであります。

次の間の物音によく心を澄ましてゐるらしかつたが、何に驚いたか兵馬はガバと起つて隔ての襖を蹴開いて、お君の寢室へ跳り入りました。

お君は端座して其の手には、さきほど能登守から贈られたといふ袋入の短刀の鞘を拂つてゐたのであります。

お君は能登守からの短刀の鞘を拂つて、あはやと見える處でした。兵馬は其の手を押へました。

「こゝで御身を殺しては、能登守殿にも申譯が無い、甲州から頼まれた人達へも申譯が無い、これまで苦心が仇になる、短慮な事をなされるな」

兵馬に抑へられたお君は其れを争うことが出来ません。お君としては兵馬の寢顔まるのを待つて用意の上に用意しての覺悟でありました。けれども油断なき兵馬の心に乘する事が出来ませんでした。

「あゝ、わたくしの身は如何したら宜いのでございませう、あの立派な殿様を世間にお面の立たぬやうにしたのも、わたくしでございませう。貴方様に此んな御迷惑をかけるのも、わたくし故でございませう、生きてゐて宜いのか、死んでしまつて宜いのか、わたしには判りませぬ。短刀を取られてしまつたお君は其處へ泣き伏してゐます。

「お君殿、そなたの身の上を頼まれたは拙者、殺して宜い時は此の兵馬が殺して上げる、それまでは不足ながら萬事を拙者にお任せ下さい、必ず悪いやうには致さぬ、若しそれを聞かずに再び此のやうな短慮な事をなさる氣ならば拙者にも了簡がある」  
兵馬は言葉を強くして斯う云ひました。けれどもお君は其れに對して何の返事も出来ないのではありません。

「さあ御返事をなさい、此の上ごもに萬事を兵馬にお任せ下さるかそれがお忌やならば、此の短刀をお返し申す故、この場で改めて自害をなさい、兵馬が介錯をして上げる、介錯した後は此の兵馬も其まゝでは居られぬのぢや」

兵馬はなほ手強く云つてお君の口から誓ひの言葉を聞かうとするらしくあります。

「そのお返事のないうちは此の場を去りませぬ」

兵馬はお君に向つて飽くまで其の返答を迫るのであります。

「宇津木様、わたくしには何もかも、わからなくなりまして、お前様の宜しきやうに」  
兎も角も其の場はお君を取り鎮め、萬事を我に任せろと頼もしいことを云つて力をつけたもの、

兵馬自身によく／＼衷心を叩いて見ると、其れは甚だ覺束ない事です。身一つの處置を如何して宜いかわからないといふのは、お君が自分でわからないのみならず、兵馬にはなほ分つてゐないのであります。慢心和尚から頼まれて引受けて来た時もわかつてはゐない、苦心を重ねて漸く能

登守を尋ね當て、それを計つて見ると、いよくわからなくなりました。

能登守の立場を見れば、それにお君を會はせて自分が歸つてしまふことは如何しても出来ない事でありませぬ。さうかと思つてまた甲州へ連れて戻るわけには行かず……結局、如何すれば宜いの

たか兵馬は迷ひに迷つてしまひました。

迷ひに迷つた揚句に兵馬が思ひ起したのは、道庵先生の事でありました。この人へ眞面目に相談をかける事は張合の無いやうな事だけれど、お君といふ人を暫らく保護して貰う事は或は頼みにならない事でも無いと思ひました。兵馬は此處で兎も角も道庵へ行つて相談しようとする心を定めました。

その翌日、兵馬が道庵を訪れようと思つてゐる處へ、案内があつて一人の立派な武士が兵馬を訪ねて来たといふ事でありませぬ。

「はて、誰たらう」

兵馬は此處へ自分を訪ねて来る立派な武士があらうとは思つてゐない事でありましたが、迎へて見ると、それは南條であります。

成程、今日此處へ訪ねて来るやうに云つてゐたが、前夜の勞働者風の姿のみ顔に残つてゐたから、今斯うして立派な武裝をしてやつて来られると頼には其れと氣がつかかなかつたのであります。南